国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2021

第13号

学校法人国士舘
Kokushikan

国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2021

第13号

学校法人国士舘

Kokushikan

『楓原（ふうげん）』名称の由来

本誌の由来は、創刊号（平成22年3月）の巻頭言「『楓原』を繹（たず）ねる（室長阿部昭稿）」を抜粋して次に示す。

百年史の編纂を進めるにあたり、調査・研究した成果を発表、蓄積するため、年ごとに「国士舘史研究年報」を公刊することにした。年報には「楓原（ふうげん）」の愛称を付す。「楓」は創立者柴田徳次郎が国士舘教育の象徴として、校章や校旗の意匠に用いてきた。「原」は湧き出たばかりの泉を意味し、ものごとの起源を表す。すなわち「楓原」は国士舘教育の淵源を意味する。

沿革史編纂の道のり
―百年史編纂事業の経緯

『国士舘百年史』史料編上・史料編下・通史編　全3冊

国士舘では、時代の節目に、また時々の方針・目的に沿って、その足跡をまとめる試みがなされた。本学における沿革史は、『国士舘商業学校十年小史』（昭11）を嚆矢とし、その後は、『文学部創設二十周年記念論集』（昭54）、『中学校高等学校創立六十周年記念誌』（昭58）など、組織ごとに沿革史が編まれたが、学園が主導する沿革史編纂は、創立80周年を期とした『国士舘80年の歩み』（平9）の発行まで待つこととなった。

国士舘創立百周年に向けた百年史編纂事業は、平成15年発足の編纂委員会により推し進められ、図書館校史資料室（昭51）や国士舘資料室（平元）を経て、平成21年に設置された国士舘史資料室により、令和3年3月『国士舘百年史』全3冊の上梓となり、収集された関連史資料を礎とする本学初の本格的な沿革史編纂が完遂となった。

沿革史編纂のあゆみ

1936（昭和11）年10月
『国士舘商業学校十年小史』発行（学園沿革史の嚆矢）

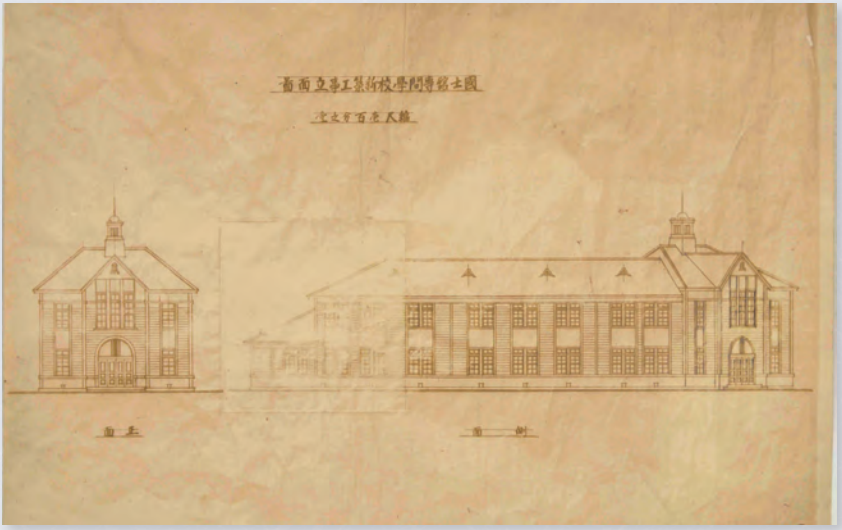
1976（昭和51）年8月
この頃、図書館内に校史資料室設置

1980（昭和55）年11月
校史資料室村中嘉二郎により『柴田徳次郎言論集』発行

1982（昭和57）年頃
創立65周年修史事業が企図されるも発行に至らず

1989（平成元）年4月
総務部広報課に国士舘資料室設置

校史資料室 村中嘉二郎編
『柴田德次郎言論集』（1980年）



1928年頃　国士舘専門学校新築工事立面図（複製　図書館校史資料室旧蔵）
世田谷キャンパス正門付近にあった校舎の図面を撮影したもの。
1976年頃、初の修史部署である校史資料室が図書館に設けられた。

1990（平成2）年5月
『国士館大学新聞』に資料室運営委員湯川次義（資料室運営委員）「所蔵資料からみた国士館の歴史」①～⑪連載（～1991年12月）

1992（平成4）年1月
創立80年史編纂委員会発足

1993（平成5）年3月
委員佐々木宗興が稿本「国士館粗年表資料」（第一次）作成

1994（平成6）年7月
国士館80年史編纂委員会編『3号館物語』発行

1996（平成8）年6月
創立80周年記念事業運営委員会発足

1997（平成9）年11月
創立80周年記念事業運営委員会編『国士館80年の歩み』発行

1988年「国士館資料室準備委員会」手拭
創立者柴田徳次郎（号無徳）揮毫「国士館」。
史料寄贈者に配られた。

1989年4月14日　国士館資料室開所式

1987年、在職卒業生会からの寄付金をもとに資料室の開設が決まり、本学に関わる史料の提供を卒業生らに呼びかけた。資料室設置により、柴田会館4階で常設展示が行われるようになった。

2003（平成15）年4月
理事長室広報課に年史編纂室設置

2003（平成15）年6月
国士舘百年史編纂委員会・90周年記念誌編集部会発足

2007（平成19）年11月
国士舘90周年記念誌編纂部会編『国士舘九十年』発行

2009（平成21）年4月
広報課内資料室と年史編纂室を統合・独立して国士舘史資料室新設

2009（平成21）年6月
国士舘百年史編纂委員会に専門委員会発足

2009（平成21）年7月
『国士舘大学新聞』で「国士舘史資料室だより」連載開始

2010（平成22）年3月
『国士舘史研究年報　楓原』創刊

2003年6月24日　国士舘百年史編纂委員会が発足
第1回委員会の開会に先立ち西原春夫理事長は、「百年史は正史として客観的な分析」を行うものとしたい、と挨拶した。

2015（平成27）年3月
国士舘百年史編纂委員会編『国士舘百年史　史料編』（上・下2冊）発行

2017（平成29）年11月
国士舘創立100周年
国士舘百年史編纂委員会編『ブックレット　国士舘100年のあゆみ』発行

2021（令和3）年3月
国士舘百年史編纂委員会編『国士舘百年史　通史編』発行

2021（令和3）年5月
国士舘百年史編纂委員会解散

『ブックレット　国士舘100年のあゆみ』（2017年）
国士舘創立100周年に発行された、本学の歴史を概説としてまとめた。

『国士舘百年史』史料編上・史料編下（2015年）、通史編（2021年）
『国士舘百年史』は、史料に基づいて編纂された、本学初の学術的な沿革史となった。

『国士舘史研究年報　楓原』
創刊号（2010年）
百年史編纂事業の推進にあたり、調査・研究の成果を公表する場として創刊した。

2021年5月29日　最後の開催となった第26回国士舘百年史編纂委員会

2021年11月13日　第1回学園史講演会
『国士舘百年史』の成果を活用した講演会の開催。講師は佐々博雄元専門委員会委員長。

巻頭言　二〇二一年、新たな第一歩へ

国士舘史資料室室長　長谷川　均

二〇二一（令和三）年は、新たな第一歩を踏み出す年となりました。二〇二一年三月末をもって飯田昭夫先生が室長を退任され、後を受け八月から新室長に着任いたしました。

国士舘史資料室では、長年担った『国士舘百年史　通史編』を昨年度末に刊行し、すでに上梓した『史料編』二冊とあわせて世に送り出しました。本学初の本格的な編纂事業であった『国士舘百年史』三冊を学内外でご活用いただけるよう期待しております。この『通史編』の完成に伴い、百年史編纂委員会は、昨年五月末に今後の学園史編纂の展望を策定してその任を終えることとなりました。長年ご尽力いただいた編纂委員および専門委員の諸先生には改めて御礼を申し上げます。

編纂後は『国士舘百年史』を基礎とし、今後の学園史編纂に向けた諸活動の再開とあわせて、本学の教育研究への活用をはじめ学内外に新たな成果を示す年となりました。『国士舘百年史』を紹介する刊行記念展を梅ヶ丘校舎内で企画したほか、二年ぶりの開催となった国士舘大講堂での創立記念展では、創立者没五〇年に際してその「言葉」をテーマとする企画展を実施しました。創立記念展は、昨今の状況から学内関係者のみの入構制限のため、例年の大講堂を一般公開する東京文化財ウィークへの参加は見送りましたが、同時期の大学楓門祭等に活気を添えました。また教職員に向けた学園史講演会を企画し、沿革史や理念への理解を深める機会を創出するなどしました。学内の活気が戻りつつある一方で、創立者直孫の舘長柴田德文先生、元体育学部長の西山一行先生、当室初代室長の阿部昭先生らの訃報にも接しました。特に阿部先生は、百年史編纂事業の基盤整備を担われ、当室の発足にも尽力されました。本学の発展に長く尽くされた先人のご冥福をお祈りいたします。

本誌『国士舘史研究年報　楓原』は、新たなステップとなるよう今号から表紙等を一新しました。当室では、引き続き本学に関わる歴史的資料の収集・整理に努めつつ、新たな学園史編纂に向けて本誌の内容も一層充実させていく所存です。今後も当室の活動に、変わらぬご支援ご指導をお願い申し上げます。

二〇二二年三月吉日

舘長　柴田德文先生を偲んで

学校法人国士舘　理事長　大澤　英雄

柴田德文先生が、こんなにも早く急逝されるとは、夢にも思わぬことでした。今でも信じられない思いで一杯です。私は、常日頃から先生を「德文先生」とお呼びしていましたので、ここでもそうさせて頂きます。

德文先生は、学園関係者はご承知の通り、国士舘創立者・柴田德次郎先生の孫にあたり、二代目の総長・柴田梵天先生のご長男でありますが、私は国士舘大学の第一期生として卒業し、本学体育学部に助手として奉職した昭和三五年頃には、まだ中学生であった德文先生を存じ上げていたものと記憶しています。その後、德文先生は本学政経学部に学ばれ、次いで大学院政治学研究科へと進まれて、やがて本学政経学部の専任教員として籍を置かれました。また教育・研究の傍ら、大学副学長、理事、評議員など学園の要職の任にもあたられました。

私が、德文先生と親交を深めるようになったのは、先生が米国ニューヨークのセント・ジョーンズ大学での留学を終えて、帰国された後のことでありました。その頃の国士舘は、あらゆる面で大きく変革されていった時代でありましたが、私が体育学部学部長、さらに大学学長を務めた平成の時代においても、体育学部の世田谷校舎から多摩校舎への移転をはじめとして、次から次へと多様な課題と困難な出来事に遭遇した時期でありました。当時、昼夜をおかずそれらの解決に奔走しておりました私に、惜しみないご助力と適切なご教示を下さったのが德文先生でした。

往時の先生のお姿に思いを馳せますと、創立者似の口髭を豊かに蓄えた風貌と共に、先生の大きな度量と強力な指導力、温かい人柄が甦り、また今や再びお会いする

ことの出来ないという深い悲しみと共に、徳文先生への御恩に感謝の念を禁じ得ません。

そして今、柴田徳文先生が舘長として引き継いでこられた建学の精神を、私たち国士舘同人は、一致協力してさらに発展させて参りますことを、ここに改めてお誓い申上げる次第です。

令和三年一一月

舘長　柴田徳文　略年譜

西暦	和暦	月日	年譜
一九四六	昭和二一	六月一七日	東京都世田谷区生まれ
一九六五	昭和四〇	三月	国士舘高等学校卒業
一九六九	昭和四四	三月	政経学部一部政治経済学科卒業
		四月	国士舘大学大学院政治学研究科入学
			国士舘中学校・高等学校講師就任
一九七一	昭和四六	三月	大学院政治学研究科修士課程修了
一九七五	昭和五〇	三月	大学院政治学研究科博士課程単位取得満期退学
		四月	国士舘大学政経学部一部助手
一九七六	昭和五一	四月	政経学部一部講師就任
一九七八	昭和五三	六月	米国セント・ジョーンズ大学大学院センター・オブ・エイジアン・スタディーズ修了
一九八〇	昭和五五	一〇月	国際部副部長就任
一九八三	昭和五八	四月	国際部部長（～一九八六年八月） 国士舘短期大学副学長就任（～一九九一年三月）
一九八四	昭和五九	四月	理事（～一九八七年八月）および評議員（～一九八六年八月）就任
一九八七	昭和六二	八月	大学副学長就任（～一九九一年三月）
一九九三	平成　五	四月	評議員就任（～一九九三年八月）
二〇〇二	平成一四	四月	政経学部一部助教授就任
二〇一二	平成二四	四月	政経学部一部教授就任
二〇一五	平成二七	一二月	国士舘大学アジア・日本研究センター長就任（～二〇一七年三月）
二〇一七	平成二九	三月	大学副学長就任（～二〇一七年三月）
		六月	定年退職
二〇一八	平成三〇	四月	国士舘大学名誉教授
二〇二一	令和　三	四月六日	学校法人国士舘舘長就任 死去、享年七六（行年七四歳）

国士舘史研究年報　二〇二一　楓原　第13号

国士舘史研究年報

目次

巻頭言

二〇二一年、新たな第一歩へ……長谷川　均　9
舘長　柴田徳文先生を偲んで……大澤　英雄　10

論文

水野錬太郎と国士舘の教育　―国士舘の高等教育機関化への関わり……西田　彰一　15
大正・昭和期の国家主義思想・運動研究の課題からみた大民団・国士舘研究の可能性……岡　佑哉　41
政友会と大正昭和における国士舘の教育事業　―労働問題から高等拓植学校へ―……大庭　裕介　69

講演録

『国士舘百年史』刊行記念　第一回学園史講演会
『国士舘百年史』から見えるもの　―青年群像・個性・理念―……佐々　博雄　87

国士舘の思い出

中学校・高等学校での職員奮戦記……望月愉見子　111

令和3年事業報告

……国士舘史資料室　129
1　国士舘百年史編纂委員会並びに専門委員会
1　国士舘百年史編纂委員会
2　国士舘百年史編纂委員会　専門委員会
2　国士舘史資料室の活動
1　調査・収集
(1)　主たる資料調査　(2)　オーラル調査　(3)　主な寄贈資料
2　整理・保存

(1) 資料目録作成状況　(2) 資料電子化・保存処置
3　利用・公開
(1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）　(2) ホームページ
(3) 教育普及活動
4　室の構成
(1) 職員　(2) 施設の概要
5　活動日誌
付　追悼　阿部昭先生

関係規程

国士舘百年史編纂委員会要綱／国士舘史資料室規程

論文

水野錬太郎と国士舘の教育

―国士舘の高等教育機関化への関わり

西田　彰一

はじめに

国士舘大学の前身となった国士舘専門学校の初代専門学校長に就任した人物は、明治末から大正および昭和初期にかけて内務官僚・政治家として活躍した水野錬太郎である。この水野錬太郎は、「内務の大御所」として知られ、内務省の要職を歴任し、原敬に見出されて事務次官に就任。その後三度内務大臣を務め、文部大臣、朝鮮総督府政務総監、貴族院議員としても近代日本政治史にその足跡を残している。

なお水野錬太郎の研究としては、西尾林太郎「官僚政治家・水野錬太郎」『水野錬太郎　回想録・関係文書』（山川出版社、一九九九年）における政治家としての経歴に注目した分析がある。[1] あるいは、旧著作権法の制定における水野錬太郎の関わりや、[2] 水野の朝鮮総督府政務総監としての教育政策や官僚人事の検討、[3] 神社局長時代の水野の活動に焦点を当てた研究など、[4] それぞれの分野の研究の文脈から、各論として水野を論じた研究が多い。[5]

そのなかでも特に国士舘専門学校に水野が初代校長として就任した経緯や、その活動について論じたものとしては、漆畑真紀子の「国士舘を支えた人々―水野錬太郎」が詳しい。[6] 漆畑の研究は、当時百年史を編纂中であった国士舘の所蔵資料や、渋沢史料館の史料を用いた詳細な調査であり、文部大臣辞任後の水野の足跡のひとつを知る手がかりとなる貴重な研究である。だが、同論文における漆畑の水野の思想そのものの評価に関しては、疑問が生じる。漆畑は水野が国士舘に求めた教育は「西洋の智識偏重教育ではなく、東洋の精神主義」であるとして

いる。[7] だが、筆者のみたところ、水野の教育に関する取り組みとは、西洋の智識偏重教育批判と東洋の精神主義評価だけで語り尽くせるものではない。むしろ、国士舘の東洋的な教育を無視してはならない大事な問題だと勘案しながらも、それを基盤としつつ、体系だった知識教育を根付かせるというところにあったのではないかと考えている。そこで本稿では、水野錬太郎の教育歴を振り返りつつ、国士舘との関わりからその目指した知のあり方について述べていきたい。

文部大臣時代の水野錬太郎（1928 年）

一、水野錬太郎が受けてきた教育について

まず水野が受けてきた教育内容を中心にその生い立ちを振り返ってみたい。

水野は慶応四（一八六八）年一月一〇日（西暦換算で一八六八年二月三日）に秋田藩の分家の屋敷があった浅草鳥越で父立三郎、母八重の長男として生まれた。[8] ほかに姉二人（長姉千賀子〈服部〉、次姉総子（ふさこ）〈山田〉）がいる。

水野自身は両親について多くを語らないが、父水野立三郎は江戸定府諸侯の役目を果たしていた秋田藩の分家に仕えていた。[9] のちに岩崎藩と称するこの分家は、長く自領を持たない藩であったが、本家の秋田藩が新政府側につき、戊辰戦争で功績があったことが認められ、紆余曲折を経て岩崎（現在の秋田県湯沢市）の地に二万石の領地が与えられ、一八七〇（明治三）年三月に立藩となった。立三郎自身の持ち高は二五石とそこまで高くはなかったものの、『秋田県史』によれば、秋田新田（岩崎藩の前身）の執政公議人として、初岡敬治とともに公議所の議事に参画していたと記されている。[10] だが、立藩し

て間もなく資金繰りの問題で行き詰まり、さらに一八七一年の廃藩置県によってすぐに廃藩となったことから、「藩制は殆ど名目のみのこと」という悲哀に立ち会っている。[11] 廃藩置県後の水野立三郎は東京に戻った後、大阪、東京へと移動し、一八八二年に四四歳で死去したと伝わっている。母八重もその前年の一八八一年に亡くなっているので、水野は一〇代の頃に両親を喪ったことになる。[12]

早くに両親を喪った水野であったが、このために金銭的に苦労したということは記していない。「書物なども録々買うことが出来ず、極めて苦学した」と回想はしているものの、当時のありふれた学生の貧乏暮らしの範疇でのことであったとし、両親の死で苦労したとは書かれていない。[13] 共立学校への入学に前後して両親を相次いで亡くしているにもかかわらず、学校を退学・休学した形跡はないのである。そうならなかったのは後ろ盾となった存在がいたからだと推測できる。その後ろ盾とは遠山一族である。[14] 遠山一族は埼玉県比企郡（現在の川島町）の豪農で、（邸宅内に梅林があったため）「梅屋敷」と呼ばれる川島郷きっての名家であった。[15] その遠山一族本家の出身であり、日興証券（現在のＳＭＢＣ日興証券）の創業者である遠山元一（一八九〇～一九七二年）の回想によれば、遠山家と水野家は遠縁にあたり、遠山元一の祖父が「練太郎（ママ）氏の大学卒業までの学資を保管（ママ）したとかいういきさつがあったものらしい」と伝わっている。[16]

こうした親族の資金援助を得て、水野は勉学に取り組むことになる。水野は少年時代に本所の私塾で英語、漢学、数学を学んでいた。[17] また、小学校の代用教員を務めたり、写本を売って学資の足しにしたりしたとのことである。[18] だが、私塾での教育に満足できなくなり、一八八〇～一八八一年頃に神田の共立学校（のちの開成中学、高校）に入学する。この共立学校では当時高橋是清や大岡育造、鈴木知雄が教員として働いていた。水野も英語を高橋から学んだ。当時の教育法は試験の成績に応じて上位のクラスに進めたため、当時から優秀だった水野は抜きんでた早さで進級することになった。ただこの当時はまだ辞書も簡単に手に入る時代ではなかったので、お茶の水のニコライ聖堂の図書館に通って、英語の辞書を借りて勉強をしていた。[19] そして一八八四年に大学予備門（のちの旧制第一高等学校）の試験を受けて一一七名中

三位で合格。正岡子規や夏目漱石と同期入学となっている[20]。予備門時代は工学、特に「四面環海の日本の将来を考へるとこれからさきは船舶といふものが必要になるだらう」と考え、造船学を当初志そうとしていたが、図画を描くのが苦手であったので工科は断念し、一八九九年に帝国大学法科大学の法律科に進学し、穂積陳重の下で英法を専攻する[21]。

その後一八九二年に大学を主席で卒業したあとは、官庁に就職するつもりであったが、師である穂積陳重から特に乞われて、その義父である渋沢栄一と面談し、第一銀行で働くことになる[22]。西尾林太郎氏によれば、官庁には大学出の人材が多いが民間には少ないとした穂積の考えがあってのことだということである[23]。

第一銀行に入行した水野は、当初は算盤と向き合うばかりの銀行の実務をつまらないと感じ、身が入らなかったが、当時まだ銀行に法学士は少なかったことから、「渋沢（栄一―引用者注）さんの紹介で毎週一二回商業会議所へ行つて法律の講釈をする」機会を獲得している[24]。水野自身にとっては、財界の重鎮たちを相手に法律の講義をしている方が、銀行での実務よりも面白かったので熱心に取り組んだ。

やがて入行した翌年の一八九三年に、梅謙次郎の紹介で、農商務省の農務局長であった藤田四郎と面会し、鉱業条例の改正のために大学出の法学士の力が必要だと入省を依頼され、農商務省鉱山局に移ることになった。当時の農商務省は大学を出た法学士（田中隆三、原嘉道）が相次いで退職していたため、水野に白羽の矢が立ったのである。この農商務省で水野は鉱業条例改正案を起案し、鉱業法案を作った。また、山林局において最初の森林法案を起草した[25]。

こうして農商務省で法律起案を主な仕事としていた水野であったが、今度は内務省の都筑馨六土木局長から内務省に移るように依頼があった。最初は戸惑いもあったものの、農商務省の次官であった金子堅太郎と都筑の間で話し合いがついたことから、一八九四年五月に内務省参事官として内務省に転属した[26]。以後一九一二（大正元）年に貴族院議員勅任を機に役人を辞めるまで、内務省の官僚として地方自治、警察、土木、神社などの事務に関係した[27]。

経歴としては、一八九四年に内務省参事官として入省

したことを皮切りに、内務大臣秘書官（一八九六年）、内務省書記官（一八九八年）、神社局長（一九〇四年）、土木局長（一九〇九年）、地方局長（一九一一年）を経て、翌一九一二年には貴族院議員に就任。一九一三年には内務次官まで出世する。また、次官就任に前後して、上司（内務大臣）であった原敬の紹介を受けて、立憲政友会に入党する（貴族院議員としては交友倶楽部に所属）。そして、一九一八年に寺内正毅内閣で内務大臣を務めたあと、原敬内閣での朝鮮総督府政務総監（一九一九年）を経て、加藤友三郎内閣（一九二二年）、清浦奎吾内閣（一九二四年）と内務大臣を三度務めている。

その後水野は、一九二七（昭和二）年に田中義一内閣で文部大臣に就任するが、翌一九二八年に久原房之助の入閣に端を発する一連の騒動に関わることになる。久原は田中首相の旧友であり、実業家ではあったものの、前年の衆院選挙で当選したばかりであった。久原はのちに政友会（久原派）の総裁を務める人物であるが、この時点では政治経験は殆どなかった。そのため水野は強硬な反対意見を表明し、田中首相と対立。水野が文相辞任の辞表を提出する事態となった。これは、一旦は昭和天皇の優諚（すなわち慰留の言葉）をもって収まったが、その優諚が実質的なものであったとする水野と、優諚は形式的なものに過ぎず、直前に水野が自発的に辞表を撤回したとする田中との間にズレが生じた。これが天皇の政治利用であるとしてマスコミに糾弾され、政治問題に発展し、水野は最終的にその騒動の責任をとって同年五月に辞任に追い込まれた（水野文相優諚問題）[28]。この事件によって原敬暗殺以降後ろ盾を失い、不安定化していた水野の立場はますます弱いものとなり、一九三四年には鈴木喜三郎政友会総裁と国策審議会への参加をめぐって対立し、政友会を離党することになった。

文相辞任後の水野は、貴族院議員としての務めを果たす傍ら、神社制度調査会委員長や大日本音楽著作権協会会長、港湾協会会長などいくつかの政府委員会の会長や名誉職に就任する。本稿で言及する国士舘専門学校校長もそのひとつに分類できる。だが、戦時中に日満華の連携強化の推進機関である大日本興亜同盟副総裁（のちに興亜総本部統理）を務めていたことなどを理由に、第二次世界大戦後に戦犯の指定を受け、軟禁対象となった。最終的に一九四七年に戦犯指定は取り下げられたもの

大学在学時の水野錬太郎
（1889～1892 年頃）

高等学校在学時の水野錬太郎
（写真左、1884～1889 年頃）

の、公職追放処分となり、高齢であったこともあり、その後は公職に就くことはなく、一九四九年に死去した。

二、国士舘創設の経緯と政友会人脈

共立学校、大学予備門、東京帝国大学法科大学と当時でも最先端の近代的な教育を受け、晩年はやや不遇の感が否めないものの、藩閥に頼らない一介の士族の家から、勉学によって身を立て、政府の高官となり、博士さらに大臣として栄達を究めた水野であったが、ここで国士舘と水野錬太郎の関わりについて言及したい。水野錬太郎と国士舘が関係を持ち始めた時期は、国士舘の歴史においても大きな転換点となる時期であった。国士舘は一九一三（大正二）年に「早稲田大学の『筑前学生会』、柔道部、剣道部、雄弁部の学生や卒業生を中心に、当時の世相を憂いた都下の青年学生による社会教化啓蒙団体」である青年大民団がその母体となっている。[29] 青年大民団は、のちに学園経営の中枢を担う柴田徳次郎を中心人物とし、機関誌『大民』を創刊する。また青年大民団は一九一七年夏から秋にかけて起きた早稲田騒動に関与し、

騒動に敗れたことで、母校の早稲田に望んだ高等教育の新体制を自力で果たすべく、教育への関与を強めることになる。[30]

その後一九一七年に私塾国士舘を創立、その後一九一九年に世田谷の松陰神社の隣接地に移転・財団法人化し、一九二五年には五年制の中学校を創設し、同年に農商補習夜学塾を翌年には高等小学校卒程度の四年制の国士舘商業学校を創設するなど、経営拡大と高等教育への進出を図っていた。[31] 特に、一九一八年一二月の大学令によって私立大学の設置が相次ぐようになっていたことは、国士舘にとっても、高等教育機関設置の宿願を果たすには良い環境が整いつつあった。そこで、一九二六年以降、学内教育機関が整備されていったことを受けて、国士舘維持委員会の支援のもとで、新たな高等教育機関設置の検討が本格化することになった。

一九二六年六月三日に、渋沢栄一が中心となり「国士舘完成長老懇談会」が開催された。[32] 参加者は、渋沢のほか頭山満、野田卯太郎、徳富猪一郎（蘇峰）ら長老と、国士舘の理事・評議委員の柴田徳次郎、花田半助、渡邊海旭である。この会合では専門部と文科・法科の大学創設構想と経費二七〇万円の募金計画が立案された。この結果は維持委員会に諮られ、各方面に資金援助の依頼がなされたが、当時の経済状況の問題もあり、大学の設置には挫折する。これに代えて財政的に負担が少ない専門学校（修業年限：四年制、各学年八〇名の計三二〇名）と実務学校（修業年限：一年制昼夜二部制の各五〇名）の創設に計画変更となり、具体化することとなった。[33]

その後校地を拡張したうえで、一九二九年（昭和四）の一月に国士舘は専門学校令に基づく認可申請を文部大臣に提出。[34] 同年三月に設置許可を受けて、国士舘専門学校が創設された。[35] 国士舘が大学を設置したのは、新制大学に移行してからであるので（一九五三年に短期大学設置、一九五八年に新制四年制大学設置）、旧制度下においては大学の設置には至らなかった。しかし、戦前の教育制度における専門学校は、旧制中学校や高等女学校の卒業者、またはこれと同等の学力保持者を対象とした、専門的職業人を育成する高等教育機関として位置づけられていた。[36] そして、国士舘専門学校は、体育・武道（主に柔道・剣道）の中等学校教員育成を目的とする教育機関となった。これは大日本武徳会武道専門学校と日本女

子体育専門学校に次いで日本で三番目の事例となった。[37]

なお、この国士舘専門学校の創設にあたっては、政友会の大物代議士であった野田卯太郎が青年大民団の創設初期から顧問を務めており、また大学創設構想の実現のために、生涯をかけて奔走した。[38] 結局、野田の生前には高等教育機関の設置は果たせず、また当初の構想であった大学の設置には至らなかった。しかし、まずは専門学校として出発することで後年に望みをつなぎ、専門学校の開校に際しては卯太郎の子息である野田俊作が開校式に招かれている。[39] また、同じく政友会の代議士である田中義一も「国士舘に参観に来り、後毛利公を説き、該地（国士舘の隣に毛利公爵家が有していた土地のこと―引用者注）を国士舘に寄附せしめた」ことから、そもそも国士舘と政友会の結びつきが専門学校の創設に際して大きな影響力を持ったとみてよいであろう。[40]

この専門学校の初代校長に就任したのが水野錬太郎である。水野が初代校長に就任した経緯は、一九二八年一一月一日に維持委員の山崎達之輔、徳富猪一郎（蘇峰）と法人理事の柴田徳次郎が水野を訪問して、「委員一同の希望を開陳の結果同氏の快諾を得」たことからはじまる。[41] なお『国士舘百年史　通史編』によれば、山崎達之輔が水野の文部大臣在任時からの文部政務次官であったので、交渉が円滑に進んだのではないかとのことである。[42] こうして、一九二九年三月に水野が初代校長として就任することへの認可が下り、四月の開校式を迎えたのである。[43]

専門学校の初代校長に選ばれた当時の水野は、一九二八年五月の水野文相優諚問題で、時の総理大臣兼政友会総裁であった田中と決裂し、文部大臣を辞職してまだ半年後のことである。また同じ政友会に所属していたとはいえ、国士舘専門学校の創設に大きな影響を与えた野田卯太郎が属していた党人系とは異なり、それと対立していた原敬直属の官僚系の出身でもある。[44] 人物的な系列としては、それまで国士舘に関与した人物とは遠い系譜に位置している。また、出身も水野は東京・秋田であるので、九州出身者が多い国士舘の関係者とは地縁的にも距離がある。実際、財団法人国士舘の役員および維持委員会役員の名簿（一九二六年）には、水野の名前は記載されていない。[45] 国士舘に対する校長就任以前のつながりとしても、国士舘の講堂で行われた野田の葬儀に参列した

以上の記載は管見の限り見当たらない。[46]

しかしそれでも水野が初代校長に選ばれたのは、水野自身の個性に共感してというよりは、前文部大臣である水野を後ろ盾とすることで、円滑な学校の創設と経営を期待したがためであると考えられる。一方で水野自身にとっても生前の野田とは党内では対立的な立場にあったとはいえ、第二次護憲運動後の水野の政友会復党問題では、野田卯太郎の世話になったことを野田の没後に回顧している。[47] また野田も、生前ほかの代議士に水野の復党に安堵したことを告白していることから、お互いの能力を高く評価しあう関係であった。[48] そのため、野田にゆかりの深い国士舘の初代専門学校長への就任を受諾したのだと考えられる。

三、国士舘専門学校における水野錬太郎の活動

さて水野は専門学校の開校式に出席して、教育勅語の奉読と式辞を述べている。[49] また、専門学校設置の挨拶において、近年「浮華軽佻（ふかけいちょう）」により「奇矯過激の思想」に影響をうけてしまっている青年子弟たちを教育するために、「我が国体精神を涵養し、東洋固有の文化の精髄を発揚」することで、質実剛健、世界に雄飛するに足るべき人材を養成するために国士舘専門学校を興し、「将来中学校に於て国語漢文教授の任に当り兼て武道の師範たるへき者を養成せん」と唱えている。[50] 要するに、社会主義の影響を受けてしまっている青年たちの思想を改善するために、国体精神を涵養し、東洋固有の精神を起こして、将来中学校にて国語や漢文の教育者、さらにそれと兼て武道の師範となるべきものを養成することがこの専門学校の特質であると主張しているのである。ここには『国士舘百年史　通史編』が指摘するように、[51] 関東大震災後に顕著化した大衆的な消費享楽文化に対する批判や、社会主義の台頭に対する危機感の表れがみられる。また、この点に関しては、水野は「現在の大学の風は社会主義赤化運動を賛美せねば時代遅れの如き風をなせり、而して之を匡止（きょうし）するにサーベルとステッキにては不可能なり、模範的学府たる国士舘的智見の力に依るの外なし」を、大学設立の趣旨の一つとして唱えた国士舘の長老たち（渋沢、徳富、頭山）と同様の立場に立っていたと言えよう。[52]

だが、これら長老たちの思想と比較すると、開校式における水野の挨拶は、どうも当時の保守派の言説に寄せた型どおりの挨拶に過ぎないようにも読める。まず水野にとって渋沢は恩人の一人であるが、渋沢のように儒教倫理を重視した統一規範には、さほど興味を示していない[53]。また、当時亜細亜モンロー主義を唱え、アジアの民族自決と反米意識を表していた蘇峰や、国士舘を創設した柴田の思想上の師であり、中国と連帯した西洋への対抗を説いた頭山と異なり、水野にとって西洋は終生学ぶべき対象であった[54]。また水野が国士舘で行った仕事の内容は、史料から確認できる範囲では、ほぼ名誉職としての名義貸しと挨拶に終始していると言ってもよい状況で、教育事業そのものへの積極的な働きかけを目にすることはできない。そもそも専門学校の校長を務めていた頃（一九二九年四月～一九三五年三月）の水野は、文部大臣を辞めた後とはいえ、貴族院議員としての仕事をはじめ、神社制度調査会委員（一九二九年一二月～）、衆議院議員選挙改正審議会委員（一九三〇年一月～）、社団法人東洋協会会長（同年四月～）、大日本作曲家協会会長（一九三一年～）、法制審議会臨時委員（一九三二年七月～）、全国神職会会長（一九三三年五月～）と複数の協会の会長や政府の臨時委員を兼務していたため、国士舘に日常的に出勤していたとも考えにくい。

ここで『国士舘百年史　史料編上』からわかる範囲で取り上げると次の通りとなる。まず水野は、専門学校と同年に設置認可を受けた国士舘実務学校の校長も引き受けている[55]。この実務学校は中学校卒業程度の学生を対象とした修業年限一年の学校であり、私立学校令で定められた各種学校に該当する。商工科と拓植科の二科が置かれて、各科定員五〇名の実業家を養成すると位置づけられていた[56]。ただし、専門学校の整備を優先したため、実際には生徒募集が行われずに開校延期となった。その後拓植科は独立・分離し、ブラジル移民を目的とした上塚司を校長とする国士舘高等拓植学校として発足することとなり、商工科のみとなった実務学校はそのまま生徒募集はなされず廃校となっている[57]。

その後移民事業は、上塚が教員および生徒の大半を引き連れ分離・独立したことで振り出しに戻り、移民先は南米から満蒙へと目が向けられるようになる。そこで、国士舘の母体となった教化運動団体青年大民団を改組し

た大民倶楽部（一九一九年発足）の新事業として、満州移民を推進するようになり、国士舘もまたこれに関与する[58]。大民倶楽部は満州事変の戦死者を弔う一大法要を行うのであるが、この際に大民倶楽部の顧問の一人として水野の名前が載っている[59]。また、その後に行われた大民倶楽部の規約においても顧問として記名され[60]、また大民団遊説隊の後援者の一人として署名がみられる[61]。その関係で、満州移民の送り出し先の教育機関として設けた満洲鏡泊学園の設立にも関与することになり、一九三二（昭和七）年一一月二四日の「鏡泊学園設立賛同趣旨文」にも署名している[62]。また一九三二年一一月四日の財団法人国士舘の評議委員会議事録において法人の新顧問の一人として数えられたほか[63]、公的行事としては一九二九年一二月五日に東久邇宮稔彦王が国士舘を訪問した際に奉迎し[64]、その案内役も務めている（写真）。

水野は校長就任後の約四年後の一九三三年四月に、病気を理由に辞任届を提出している。そこからさらに二年後の一九三五年四月に辞表が受理され、二代目校長の副島義一（衆議院議員・国士舘中学校長）が推挙されるに至った[65]。その後水野は「財団法人国士舘総長並ニ国士舘専門学校名誉校長」となり、国士舘との関係はより一歩引いたものとなった（『国士舘百年史　通史編』二〇七頁によれば一九四一年四月頃まで右の肩書で在任）[66]。水野は辞任の理由を病気と称しているが、貴族院議員を

東久邇宮稔彦王来学（1929年12月5日）

はじめとする当時就いていたほかの公職は、特に辞職せずに続けている。そもそも、二年もの間校長の辞職願が宙に浮いた状態になっていたこと自体が異常事態である。これを考えると、本当に病気であったというよりは、当時国士舘中学校の校長でもあった柴田徳次郎の理事辞職勧告運動に端を発する国士舘騒動が一九三三年の五月から始まるので、それを察知して、巻き込まれる前に辞職願を提出したとすべきであろう。[67] 実際に柴田の回顧によれば、柴田に対して末永一三が反旗を翻したことを水野に相談したところ、「柴田君もここまで成功したから、他に転向したほうがいい。学校のことは山崎達之助君が『任せとけ』というから、僕も学校には当分出ぬ」と言って、対応を拒否したとのことである。[68] おそらく水野としては、実質的に経営に関わっていないにも関わらず、スキャンダルに巻き込まれることを恐れて辞職願を提出したのであろう。

四、西洋的知識人としての水野錬太郎

このように、水野は専門学校設置の挨拶において、国体精神や東洋文化を強調し、国士舘の活動に必要に応じて協力していたのであるが、どこか型どおりの挨拶であったし、校長としての仕事もまた、任された仕事を淡々とこなすに過ぎない内容であった。のちの国士舘騒動に関しても、問題解決に向けての積極的な介入はなさず、むしろ騒動に巻き込まれないように身を引き、自身に火の粉が降りかからないタイミングで退職届を提出している。

そもそも先に少し触れたように、水野自身はそこまで国体精神を主張するような人物ではない。「国民の思想並に感化を支配する」「国風」「国粋」を重視し、「偉人の表彰、名勝旧跡の保存」をせよと書いた論文もあるが、それについても「欧米諸国の実例は我国に於ても大に学ぶべきことであらうと思ふ」ということで、欧米諸国の事例に倣った「国風」および「国粋」の保存の呼びかけなのである。[69] 水野錬太郎の基本的な立ち位置は、「文化の点よりせば、未だ欧米の諸国と比肩するに足らずとなし、眼光頗る炯々たるものあり。今や我邦は既に露国に勝ち、韓国並に満洲を我治下に収めて、大に国勢を振張したりと雖も、物質上の進歩に至りては、尚ほ彼に一籌

を輸することを認むるの止むを得ざるものあり」という自身の著作である『他山之石』の巻頭の言葉に尽きる。[70] 要するに、欧米に比して文化的に遅れた日本をいかに西洋化させるかという啓蒙主義的な立場が、水野にとって基本的な考えなのである。

なおこうした西洋を手本とした日本の発展を志すという考え方については、国士舘専門学校の校長となった頃（一九二九年の発言）と比較してもそれほど変わらない。例えば田子一民の思想善導運動についての共鳴も、第一次世界大戦後の社会不安に対応するためには、「我が国体の精華を発揚することに意を致さなければなりません」としつつも、国民の思想善導のためには、現在国会で展開されているような空理空論ではなく、国民の生活問題に即したものとならなければならないと主張する。[71] そのためには、イギリスの議会のように「肉の販売価格に就て意見を戦はし、住宅問題や、労働賃銀のことに就て実際の事実に即して議論をするが如き、又伊太利のムツソリニー首相がパンの製造方法に付き、若しくはカツフエーや演舞場の夜間禁止や、新聞紙々面の制限に関し法令を発布したるが如き、国民生活の実際問題に就き苦心したることに顧みれば、実に大いなる相違があります。為政者は勿論政治に関与する者は深く茲に思を致さなければならぬと思ひます」と述べ、日本の国会の空理空論ぶりと対照的に、イギリスやイタリアの実際の生活に入り込んだ、具体性に富む社会政策が評価されているのである。[72]

また普通選挙に際しては、政治的常識とその実施のための知識が必要であるとして、一九二五（大正一四）年に政治教育協会という社会教育団体を結成して、普通選挙の理念と公正な投票の呼びかけを行っている。この際にも日本に相応しい選挙の実現を主張するために、国体の精神の重要性は一応説かれるのであるが、これも当時としてはそこまで強調されたものではない。[73] むしろ、「政治道徳」「政党徳義」に基づいたイギリスの二大政党政治の実現を理想の状態としており、日本にもそれを根付かせるべく、「政治的知徳の増進と政治的訓練」を政治教育として実践するべきであるということを説いているのである。[74]

社会主義に対しても、水野の態度は実はそれほど拒絶的ではない。一九二三年に前外務大臣で、日露協会会頭

でもある東京市長後藤新平が、ソ連の中国大使ヨッフェを日本に招き、日本とソ連の国交回復のための私的な交渉を始めたヨッフェ来日問題に際して、日露貿易の再開のために積極的にヨッフェを歓待する後藤新平と、これに反発する治安当局の少壮派官僚の間を取り持って、内務大臣として自身はあくまでも中立的態度をとっている。[75]

また、文相時代には三・一五事件以降の共産党の取り締まりに際して、表向きに大学自治は認めたものの、東大総長の小野塚喜平次らに今後の対応を問い詰めて、新人会の解散や、当時京都帝国大学教授だった河上肇に辞職を求めるように大学側に忖度させた。[76] その一方で、社会主義文献の積極的取り締まりには暗に反対しており、満鉄調査部に勤務していた子息の政直（まさなお）が社会主義者と交わり、自宅に発禁図書を持ち込むことも咎めなかったことなどから、社会主義に関しても絶対に容認しないという立場にたった人物ではない。[77]

また、根本的な問題として、専門学校設立当時の学校の教務は、すでに高等部の段階で、館長の柴田と学監の花田代助と総務会計の喜多（山田）悌一が運営を取り仕切り、教学についても私塾時代には阿部秀助（慶応義塾大学教授）が、その後高等部の開設にあたっては長瀬鳳輔（陸軍参謀本部編修官、のち国士舘高等部学長）が、阿部と長瀬の死後は下位春吉（詩人・運動家・イタリアファシズム運動を日本に紹介する）が寄宿舎生活（いわゆる「国士村」）に基づく文武両道の教育を行うという教育方針を固めており、水野自身が直接教務や人選に口出しする余地はなく、また水野も介入するつもりはなかったと考えられる。[78] 国士舘専門学校の教師陣も、その前身となった国士舘高等部から継続している者が多く、武道専属の講師を除けば、その殆どは東京帝国大学や東京高等師範学校で西洋的な学問を修めた人物ばかりであった。[79] あらためて水野が何か介入したような形跡は、見当たらないのである。そのため、水野の専門学校校長時代は、実質的には名誉職であったと考えたほうが自然なのである。

五、国士舘の高等教育機関化への道と水野錬太郎

ここまで論じてきたように、水野が国士舘で行った活動のほとんどは名義貸しであり、事実上の名誉職であったとみてよい。また、国士舘の経営に大きな影響を及ぼした長老たちとは思想的にも立場的にもかなりの隔たりがある。そのため、国士舘騒動の直前に辞表を提出するという消極的な態度が目立つのも仕方ないのかもしれない。

だが、水野の専門学校の校長就任は、まったく何の意味もなかったのかと言えば、そんなことはない。水野の校長就任は、国士舘の歴史にとってひとつの象徴的な出来事であったのではないだろうか。それは、前文部大臣であり、官僚としての学知を究めた水野が校長に迎え入れられたことで、高等教育機関としての体裁が整い、戦後の新制大学へと拓かれていく道筋がついたということである。要するに、国士舘が近代的な高等教育機関として確実に日本の教育制度に位置づけられ、専門学校として確立されたことを象徴するのが、水野の専門学校校長就任であると言えるのではないかということである。

そもそも専門学校としての国士舘の教育は、当時人材的価値が高まりつつあった、武道教員の養成を担うことを企図するものであった。大日本武徳会の副会長であった西久保弘道は、日露戦争後の学生たちを中心とするスポーツの流行による「チャンピョン」熱の弊害と国民の虚弱化を嘆き、一九一九（大正八）年頃から学校体操における撃剣・柔術の剣道・柔道への名称変更と、「実践的修身科」としての「武道科」の独立教材化を訴える建議書を国会に提出するなど、武道を実践的道徳の教材として学校教育に取り入れるべきだと唱える運動を起こしている。こうした西久保の運動は、文部省内の学生スポーツ批判（スポーツの流行による学業疎外、怪我の増加、競技に熱中するあまりの公徳を無視しているという批判）や、西洋人に劣る日本国民の体質改善問題、銃後の身体的練磨による基礎力向上問題と結びつき、徐々に力を増すようになる。その結果、一九二六年年四月の中学校・師範学校令施行規則の改正、同年五月の学校体操教授要目の改正によって、撃剣・柔術が剣道・柔道に改称された。さらに一九二八（昭和三）年の三・一五事件以

降、学生の思想善導の一環として、一九三二年一月に国民精神を涵養する体操科の必修教材として位置づけられることになった。[80] すなわち、国士舘がこれまで力を入れてきた武道関連の教育が、国民精神を涵養する体操科の必修教材として認定されるようになってきたのである。

この流れに追い風を受けて、当時の国士舘専門学校は、学校制度の枠組みとしては、武道関連の教育に力を入れつつ、師範学校・中等学校・高等女学校の教員への無試験検定に合格できる学校となることを目指すようになった。そして一九三二年に申請の結果、一九三三年三月以降の卒業生に武道関連の無試験検定合格資格が、やや遅れて一九三六年に国語、一九三八年に漢文の無試験資格がそれぞれ適用されるようになった。[81] これによって国士舘専門学校は、「国語」「漢文」「剣道」「柔道」の教員無試験検定資格を受け、卒業要件とは別に発行できる権限を獲得したのである。特に武道関連の教員免許状を取得できる学校は当時まだ少なく、無試験検定合格に基づく「許可学校」に限れば、一九二一年に大日本武徳会武道専門学校がその資格を獲得して以来国内二例目であり、その需要は多かった。そのため、国士舘専門学校は武道関係の教員免許状の取得が比較的容易であるという特色を有することになり、「西の武徳、東の国士舘」とその名を全国に知られるようになったのである。[82] 「将来中学校に於て国語漢文教授の任に当り兼て武道の師範たるへき者を養成せん」という水野の開校式の言葉は、その狙いに関わっているのではないだろうか。この学校経営の方針を立てたのは柴田ら従来の国士舘の幹部たちであるが、近代高等教育機関としての国士舘が発足するにあたって、水野の権威が求められ、水野本人もまたその役割に応えたわけである。

おわりに

このように、水野と国士舘の関わりについて改めて検討してみると、水野は東洋の精神主義を評価した人物であるというよりは、むしろ西洋由来の教育体系を重視した人物であるということがわかる。国士舘のほかの幹部たちと比較すると、欧米に対する危機意識や、国家に対する熱烈な愛国の情念と比較すると、水野の国体精神の強調はどこか型どおりで、良くも悪くも心情に迫る部分

が弱い。だが、それは彼自身が国家とはわざわざ熱誠を必要以上に示すべき対象ではなく、本当の愛国とは現実に役立つ体系だった理知を確立することにあるとみなしていたと考えるべきであろう。水野が目論んでいたのは、知と徳による秩序だった国家の確立なのである。

水野が目指していたのはあくまでも安定した国家の経営であり、国体精神の主張はそのための要素のひとつでしかなかった。だが、確かな国家観を有した旧制中学校や師範学校・高等女学校の教員、特に需要が高まりつつあった武道の教員の育成を図るというところに関しては、水野自身反対するものはない。むしろこうした教員を育成することによってこそ、安定した国家の経営を実際に果たすことができると考えたのではないだろうか。ここに水野が専門学校の初代校長を引き受けた秘密があるように考えられるのである。

※本稿はＪＳＰＳ科研費（二一Ｋ一三二三八）の助成を受けたものである。

〈注〉

（1）西尾林太郎「官僚政治家・水野錬太郎」尚友倶楽部・西尾林太郎編『水野錬太郎　回想録・関係文書』（山川出版社、一九九九年）。以下『回想録』と表記する。

（2）大家重夫『著作権を確立した人々―福澤諭吉先生、水野錬太郎博士、プラーゲ博士』（成文堂、二〇〇四年）。

（3）水野の教育政策に注目した研究として、稲葉継雄『朝鮮植民地教育政策史の再検討』（九州大学出版会、二〇一〇年）、「文化政治」の実施と官僚人事を検討した研究として、李炯植『朝鮮総督府官僚の統治構想』（吉川弘文館、二〇一三年）がある。

（4）藤本頼生「内務官僚水野錬太郎の神社観と神祇行政官僚の系譜」『神道と社会事業の近代史』（弘文堂、二〇〇九年）。

（5）ほかに国会図書館の水野関係文書や学習院に寄贈された水野の蔵書の整理状況を報告した鹿島晶子「水野錬太郎・政直旧蔵書籍・雑誌について」『東洋文化研究』第七巻、二〇〇五年がある。

（6）漆畑真紀子「国士舘を支えた人々―水野錬太郎」『国士舘研究年報　楓原』第四号、二〇一二年。

（7）前掲漆畑『国士舘研究年報　楓原』第四号、二一五頁。

（8）水野錬太郎「懐旧録・前編」（一九四五年）前掲『回想録』九～一〇頁。

（9）岩崎藩は秋田藩第三代藩主・佐竹義処が弟の義長に新田二万石を蔵米で分地したことにはじまる、領地を持たない支藩であった。代々壱岐守を世襲したので壱岐守家ともいう。

（10）秋田県編『秋田県史』第四巻（秋田県、一九七七年）四七三頁。

（11）前掲『秋田県史』第四巻、四七七頁。

（12）もっとも水野錬太郎の孫の水野政一が家伝で伝えるところによれば、錬太郎の父の立三郎は秋田に戻ってから数年して行方が分からなくなったと言われている。その理由についても不明で、当時水野の長男である水野政直と交流があった長谷川如是閑は、政直に立三郎は秩父事件に加担して、行方不明になったのではないかと語っていたそうである。（水野政一「祖父水野錬太郎と『明治』という時代」〈二〇〇二年〉大家重夫編『明治三十二年・貴族院の著作権法審議―貴族院・著作権法・水野錬太郎』〈青山社、二〇二〇年〉三六一頁。）水野立三郎が行方不明になっていたことが公に秘匿され、その後死去が確認されたのか、それとも行方不明になっていたことが誤伝なのかは現時点では史料的な決め手を欠くのでわからない。だが、小藩とはいえ藩の執政公儀人をつとめたほどの人物である水野立三郎について、その後の活躍が目立たないことや、子息である水野錬太郎がそのことについて生前全く触れなかったことと併せて考えれば、廃藩置県後は自身が思う仕事には就けず、不遇をかこったまま行方不明・あるいは死去したのは間違いなさそうである。

（13）水野錬太郎「半生の思い出を語る」（一九三七年）松波仁一郎編『水野博士古稀記念―論策と随筆』（水野錬太郎先生古稀祝賀会事務所、一九三七年）七五六頁。

（14）前掲大家『著作権を確立した人々』によれば、日

興証券の創業者である遠山元一の曾祖父遠山久大夫（錬太郎の母八重の母歌が久大夫の二女にあたる）が錬太郎の学資を出したとのことであるが、典拠が示されていないため不明である。大家の記述が正しければ、遠山元一は久大夫の男系の曾孫であるので、遠山と水野は〝はとこ〟にあたることになる（遠山元一の回想から遠縁であることまでは確定している）。

(15) 遠山元一「母の歴史」遠山元一編『母之面影』（私家版、一九六〇年）二二頁。水野の出世と入れ替わるように、今度は遠山元一の父の放蕩などで遠山家の家運が傾き、遠山は上京して水野のもとに書生としてしばらく住み込むことになる。その後遠山は株屋半田商店の丁稚となり、いくつかの証券会社を経て、川島屋商店を創業。川島屋商店は後に川島屋証券、日興証券となり、現在のＳＭＢＣ日興証券の源流のひとつとなっている（遠山の伝記については牧野武夫『遠山元一』〈時事通信社、一九六四年〉）。なお、遠山元一の上京に際しては、母美以は水野にかなり気を遣っていたようで、「行末何か御見込みありて通学いたさせくれ候にや又は相当の奉公口にても之有候えば其方へ住込ませ下され候御所存にや、其御様子に依りてはくれ〴〵も申述べ候通り、よき奉公口を見つけ一日も早く志を固め候方得策にこれあるべく（いつまでも水野様を力と頼みすがりても万事御配慮を願はざるべからざれ共）と思はれ候」（一九〇四〈明治三七〉年九月末日付書簡）と記した書簡を息子である元一に寄せている（前掲牧野『遠山元一』附録）。

(16) 遠山元一『幾星霜』（一九五三年）（遠山記念館、一九六九年）九頁。遠山元一が書生として住み込んだ頃は、当時水野は内務省秘書官を務めており、一度受け入れを断わっているが、結局親族の誼で遠山元一を引き取っている（前掲牧野『遠山元一』二二～二三頁）。

(17) 水野錬太郎「著作権法起草の前後―少壮官僚時代の思い出」（一九三九年）前掲大家編『明治三十二年・貴族院の著作権法審議』二〇二頁。

(18) 前掲水野政一「祖父水野錬太郎と『明治』という時代」三六〇頁。

(19) 水野錬太郎「著作権法起草の前後―少壮官僚時代の思い出」（一九三九年）前掲大家編『明治三十二年・貴族院の著作権法審議』二〇二頁。
(20) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇三頁。
(21) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇四頁。
(22) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇四～二〇五頁。
(23) 前掲西尾「官僚政治家・水野錬太郎」四一五頁。
(24) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇六頁。
(25) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇六頁。
(26) 前掲水野「著作権法起草の前後」二〇六～二〇七頁。
(27) 水野錬太郎「懐旧録・前編」（一九四五年）前掲『回想録』一四頁。
(28) 水野文相優諚問題の経緯については、水野の側に立った論文ではあるが、石上良平「田中義一内閣の水野文相優諚問題」『成蹊大学創立十周年記念論文集　上巻』（成蹊大学、一九五九年）に詳しい。
(29) 国士舘百年史編纂委員会編『ブックレット　国士舘一〇〇年のあゆみ』（学校法人国士舘、二〇一七年）二頁。
(30) 前掲『ブックレット　国士舘一〇〇年のあゆみ』三頁。「早稲田騒動」は、一九一七年に起きた早稲田大学内で前学長高田早苗の復帰を望む「高田派」と、当時の学長である天野為之の留任を望む「天野派」が対立して起きた学内騒動である。青年大民団は天野派についていた。
(31) 前掲『ブックレット　国士舘一〇〇年のあゆみ』四～一九頁。
(32) 「国士舘完成長老懇談会経過（議事録）」『国士舘百年史　史料編上』（学校法人国士舘、二〇一五年）二七〇頁。
(33) 「国士舘専門学校並実務学校創設計画書」前掲『国士舘百年史　史料編上』五二七～五三〇頁。
(34) 「専門学校設置認可申請書」前掲『国士舘百年史史料編上』五三八～五四七頁。
(35) 「専門学校設置認可書」前掲『国士舘百年史　史料編上』五四七頁。
(36) 『国士舘百年史　通史編』（学校法人国士舘、二〇二一年）一九六～一九七頁。
(37) 前掲『ブックレット　国士舘一〇〇年のあゆみ』二一頁。

(38) 熊本好宏「国士舘を支えた人々―野田卯太郎（大塊）」『国士舘研究年報　楓原』第二号、二〇一一年、二一六頁・二一八頁。
(39) 「専門学校が開校式（「郊外時事」〔抄〕）」『国士舘百年史　史料編上』五五一頁。
(40) 同右。
(41) 「渋沢栄一宛維持委員連名書簡（維持委員会経過報告）」前掲『国士舘百年史　史料編上』五三〇頁。
(42) 前掲『国士舘百年史　通史編』一九七頁。
(43) 「専門学校校長水野錬太郎就任認可書」前掲『国士舘百年史　史料編上』五四八頁。
(44) 季武嘉也・武田知己編『日本政党史』（吉川弘文館、二〇一一年）一二〇～一二一・一二六頁。
(45) 「財団法人国士舘役員（付維持委員会役員）」前掲『国士舘百年史　史料編上』三〇七～三〇八頁。
(46) 「野田卯太郎大追悼会案内（於国士舘講堂）」前掲『国士舘百年史　史料編上』三〇五頁。
(47) 水野錬太郎「沈黙の偉大」『野田卯太郎十三回忌追憶集』（私家版、一九三九年）一三六～一三七頁。水野はそれまでの経験を買われて清浦奎吾から嘱望されて、野田ら政友会幹部の了解を得て脱党し、清浦内閣の内務大臣に就任している（貴族院内閣のため）。しかし、清浦内閣への対応やそれまでの党内対立の結果、政友会が高橋是清や野田卯太郎らの政友会と床次竹二郎らの政友本党に分裂。その後第二次護憲運動が起きて清浦内閣は崩壊し、水野は内務大臣として清浦内閣を支えていたため、政友会に戻れなくなっていた。水野が政友会に戻れなくなった原因をつくった人物の一人が野田であったが、その後両者は手打ちとして関係を修復。野田は水野に復党を要請し、水野も政友会への復党を希望していたので、田中義一が政友会の総裁になったのを機に元の鞘に納まった。
(48) 代議士（某隠士）「翁を追憶する第一人者」石田秀人編『野田大塊翁逸伝』（隆文館、一九二七年）三三〇頁。そのとある代議士によれば、病床にあった野田は「オレも原君の死んだときに高橋を後にし、高橋の後に田中を据へて安心した。床次も旧のやうにと祈つて居つても中々実現せぬ。水野が来て呉れてまあ安心した」と語っていたとのこと

である。

(49)「専門学校が開校式（「郊外時事」〔抄〕）」前掲『国士舘百年史　史料編上』五五〇頁。

(50)「専門学校設置水野錬太郎挨拶状（雛形）」前掲『国士舘百年史　史料編上』五五〇頁。

(51)前掲『国士舘百年史　通史編』一九八頁。

(52)「大学趣旨（完成長老懇談会配付）」前掲『国士舘百年史　史料編上』二七七頁。

(53)島田昌和『渋沢栄一―社会企業家の先駆者』（岩波新書、二〇一一年）。

(54)米原謙『徳富蘇峰―日本ナショナリズムの軌跡』（中公新書、二〇〇三年）、岩間浩「頭山満（一）―筑前勤王主義・民権論者・国権論者の時代―」『国士舘史研究年報　楓原』第三号・二〇一一年、同「頭山満（二）―大アジア主義への傾注―」『国士舘史研究年報　楓原』第四号・二〇一二年、嵯峨隆『頭山満』（ちくま新書、二〇二一年）。

(55)「実務学校校長水野錬太郎就任認可書」前掲『国士舘百年史　史料編上』六〇一頁。

(56)前掲『国士舘百年史　通史編』二三三～二三四頁。

(57)前掲『国士舘百年史　通史編』二三四～二三五頁。その後一九三二年に上塚司によって日本高等拓植学校が神奈川県橘樹郡生田村（現在の神奈川県川崎市）に新設され、上塚以下ほとんどの教員と学生は、国士舘高等拓植学校から異動することになる（上塚は同校でブラジルのアマゾンへの移民事業を展開するが難航して、一九三七年三月に第七回の卒業生を送り出して廃校となる）。

(58)『通史編』によれば、「大民団の発足当初の理念の実現のために、教育分野を国士舘が、社会活動分野を大民団の中の大民倶楽部が、それぞれ担うかたちに変化していった。但し、このような活動組織を区分しながらも、両組織に関与する大民同人が多かったため、実際には表裏一体のような関係が生まれていった」とされ、明確には区分されていなかった（前掲『国士舘百年史　通史編』一〇一頁）。

(59)「満州事変在支殉難同胞追悼大法要（「大民要覧」〔抄〕）」前掲『国士舘百年史　史料編上』九二八頁。

(60)「大民倶楽部規約（付役員一覧「大民要覧」）」前掲

『国士舘百年史　史料編上』九三八頁。

(61)「大民団趣旨」（昭和五年か）八月、国士舘史資料室所蔵。

(62)「鏡泊学園建設支援依頼状（徳富・内田等同人七名）」前掲『国士舘百年史　史料編上』六四四～六四五頁。なお国士舘の満州移民送り出し事業は、国士舘内部の経営をめぐる対立の影響を受けて、まず一九三三年に満洲鏡泊学園が国士舘本体から切り離されるという波乱を迎える。さらに、満州移民の積極的推進者であり、柴田徳次郎の義弟（妹の夫）でもあった満洲鏡泊学園総務の山田悌一が、ほかの教員生徒と共に一九三四年五月一七日に「匪賊」に襲撃され死亡したことで、決定的な打撃を受ける。その後も治安の安定化が望めないことや、運営資金の問題もあり、まず日本側の国士舘高等拓植学校が一九三四年一〇月に廃止され、満洲鏡泊学園も一九三五年七月に関東軍の指導によって解散となった（前掲『国士舘百年史　通史編』二四九～二五八頁）

(63)「評議委員会議事録（写）（鏡泊学園運営如何）」前掲『国士舘百年史　史料編上』六四三頁。なお水野は朝鮮総督府政務総監の経歴をはじめ、植民地に所縁の深い人物でもあるが、国士舘におけるこれらの事業には、名義貸し以上に積極的に関わった形跡はみられない。

(64)「東久邇宮来学奉迎参列願状（雛形）」前掲『国士舘百年史　史料編上』五六一頁。

(65)「専門学校校長副島義一就任申請書」前掲『国士舘百年史　史料編上』五六一頁。

(66)前掲『国士舘百年史　史料編上』五六一頁。なお、国士舘騒動後に制定された国士舘憲則には、水野の名前は顧問として記されていない。（『国士舘百年史　史料編上』七四四～七四五頁）。

(67)国士舘騒動は、実質的に法人運営・教務を取り仕切っていた柴田に対して、一九三三年五月に学園運営と教務の見直しを求める意見が顕在化して、専門学校の卒業生・在校生が理事辞職勧告運動を開始したことをきっかけに勃発した学園騒動である。柴田の理事辞職勧告運動は、柴田と柴田を擁護する立場に立った頭山・徳富ら長老と、教職員

代表（騒動の過程で理事に就任）の眞藤義丸や、副島義一・末永一三ら一部理事との対立へと発展し、柴田の法人理事人事の正当性をめぐる民事訴訟にもつれ込んだ。この騒動は、最終的に眞藤の死や副島・末永ら対立派理事の退任ということで、一九四一年四月に民事での和解が成立し、その後柴田による法人運営が確立された。この顛末については『国士舘百年史　通史編』の第一章第三節の一が詳しい（前掲『国士舘百年史　通史編』二六一～二八四頁）。

(68) 柴田德次郎「創校四十五年記念講演〝石の上にも六十年〟」（一九六二年）『柴田德次郎言論集』（国士舘大学、一九八〇年）五三頁。

(69) 水野錬太郎「国風の保存」『他山之石』（清水書店、一九〇九年）一二九・一三二～一三三頁。

(70) 前掲水野『他山之石』三～四頁。なお、水野がこうした啓蒙主義的な立場に立っていたのは、水野自身が受けていた教育のほかに、青年期に著作権法（一八九九年制定）の法案起草に立ち会っていたことも影響していると考えられる。水野が起草した旧著作権法は、それ以前の版権と異なり、「権利の目的物は文書、絵画、模型、彫刻、音楽、建築等に及ぶ」、あらゆる著作物に関して著作者がその上に有する権利を包含した権利である。（前掲水野「著作権法起草の前後」二一三頁）。制定当時にはかなりの反対意見もあった（特に当時の日本は原著者の許可を得ていない翻訳書が多く、条約に加わるとそれらが制限されるため）。だが、領事裁判権の撤廃のためには、著作権に関する国際条約であるベルヌ条約に加盟する必要があり、当時の政府（第二次山県有朋内閣、内務大臣は西郷従道）はこれを押し切って成立させた。水野はこの著作権法については、他国の事例の比較研究、条文の起草、議会対応、ベルヌ条約加盟の国際交渉への参加など、著作権法の制定過程のほぼすべてに関与しており、さらにこの著作権法の研究によって、一九〇三年に法学博士の学位を取得している。著作権のように「西洋文明を基準とする」普遍的な知の立場に立つことは、水野にとっては当然のことであったのである（水野と旧著作権法について

は、前掲大家重夫『著作権を確立した人々』および前掲大家編『明治三十二年・貴族院の著作権法審議』に詳しい）。

(71) 水野錬太郎「身を以て誦せよ」（一九二九年）『我観談屑』（万里閣書房、一九三〇年）三九一頁。

(72) 前掲水野『我観談屑』三九一～三九二頁。

(73) 西田彰一「政治教育協会と水野錬太郎の政治思想」『立命館大学人文科学研究所紀要』第一二九号、二〇二一年。

(74) 水野錬太郎「立憲政治の理論と実際」（一九二七年）『我観談屑』（万里閣書房、一九三〇年）一〇二・一一一頁。

(75) 水野錬太郎「ヨツフエ来朝の顛末」（一九二三年）前掲『回想録』。

(76) 水野錬太郎「懐旧録・前編」前掲『回想録』四六～四八頁。

(77) 水野錬太郎「懐旧録・後編」（一九四五年）前掲『回想録』五〇～五一頁。前掲水野政一「祖父水野錬太郎と「明治」という時代」三七〇頁。実際に政直が集めた社会主義系の文献は、父の錬太郎の蔵書とともに、現在学習院大学東洋文化研究所友邦文庫に「水野錬太郎・政直旧蔵資料」として寄託され、閲覧できるようになっている。友邦文庫の整理の経緯については、前掲鹿島「水野錬太郎・政直旧蔵書籍・雑誌について」に詳しい。「水野錬太郎・政直旧蔵資料」については、宮田節子・姜徳相監修・学習院大学東洋文化研究所編『友邦文庫目録』（勁草書房、二〇一一年）に目録が収録されている。

(78) 前掲『国士舘百年史　通史編』六六～七〇頁。

(79) 前掲『国士舘百年史　通史編』二〇五頁。

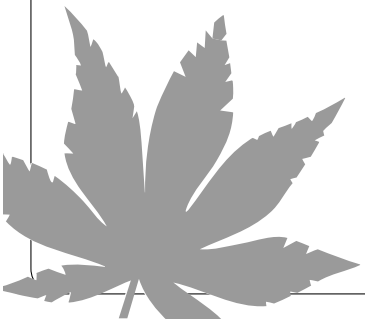
(80) 当段落のここまでの記述は、中嶋哲也『近代日本の武道論―〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』（国書刊行会、二〇一七年）一六〇～一六三頁に基づく。

(81) 「教員無試験検定資格申請（剣道・柔道・国語・漢文）」前掲『国士舘百年史　史料編上』五九二～五九九頁。

(82) 前掲『国士舘百年史　通史編』二一〇頁。

資料提供のお願い

国士舘史資料室では、国士舘の歴史に関する資料や情報のご提供をお願いしております。学生時代の日記・手帳・写真・講義ノート・実習用具などをお持ちでしたらお寄せください。資料は事前連絡の上、着払いにて下記にお送りください。



（送付先）
学校法人　国士舘　国士舘史資料室
〒154‐0023
東京都世田谷区若林 4-31-10　柴田会館 2 階
TEL　03-3418-2691 / FAX　03-3418-2694
E-mail　archives@kokushikan.ac.jp

論文

大正・昭和期の国家主義思想・運動研究の課題からみた大民団・国士舘研究の可能性

岡　佑哉

はじめに

本稿は、日本近現代史における大正～昭和期の国家主義思想・運動（本稿では「右翼」運動と記す。以下「　」略）研究の進展と課題をふまえ、大民団・国士舘研究の意義を展望するものである。

本稿における右翼とは、基本的には在野の立場で活動したナショナリスト（「国体」論者・「アジア主義」者・「農本主義」者・「国家社会主義」者など）のことを指し、一九一〇～二〇年代にかけ政治・思想・経済・外交問題の現状打破を支持する勢力として形成された歴史的存在と捉えている。また、当時の官憲史料で国家の側に動向が追跡・警戒されていた点も重要である。というのも、筆者があえて右翼という語を用いるのは、大正期には「国士」・「壮士」・「浪人」などと呼ばれていたナショナリストたちが、昭和戦前・戦時期になると政治史的に重要な宮中関係者などの史料（例えば原田熊雄『西園寺公と政局』）の中で「右翼」という呼称で頻出し、その動向が警戒・懸念の対象になるという時代性・歴史性を重視しているためであり、「レッテル」を張るためではない。つまり、当該期の政治・社会状況を表す史料用語であることを強調したい。(1)

筆者は、国士舘の創設者柴田徳次郎（一八九〇～一九七三）が敬慕した頭山満（一八五五～一九四四）の弟子筋にあたる黒龍会の内田良平（一八七四～一九三七）が結成した大日本生産党（一九三一年結成）を中心に、近代日本の右翼運動と政治の関係を研究している。(2)しかし、柴田や大民団・国士舘については、これまで恥ずかしな

がら調査検討を行ったことがなかった。

試みに、戦後の右翼研究をジャーナリズムの立場から牽引した堀幸雄氏執筆の『最新右翼辞典』（柏書房、二〇〇六年）における「柴田徳次郎」の項目を確認してみたところ、以下の記述が目に入った（以下、引用にあたり中略は……、傍線や〔　〕は筆者の補足）。

柴田徳次郎（一八九〇～一九七三）……頭山満の門下生で一九一三（大正二）年四月、頭山、徳富猪一郎（蘇峰）、水野錬太郎らを顧問に大民倶楽部を結成した。機関紙『大民』を発行したがとくにみるべき活動はなかった。しかし一七年（大正六）一一月国士の養成を目指して国士舘を設立、以後同館長となり、三一年（昭和六）水野錬太郎を校長に専門学校をつくった。〔後略〕[3]

堀氏の認識では、柴田を頭山の「門下生」とする一方、結成当初の大民団について「とくにみるべき活動はなかった」などと素っ気ない。他にも徳富蘇峰・水野錬太郎は大民団とは関係がなく、水野が専門学校の校長に就任したのも一九二九（昭和四）年であるなど事実関係の誤りがあるが、研究上等閑視されてきたことを象徴する記述である。

ここで国士舘の創設から戦前の沿革について触れておく。[4]

一九一三（大正二）年、柴田が麻布に社会教化啓蒙団体の大民団（青年大民団・大民倶楽部）を結成（機関誌『大民』一九一六年～）。
一九一七（同　六）年、大民団内に私塾国士舘創設。
一九一九（同　八）年、国士舘が世田谷移転。財団法人化のうえ国士舘高等部設置。
一九二三（同一二）年、国士舘中等部設置。
一九二四（同一三）年、国士舘中学校設置。
一九二六（同一五）年、国士舘完成長老懇談会。頭山・徳富蘇峰・渋沢栄一ら出席。国士舘商業学校設置。
一九二九（昭和四）年、国士舘専門学校設置。

そもそも大民団は、柴田ら早稲田大学の学生・卒業生

や、筑前学生会という東京の福岡出身学生の団体で構成され、創設の「主旨」としては物質文明に対する精神文明の重視による「興国救人」・「社会改良」・「青年指導」を掲げ、国士舘は社会事業団体である大民団の教育事業を担う存在であった。柴田らが教育に関わるきっかけは、「早稲田騒動」（一九一七年、初代学長高田早苗と二代学長天野為之の内紛）で敗れ辞職した天野派の教授（永井柳太郎ら）が国士舘で講義したことであった。つまり、国士舘の母体は大民団であり、その関係は表裏一体であった。沿革や人脈についての事実関係をみても、彼らが日本近代史上ユニークな存在であることが窺い知れよう。

では、なぜ大民団や国士舘は研究上等閑に付されていたのか。それは個人の研究者の興味関心を超えた、戦後の近現代史研究の潮流に関わる右翼研究の問題と決して無関係ではない。[5] そのため本稿では、やや迂遠かもしれないが、右翼研究の課題について近現代史の研究潮流との関係から説き起こし、近年の進展も概観のうえ課題を指摘しつつ、大民団・国士舘研究の可能性について考えたい。

以下、第一章では近現代史研究の潮流との関係の中で右翼研究がどのように取り組まれてきたのか、あるいはこなかったのかを整理し、第二章では近年の研究の進展を紹介しつつ課題を考え、第三章で大民団・国士舘に引き付けて今後検討が待たれる論点を展望していきたい。

第一章　近現代史研究の潮流と「右翼」研究

一　戦後の「右翼」研究の傾向

そもそも日本の右翼に関しては、同時代的にその動向を探る官憲やジャーナリズムの分野で関心が払われてきた。[6] 戦後の右翼研究の傾向について、内田良平を例に右翼の思想・行動を政治史上の文脈をふまえ検討した初瀬龍平氏は、一九八〇（昭和五五）年の段階の諸研究を網羅した整理を著書『伝統的右翼内田良平の研究』で行い、右翼研究は研究者のスタンスによって次の五タイプに分類できるとした。[7] 要約すると、①心情的共感者による評伝（葦津珍彦氏の頭山満の評伝など）、②心情的には一定の距離を置きつつ一部の右翼に「革命」思想を見出す評伝（松本健一氏の北一輝研究）、③心情的には切断し

つつ一部の右翼に「革命」思想を見出す研究（橋川文三氏の研究、後述）、④右翼思想の機制（仕組み）を分析する研究、⑤政治過程を重視して思想・行動を分析する研究となる。初瀬氏は、①であるほど研究対象の心情を感覚的に理解できる反面、行動を政治過程に正しく位置づけにくくなり、⑤であるほど科学性は増すが思想の心情的形成過程は分析しにくいとした。初瀬氏は特に①に欠ける実証的な思想史研究（④）や政治過程を重視する研究（⑤）の進展の必要性を提起した。

右翼研究は、個別の人物に関する優れた成果については枚挙に暇がない。[8] だが、研究の問題の一つとして、思想家・運動家個人ではなく団体に即した研究が行いにくい点が指摘できる。「ファシズム」研究で知られる安部博純氏は、官憲史料における右翼団体の分類の変遷を整理し、時期により調査対象となる団体自体が解散・自然消滅するなどして変わってしまうことが多いとした。[9] これは右翼団体の離合集散の激しさ、一つの団体を長いスパンで分析することの難しさを表している。その中において、団体に即した研究として先駆的なものでは、一九七〇年代末の有馬学氏・永井和氏による中野正剛の東方会研究がある。[10] その後、一九九〇年代～二〇〇〇年代になると団体に着目した研究も増えていく（後述）。

また、「アジア主義」に関する研究は膨大且つ多岐に亘るが、右翼運動との関係でいうと、北一輝をはじめとする思想家の研究が大きな部分を占める。[11] 当然のことだが思想家個人の分析が主であり、団体・グループといっても初期の黒龍会など明治期が中心となる。[12] 近年、昭和戦前・戦時期の思想団体に着目した成果として、松浦正孝氏による大亜細亜協会（松井石根・下中彌三郎・中谷武世や軍人・政治家など「汎アジア主義」を標榜）の研究は注目すべき成果といえる。[13]

二　近現代史研究の中の「右翼」

では、なぜ右翼研究は、北一輝・大川周明など豊富な成果が存在する人物と、等閑視された人物・団体という不均衡な状況が続いたのだろうか。もちろん、北・大川らの思想が持つ影響力の大きさや議論の水準の高さはいうまでもない。しかし、近現代史研究の諸潮流における右翼の位置づけの問題も無関係ではない。以下、「ファシズム」論・「革新派」論・「総力戦体制」論という研究

潮流の中で、右翼がどのように位置づけられてきたのか、あるいはこなかったのかを考察したい。

第一に「ファシズム」研究における位置づけである。「ファシズム」論とは、昭和戦前・戦時期における日本の政治・社会が「ファシズム」化したと解釈する議論であるが、この議論に基づく右翼研究は多い。実際、初瀬氏の内田研究も、生産党の結成を内田の「ファシズム」への「適応」として位置づけた[14]。この日本の「ファシズム」における右翼の位置づけについて、丸山眞男氏は先駆的に、戦前の右翼は明治以来の国家主義が極端な形となった「超国家主義」者であるとした[15]。つまり、近代日本を貫く国家主義の帰結であるとして連続性を重視した。対して橋川文三氏の「超国家主義」論は昭和の特異性を重視し、血盟団などテロに走った右翼には、昭和初期の政治・経済・社会問題を打破するため、テロによる既存国家の破壊・改造を志向する思想が見出せるとした[16]。ただし、橋川氏の議論も、テロやクーデター事件に関わった人物への傾斜が強いという難点があった。この点に関し、のちに片山杜秀氏は、丸山氏が「ウルトラ・ナショナリズム」としての「超―国家」主義、橋川氏が明治国家を打破・超越するという意味の「超国家―主義」として右翼を論じたとその違いを整理している[17]。

軍部主導の「ファシズム」と右翼の関係は、軍人のクーデター計画との関わりで指摘されてきた。例えば、三月事件（一九三一年、濱口首相銃撃事件後の宇垣一成陸相擁立計画）や満洲事変直後の十月事件（同年、陸軍皇道派の荒木貞夫擁立計画）における、橋本欣五郎ら佐官級グループ桜会と大川周明の連携は知られている[18]。二・二六事件へ帰結する流れについては筒井清忠氏が研究状況を整理し、大正期の北・大川ら老壮会から、北・西田税に影響を受けた青年将校運動、血盟団などテロ事件の展開や二・二六の位置づけが示された[19]。

また、昭和初期の右翼運動の隆盛を物語る事実として、満洲事変や共産党系の弾圧を機に、労働・農民運動が「ファシズム」化していたことが森武麿氏による通史でも叙述されているが、先駆的には安田常雄氏の長野農民運動の研究が参考になる[20]。また、「農本主義」思想については、権藤成卿・橘孝三郎らの思想家が血盟団や五・一五事件に影響を与えたこと（橘は五・一五に関与）や、この思想が「国体」論との親和性が強かったことから

「ファシズム」イデオロギーの一種とされてきた。[21]

以上のような様々な成果を生んだ「ファシズム」論に立脚した右翼研究だが、その問題点は、二・二六事件を境に関心が低下する傾向にあったことである。それは、日本「ファシズム」の特徴を述べた古屋哲夫氏が、右翼は日本の「ファシズム」化の過程において牽引主体の軍部に比し、あくまでも「副次的要素」と評価したことからもうかがえる。[22]日本の「ファシズム」化は大政翼賛会が成立した近衛新体制がメルクマールとされ、戦時期以降は右翼の分析自体が低調になってしまったといえる。

第二に、「ファシズム」論への批判として登場した「革新派」研究についてである。

「革新派」論とは、伊藤隆氏が提唱した概念で、大正～昭和戦時期の政治史は現状打破＝「革新」を志向する軍人・政治家・官僚・左右の運動家らにより牽引されたとし、「ファシズム」概念を不要と主張し論争を呼んだ。伊藤氏は「現状打破」や「革新」を目指す政治勢力のうち、天皇・「国体」などの「伝統」を強調する「復古」的要素が強い民間政治団体を右翼と位置づけ、ロンドン海軍軍縮条約反対運動において勢力として結集したことや、日中戦争期までの右翼諸団体の対外観などを先駆的にあきらかにした。[23]その後、有馬学氏は通史『帝国の昭和』（二〇〇二年）において、近衛新体制批判を行う右翼＝「観念右翼」（「精神右翼」）と推進派の「革新右翼」という分裂状況をとり上げ叙述した。[24]

一方で有馬氏は、「革新派」が政治過程をリードしたという政治史把握の持つ問題として、戦時期に至っても常に「革新派」対非「革新派」（「現状維持派」）という対立軸を設定し続ける必要が生じてしまうことを挙げていた。[25]実際、伊藤氏は新体制推進勢力と「観念右翼」の対立について、「「復古―革新」派のより復古的な部分は「現状維持」派化し」たと評していた。[26]この把握では、新体制期の「観念右翼」・「革新右翼」という分裂状況を指摘したにも関わらず、新体制の担い手ではないとされた「観念右翼」には関心が寄せられないということに繋がった。

最後に「総力戦体制」についてであるが、この議論は戦時期日本の国家統制的な政策や制度が、戦後社会に影響を与えたとするものである。ただ、右翼への関心は低く、そもそも、総力戦思想の対極にいるとされた「ファ

ナティックな「日本主義」[27]は検討の対象にされなかった。

以上のように右翼研究は、個別研究への偏重と同一グループの長期にわたる分析の難しさという問題を抱えていた。この傾向は、研究諸潮流における右翼の位置づけの問題、特に、右翼＝「ファシズム」化の「副次的要素」という評価や、「革新派」研究における非「革新派」とされた勢力への関心の低さ、「総力戦体制」研究におけるそもそもの検討対象からの除外も原因であった。次章では、二〇〇〇年代以降の研究の進展とその背景を考えてみたい。

第二章　近年の「右翼」研究の進展

一　二〇〇〇年代以降の研究

本章では、二〇〇〇年代以降に発表された右翼研究を概観し、進展の背景についても考察したい。

その嚆矢は、平井一臣氏が「ファシズム」・「革新派」両研究における右翼研究の課題（実態面に踏み込んだ地域での運動）を指摘した上で、清水芳太郎・創生会という福岡地域における運動に着目し、玄洋社人脈との系譜や清水の思想・運動の実態を解明したことである。[28]これは、かつて「ファシズム」研究が軽視した「下から」＝地域からの運動の重要性や、「革新派」研究が俯瞰した「革新」的な民間運動の実態の一つであった。

二〇〇〇年代半ばには、原理日本社研究が進んだことも注目された。蓑田胸喜の天皇機関説批判や帝大粛正運動における苛烈な論敵攻撃が「悪名高い」彼らの論理・運動を解明する動きは、まず主宰者三井甲之の役割・影響力を強調した塩出環氏の成果がある。[29]そして、竹内洋氏らによる蓑田胸喜全集の刊行や共同研究は、他の同人（英語学者の松田福松・社会学者の赤神良譲ら）も検討の俎上に上げており重要である。[30]塩出氏は「ファシズム」論に依拠しながら昭和期の言論弾圧を支えた民間運動という視点、竹内氏らは帝大粛正という大学批判の背景・実態の解明という視点からそれぞれ検討された。また、原理日本社も絡めながらの右翼思想の通史的成果も発表された。片山杜秀氏は、昭和期の「錦旗革命」論（天皇を担ぐ革命論）、大正教養主義の影響（安岡正篤の指導者層の人格陶冶志向）、独特の時間認識（天皇制国家の現状肯定＝三井の「中今（なかいま）」概念）、身体論への傾斜（三

井の「たなすえの道」など）に注目し、右翼の目指した革命の頓挫と現状追認という思想的展開を描いた[31]。

そして、この時期の注目すべき成果は「国体」論研究の進展である。

昆野伸幸氏は、大川周明・平泉澄などの「皇国史観」に代表される近代の「国体」論が、総力戦という昭和一〇年代の時代的要請の中で、「新しい国体論」（記紀神話の神代と歴史を分離し、歴史から国民の主体的な忠を喚起する議論）を生み、三井甲之ら「伝統的国体論」（記紀神話を重視する明治以来のアプリオリな君民関係を説く議論）と鋭く対立したことをあきらかにした[32]。また長谷川亮一氏は、文部省の『国体の本義』や『臣民の道』などの修史事業政策に着目して「皇国史観」の形成と流布の様相を描いた[33]。両氏の成果は、「国体」論という「狂信」・「非科学」・「非合理」とされた思想の歴史的展開を問い直す意義があった。近代の「国体」論については近年山口輝臣氏が、当時は共産主義者でもない限り誰も否定せず各々が「正しい」とする議論が「氾濫」したこともあり、国学の影響などの系譜論的研究だけでは全体像がつかめず、その解明はこれからであると指摘している[34]。直近では、法学者・神道思想家として知られた筧克彦の「国体」論（「神ながらの道」）の形成と展開を解明した西田彰一氏の成果が発表されるなど[35]、これらの思想の丁寧な検討こそが、「国体」論という近代日本の抱えた難題を歴史的に位置づける足掛かりとなろう。

「革新派」研究の議論を引き継いだ「観念右翼」の研究も発表された。井上義和氏は、「観念右翼」が戦時期に体制批判勢力たり得たことを、東大系右翼学生運動団体の日本学生協会や精神科学研究所の反東條運動に焦点を当てあきらかにした[36]。この成果（二〇〇八年）以前にも、五明祐貴氏が天皇機関説事件（一九三五年）に関与し近衛新体制期に「観念右翼」の一翼を担ったとされる元軍人の小林順一郎（一八八〇～一九六三、三六倶楽部主宰、生産党顧問）の思想・行動をあきらかにしている[37]。五明・井上両氏の研究は「革新派」論の登場以後も実態解明が進まなかった「観念右翼」論の可能性を開いた。

さらに、左右含めた戦間期（一九二〇～三〇年代）社会思想の展開に着目した福家崇洋氏の成果も見逃せない。氏は「大正デモクラシー」期から「ファシズム」期

における普選論・国家社会主義論など様々な思想を題材として、「大正デモクラット」と国家社会主義者の親和性・連続性を指摘しつつ、「右派社会運動」（右翼運動）の展開も重視し、当該期の思想状況を鮮明にした。[38]

右翼研究への示唆は、宗教史や都市労働者研究の領域からも得られる。

例えば、大谷栄一氏は血盟団事件（一九三二年）について、信仰に根ざした結びつきの強さと過激なテロ行為から、井上日召らを一種の「宗教セクト」と位置づけた。[39]福家氏も一九二〇～三〇年代の社会運動と宗教について、日蓮宗系の国柱会を母体にした立憲養正会及び大本教と彼らが主導した昭和神聖会を題材に、現実の天皇とはズレのある「理念の天皇」（神話・歴史上の天皇）を押し出して支持拡大・政治進出を目指したことを指摘した。[40]戦時期の右翼と宗教の問題については粟津賢太氏が、戦局悪化以降の「英霊公葬」問題（一九四二～四四年）を検討し、影山正治（一九一〇～一九七九、國學院大學在学時に生産党入党、神兵隊事件で逮捕）ら大東塾の神道式統一論を「国体」的死生観の徹底化と評した。[41]また、神道史の分野からも、今泉定助や戦前期の葦津珍彦、神兵隊事件の天野辰夫といった、右翼運動と接点を持った人物たちの「国家神道」とは一線を画す思想が解明されつつある。[42]

都市の下層労働者や「高等遊民」という視点からの指摘も興味深い。例えば、松沢哲成氏は一九一〇年代末～関東大震災後にかけて土建業者が反社会主義の右翼的色彩を帯び、労働力調達以外に争議潰しなどを行うようになったとしつつ、震災時の黒龍会の自由宿泊所設置と職業紹介もとり上げた。[43]藤野裕子氏は、大正期の政治集会が大正政変のような暴動（もしくは暴動への期待）を伴うものから、普選運動では秩序化の傾向を示し、当該期の黒龍会もその流れに沿っていた点を指摘した。[44]「高等遊民」問題研究においては町田祐一氏が、高学歴だが資力のない「高等遊民」が左右の社会運動の担い手の供給源となっていたことをあきらかにしている。[45]これらの成果は、右翼運動が指導者のみでは語りきれない、末端の担い手をも含めた位置づけが必要であることを示している。

さらに二〇〇〇年代以降、安田銕之助（東久邇宮御附武官、神兵隊事件の資金調達、学習院大学に史料あり）・

中原謹司（信州郷軍同志会、憲政資料室に史料あり）など、専論がなかった人物の研究も発表されており、今後も注目である。[46]

二　研究進展の背景と課題の整理

では、二〇〇〇年代以降の右翼研究進展の背景は何であろうか。

それは、研究潮流において「ファシズム」論か「革新派」論かという二項対立ではなく、様々な議論の可能性や課題を引き継ぐ段階になったことが大きい。例えば、「ファシズム」研究・「革新派」研究双方の批判的継承としての地域の「国家改造」運動研究（平井氏）、第一次大戦後から「ファシズム」期の連続性を意識した思想史（福家氏）、「革新派」研究の空白であった戦時期の「観念右翼」への着目（井上氏）、近代日本を貫く「国体」論自体の再検討（昆野氏）などは、その好例であるといえよう。

ここまで述べてきた右翼研究の課題を整理すると、①離合集散の激しさと、それによる同一グループの長期的分析の難しさの克服、②運動の実態面にまで分け入った分析の必要性、③戦時期における運動の分析が挙げられる。そのような中で、二〇〇〇年代以降の右翼研究は、研究潮流を批判的に継承し、その課題を克服しようとする様々な成果が発表され、従来見逃されてきた人物・事象の検討が大いに進展したことを述べてきた。

あえて遠回りではあるが第一章～第二章と検討を加えたことで、大民団・国士舘の研究が、こういった流れからとり残されてしまっていることが浮き彫りになった。しかし、大民団・国士舘を右翼研究、ひいては近現代史研究の中で検討対象として活かすことはできないのだろうか。次章では大民団・国士舘研究の論点について、筆者なりに重要と思われる問題を挙げていきたい。

第三章　大民団・国士舘研究の論点

一　玄洋社系・福岡人脈の実態

ここからは前章までの整理・検討を踏まえ、雑駁ではあるが大民団・国士舘研究の論点を考えたい。

まずは、明治以来の玄洋社・福岡人脈の実態という視点である。とかく右翼の「源流」ともいわれることの多

い玄洋社に連なる人脈は、その実態が不明瞭なままイメージで語られる傾向にある。例えば、昭和天皇が『昭和天皇独白録』のなかで、日米開戦直前の廣田弘毅（重臣・元首相）の重臣会議における意見について、実際は外交交渉の重要性を主張したものであったが、「玄洋社出身の関係か、どうか知らぬが、戦争をした方がいゝと云ふ意見を述べ、……全く外交官出身の彼としては、思ひもかけぬ意見を述べた」と、誤って記憶していたことは知られている。[47] また、あくまで「旧福岡藩」出身の士族を中心にした民権結社が出発点で、のちに出身者や子弟の緩やかな集まり（昭和期には財団法人）となった玄洋社と、内田と福岡に限らない同志の政治結社である黒龍会を同一視する認識は根強い。もちろん頭山（玄洋社三傑で精神的リーダー）と内田（叔父の平岡浩太郎が初代玄洋社社長）という師弟関係は生涯続くが、それに引っ張られ過ぎても実態を見誤ってしまう。[48]

大民団・国士舘の人脈について原口大輔氏の成果にもとづき整理すると、彼らは当初より「福岡県」人脈を活かした支援を受けており、例えば有馬頼寧（伯爵、旧久留米藩主家）も社会問題について国士舘で講演していた。また、柴田らの理念は、帝大を頂点とする画一教育や学生の左傾化への危機感から、国家に貢献する「国士」を育成することにあり、中等・高等教育機関への脱皮をめざし実業家の渋沢栄一に接近した。ところが渋沢は画一教育批判には同意するものの、それ以外の強硬な主張（反軍縮など）には賛意を示さず、国士舘の運営にも直接関与していなかったという。[49]

では試みに、玄洋社と大民団・国士舘の関係を検討してみよう。まず、支援者に頭山らが確認できるが、柴田は玄洋社の社員でない。[50] しかし、頭山との関係は『玄洋社社史』（一九一七年）や『頭山翁清話』（一九二三年）の宣伝・出版にも関与していることからも、一定の信頼関係がうかがえる。『玄洋社社史』については、出版前に編著者の菊地秋城による社史稿が『大民』（第二巻五～七号）に載り、一九一七（大正六）年八月号には広告を掲げ「苟も天下を憂ふるの士は一本を左右（座右か？）に備へざるべからざるの快著たり」として購買申し込み先となっていたり、柴田による『頭山翁清話』も広告で「寡言の巨人頭山翁の言」を収録できた「奇蹟のような書物」と自賛していた。[51]

一方、内田良平との関係はというと、内田は国士舘で柔道を教えたことがあるようだが、役員・顧問等ではなく意外に薄い印象である。むしろ、内田とは関係が良くなかったとされる中野正剛とは、菊池義輝氏の成果（後述）からも、早稲田かつ福岡という縁もあって結びつきが強いように思える。[52]

すなわち大民団・国士舘は、「福岡県」出身者の人脈を活かしており、頭山・内田ら玄洋社人脈の出自である「旧福岡藩」という旧藩単位ではなく、近代以降にできた久留米なども含む県単位の人脈の活用が重要となっていたようである。この点、大民団・国士舘は、近代史における人脈のイメージと実際の果たした役割を考えるうえでも興味深い事例といえる。例えば、「長州閥」や「薩派」といった明治維新の主流を担った旧藩出身者の派閥とされるものや、旧土佐藩出身者とそれ以外の出身者もいる板垣退助の側近を含めた自由党系「土佐派」[53]などとともに、玄洋社系と福岡県人脈の問題は、地域政治との関りも含めて今後検討されるべき問題である。[54]

二　「大正デモクラシー」研究との接続

次に「大正デモクラシー」研究との接続についてである。

そもそも「大正デモクラシー」とは、日露戦後から一九二〇年代にかけての政治・社会の民主的なムーブメントを指すが、政党政治の進展、普選論などの様々な言論や社会運動が隆盛を迎えた時代状況をあらわしている。この概念について成田龍一氏は、「大正デモクラシー」をタイトルに冠した通史の冒頭で、論者により仔細な部分の評価は様々だが「この時期に「日本」の歴史に切断線が入り、新たな時代相を表しているという認識が緩やかに形成されている」と指摘している。[55]

これまで「大正デモクラシー」研究において右翼思想や運動は、デモクラシーを批判し崩壊（＝「ファシズム」化）に導いた一要因とされた。例えば、鹿野政直氏は「デモクラシーのほころ〝理性〟が〝狂気〟のまえになぜあれほどにもろかったのか」[56]を問い、その要因として、大本教の近代への反発や天皇への帰一、青年団運動の「ファシズム」への接近、大衆文学の「〝日本的なるもの〟への傾斜」という、民衆の「自生的」価値意識（＝「〝土俗〟

的精神」）が「底流」に存在したと評した[57]。このように、「大正デモクラシー」にとって右翼思想・運動は、飽くまでも崩壊要因であり、右翼自体に関心が払われてきたとはいい難い。この点、「大正デモクラシー」研究への批判として、有馬学氏は大正期の国内問題はデモクラシーか否かという基準ではなく、「ナショナリズム」の再編として描くべきであるとして、「大正デモクラシー」概念を使用しなかった[58]。有馬氏はデモクラシーと「ナショナリズム」の「親近性」が十分に問われてこなかったことを問題視した[59]。

では、右翼と「大正デモクラシー」状況の関係をどう考えるべきか。

その点に関し示唆を与えてくれるのは、赤澤史朗氏・畔上直樹氏による「国家神道[60]」と「大正デモクラシー」の関係の検討である。赤澤氏は神社界に出現したデモクラシー状況の展開として神職待遇改善要求など下級神職層の台頭を指摘し、その後登場した今泉定助（神道思想家）らの「禊」重視の非「国家神道」的信仰について、「一見きわめて古めかしい神社振興の再建論・復帰論」だが、当時の「現代社会批判のエネルギーを吸収するような契機を持つもの[61]」と位置づけた。この提起を大正期以降の在地神職の社会的活性化を検討して深めた畔上氏は、在地神職たちが「決して社会の近代化にとり残されていくような、特殊守旧的な伝統的人間集団などではなく、「近代的制度を前提に自己形成した最初期の「煩悶青年」たちであ」り、「地域の「大正デモクラシー」状況の裾野を支えた担い手」且つ「「ファシズム」期には経済更生運動の担い手となるような現場のアクティヴたち」であったことをあきらかにした[62]。注目すべきは、「大正デモクラシー」と一見「無縁」・「正反対」と思われてきた神道が、その影響を色濃く受けていたという点である。

これらの成果から得られる視点とは、「大正デモクラシー」とは「無縁」・「正反対」とされる右翼をむしろその流れに位置づけるという発想である。もちろん、これらの研究でも大民団・国士舘は検討されているわけではないが、いろいろと論点が見いだせるのではないか。

例えば、日露戦後の青年たちの活動の活性化について、近年では都市暴動の研究や「院外青年」の研究が参考になる。また、大正期の「私塾」教育隆盛の一例としても議論できると思われる。特に伊東久智氏の成果は、「大

正デモクラシー」と「ナショナリズム」の分かち難い関係に着目して日露戦後以降の「院外青年」の思想・活動を検討したもので、当該期の若者と政治の関係を考えるうえで重要である。右翼研究との接続でいえば、「院外青年」だった橋本徹馬という人物が昭和期には「紫雲」と名乗り、右翼の政治浪人として知られていったことも検討されている点は興味深い。[63]「大正デモクラシー」の担い手が昭和の右翼運動家になるという連続性を問う事例であろう。

「大正デモクラシー」と大民団の活動との関わりでいうならば、普選問題に触れないわけにはいかない。『国士舘百年史　史料編上』を見ると、彼らは一九一七（大正六）年六月段階で、「吾人の主張するものは普通選挙也である、二十歳以上の日本男子は悉く選挙権を持つことである」と主張しており、[64]翌月には「選挙権拡張運動」の開始を宣言した。

〔前略〕立憲の大綱は国民を基礎となし、公選を以て斉を忖るもの、一に是れ公器を樹立し、民生を安固ならしむる所以なり。

……蓋し議員公選の公権は、立憲の大本なり。其大本、一局少数の国民に限られ、国家の公器、其少数者の私権に属す。……現行選挙法の弊瀆、亦た酷だしと謂ふべし。

……現行選挙法を革正するは大政の宿弊を一掃する所以なり。民心を一新する所以なり。国運を作興する所以なり。人権を要求する所以なり。其革正の目的たる、之を純理に推せば、人権を基礎とし、普通選挙を唱道せざる可からざるは勿論なるも、順序の漸を測り、自他の関係に参照せば、選挙権の拡張を以て、機宜妥当となす可し。〔後略〕[65]

この檄では、①立憲政治の基礎は国民であること、②一方で選挙権が一部の国民に限られることを指摘し、③「宿弊の一掃」、「民心の一新」、「国運の作興」、「人権の要求」のために選挙法改正を訴えていた。つまり、政治の現状打破にむけて二〇歳以上の男子普選を主張したのであった。その約三年後の一九二〇（大正九）年一月、大民団（大民倶楽部）として顧問の頭山らも出席のうえ普選問題を「討議」した結果、以下の主張を展開した。

〔前略〕討議の結果、遂に大民倶楽部は我国体の基礎たる家族制度を破壊せざる範囲内に於て、最も多数の国民に選挙権を与ふるを可とし左の決議をなす、

「満二十歳以上の男子にして戸主たる者

但し家族と雖独立の生計を営む者も同じ」〔後略〕[66]

ここでは家族主義を強調し、全ての男子ではなく戸主と独立生計者の男子に限定するものとなった。この主張の変化については、大庭裕介氏が大民団の普選問題への見解の変遷や立憲政友会との関係をふまえ検討している。氏によれば、①一九二〇年頃から普選運動が学生・青年層による反政友会的色彩や労働運動的性格を帯びたため、大民団は距離を置くようになったこと、②第一五回衆院総選挙（一九二四年五月）に柴田が東京府第二区から立候補する際、大民団がかねてより普選論を主張していたこともあり、後見人の野田卯太郎がいるものの普選に消極的な政友会からは推薦を受けず中立候補として出馬した経緯を検証している。[67]

この普選問題は、右翼たちについても、政治的事情以外にその「国体」観や国民観を探る有効な題材なのではないかと筆者は考える。例えば、内田良平の唱えた普選論＝「純正普選」論は、日本の「国体」は皇室を家長と見立てる家族国家であり、個人ではなく家族が国家の最小単位であるとする家族主義を唱え、この観念に基づき「個人主義」による選挙権は「国体破壊」を招くとして、「家長」（戸主・世帯主）ならば男女年齢不問で選挙権を付与すべしというものであった。[68] ちなみに、内田らがこの運動のために一九二五（大正一四）年に設置した「純正普選期成会」と大民団・国士舘の関係は史料上確認できない。[69] 後述するように、中野正剛（普選法案賛成）と近い大民団・国士舘の立ち位置からすれば納得がいく。

一方で、北一輝は選挙権については男子普選であり、女子の選挙権は不要であることを明言していた。北は一九二三（大正一二）年の「日本改造法案大綱」でその意図を以下のように述べていた。

〔女子参政権不要について〕日本現在ノ女子ガ覚醒ニ至ラスト云フ意味ニ非ズ。……国民ノ母国民ノ妻タル権利ヲ完全ナラシムル制度ノ改造ヲナサバ日本

ノ婦人問題ノ凡テハ解決セラル。婦人ヲ口舌ノ闘争ニ慣習セシムルハ其天性ヲ残賊スルコト之ヲ戦場ニ用ユルヨリモ甚シ[70]

このように、普選問題以外にも「大正デモクラシー」期に論議を呼んだ事象を題材に、大民団・国士舘を他の人物・団体と比較しながら検討することが求められるのではないか。先述の有馬氏の提起をふまえると、「大正デモクラシー」は、単なる反デモクラシーとは言い切れないナショナリストたちの動向をも含み込んだ形で理解しなければならないのである。

三　昭和期の「右翼」運動との関り

そして昭和初期の右翼運動との関係という視点である。

近年、満川亀太郎の評伝を執筆した福家崇洋氏は、多くの右翼研究が北一輝など「変革」的思想や二・二六事件などの「事件」を強調し過ぎており、事件の羅列だけでなく「日々の動きや伏流」にも目を向けるべきと指摘する[71]。大民団・国士舘の出身者も視野に入れるうえで参考になるのは、前章で紹介した井上義和氏や町田祐一氏の成果である。井上氏は昭和期のエリートが通う高等教育機関が、左翼のみならず右翼運動家輩出の場となっていたことをあきらかにした[72]。また、先述の通り町田氏も旧制中学以上の高等教育を受けつつも資力の無い「高等遊民」化した若者が、左右の政治運動家となる事例があったことを述べている。

では、大民団・国士舘関係者に関してはどうであったのか。残念ながら、井上・町田両氏の研究には言及はないが、国士舘専門学校では原理日本社の蓑田胸喜が教授（一九三一～）を務めており、昭和初期の大民倶楽部評議員に大日本生産党の鈴木善一（一九〇三～没年不詳）がいる。鈴木は、国士舘高等部卒であり、八幡博堂（一八九八～一九六七、生産党）から誘われて政治運動に入ったという[73]。鈴木は、生産党青年部長であった一九三三（昭和八）年七月、クーデター未遂の神兵隊事件で逮捕された人物である。他の教育機関との比較など含め右翼的な政治活動との関りはより検討されるべきであろう。

教育とは異なる政治的な問題という点では、先述の菊池義輝氏の成果からも、国士舘で講演を行うなど関係の

深かったといえる中野正剛と柴田らは、満洲事変以降の日本の対外進出に期待し、特に日独伊防共協定強化運動（一九三八年）を積極的に推進したことがあきらかにされている。[74] 中野は新体制運動にも関わる「革新右翼」と目されており、その辺りの政治史的な位置づけも意識しながら大民団・国士舘関係者を検討することも重要と思われる。

以上のように、右翼研究の課題からみた大民団・国士舘研究の課題として、①玄洋社系・福岡県人脈の問題、②「大正デモクラシー」研究との接続、③昭和期右翼運動との関りの検討を挙げた。

おわりに

本稿は、日本近現代史における右翼研究の進展と課題をふまえ、頭山満ら右翼系人脈を持つ柴田徳次郎が創設した大民団・国士舘研究の可能性を展望することを目的とした。

第一章では、日本近現代史研究の諸潮流との関係の中で右翼研究がどのように取り組まれてきたのか、あるいはこなかったのかを整理した。すなわち、①戦後の個別の右翼研究の持つ「著名」思想家やテロ・クーデター事件研究への偏りに加え、②関心からこぼれ落ちてきた対象としての「ファシズム」研究における「ファシズム化」以降の右翼、「革新派」研究における戦時期の非「革新」的とされた右翼（「観念右翼」）、「総力戦体制」研究における「ファナティックな日本主義」の問題を指摘した。

第二章では近年の研究の進展を紹介しつつ、その背景も考察した。二〇〇〇年代以降の右翼研究は、研究潮流の課題を批判的に継承し、それを克服しようとする様々な成果が発表され、地域での運動や「国体」論、「観念右翼」論など、従来見逃されてきた人物・事象の検討が大いに進展したことを概観した。一方、大民団・国士舘についてはこの流れから縁遠かったといえる。

第三章では、大民団・国士舘に引き付けて今後検討が待たれる論点を展望した。第一に玄洋社系・旧福岡藩・福岡県という人脈の実態への着目という観点、第二に普選問題を例に挙げたことなどをはじめとする、「大正デモクラシー」という政治・社会・思想の状況との関係をふまえた位置づけの意識、③国士舘出身者や関係者、ま

たは他校との比較なども含めた昭和期の右翼運動との関係の有無・濃淡の検討、の諸点を述べた。

以上、本稿の検討により、冒頭で引用した堀幸雄氏のような「とくにみるべき活動はなかった」という評価は、改められるべきイメージであることは明確になったのではなかろうか。とはいえ、本稿で述べたことは、いずれも筆者の思い付きに近いものばかりであり、他の研究者によって見いだせる論点もあると思われる。そのような意味でも、本誌『国士舘史研究年報　楓原』掲載の諸論稿や『国士舘百年史　史料編上・下』について、今後より多くの研究者が参照することを願ってやまない。

〈注〉

（1）「左翼」・「右翼」の語源がフランス革命期の議会における革命派＝左翼側、王党派＝右翼側であることは周知だが、日本での用例の変遷については浅羽通明氏の整理が参考になる。政治的立場を左右で分ける捉え方自体は、明治一〇年代以降フランス革命研究の書物で紹介されていたが、まだ一般的ではなく、その後に広がり昭和初期になると喜多壮一郎著『モダン用語辞典』（一九三〇年）において「左翼」・「右翼」の語が掲載され、また評論家の高田保による造語「左傾」・「右傾」なる表現も登場するなど定着した（浅羽通明『右翼と左翼』幻冬舎新書、二〇〇六年、一二八～一三二頁）。

（2）拙稿「内田良平「純正普選」運動と大日本生産党結成―一九二〇年代代における「右翼」運動形成の一断面―」（『ヒストリア』第二四二号、二〇一四年）、同「影山正治と大日本生産党―昭和初期「右翼」学生の思想と行動―」（『愛知学院大学大学院文学研究科文研会紀要』第二五号、二〇一四年）、同「一九三〇年代後半における「右翼」運動の分

裂と大日本生産党―「観念右翼」形成の背景―」（『年報近現代史研究』第六号、二〇一四年）、同「「大正デモクラシー」と内田良平・黒龍会」（『年報近現代史研究』第一〇号、二〇一八年）、同「近衛新体制と「観念右翼」―大日本生産党を中心に―」（二〇一八年大会　近代・部会報告、『ヒストリア』第二七一号、二〇一八年）、同「近代日本の「右翼」運動の系譜と大日本生産党―玄洋社・黒龍会との比較、組織の変遷から―」（『愛知学院大学大学院文学研究科文研会紀要』第三〇号、二〇一九年）。右論文をもとに、長妻三佐雄・植村和秀・昆野伸幸・望月詩史編著『ハンドブック近代日本政治思想史―幕末から昭和まで』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）の項目「頭山満―玄洋社の精神的リーダー」・「玄洋社―福岡の民権結社からアジアへ」・「内田良平―黒龍会・大日本生産党を率いた国家主義運動家」・「黒龍会―内田良平とその周辺」を執筆した。

（3）堀幸雄『最新右翼辞典』（柏書房、二〇〇六年）二六二頁。

（4）佐々博雄「大民団と国士舘―雑誌『大民』からみえるもの―」（『国士舘史研究年報　楓原』第二号、二〇一一年）、同「講演録　国士舘の母体「大民団」の活動」（『国士舘史研究年報　楓原』、第一〇号、二〇一九年）。

（5）後述するが、大民団と大正期の政治運動の関係について、大庭裕介氏が普選問題を中心に検討したことは歓迎すべき成果といえよう（大庭裕介「大正期の大民団と普通選挙運動―普選論と第一五回衆議院総選挙を中心に―」『国士舘史研究年報　楓原』第一二号、二〇二一年）。

（6）戦前の体系的な右翼研究として馬場義続『我国に於ける最近の国家主義乃至国家社会主義運動に就て』（司法省調査課『司法研究報告書集　第一九輯一〇』、一九三五年）がある。また、日米開戦まで東京在住だった米国ジャーナリストのヒュー・バイアス著／内山秀夫・増田修代訳『昭和帝国の暗殺政治―テロとクーデタの時代―』（刀水書房、二〇〇四年、原著一九四二年）、戦後の公安調査庁『戦前における右翼団体の状況　上・中・下』（公安調査庁、一九六四年）がある。堀幸雄氏による研究

の集大成が『最新右翼辞典』（柏書房、二〇〇六年）である。

（7）初瀬前掲書「前文」四～七頁。

（8）二〇〇〇年代以降も、堀真清『西田税と日本ファシズム運動』（岩波書店、二〇〇七年）、伊藤隆『評伝　笹川良一』（中央公論新社、二〇一一年）、萩原稔『北一輝の「革命」と「アジア」』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）、クリストファー・W・A・スピルマン『近代日本の革新論とアジア主義―北一輝、大川周明、満川亀太郎らの思想と行動』（芦書房、二〇一五年）などが発表されている。

（9）安部博純「戦前日本における国家主義団体の類型」（『北九州大学法政論集』第六巻四号、一九七九年）六三頁。近年、萩原淳氏は一九二〇年代の国本社（平沼騏一郎らの思想結社）、三〇年代初頭のテロ事件減刑嘆願運動、三〇年代後半の議会進出をめぐる内外情勢（排英運動・翼賛体制）を中心に、どのような人物・団体が参加していたのかを整理しており参考になる（萩原淳「近代日本において人々は国家主義運動とどのように関わったのか―国家主義運動への「参加」から考える―」『政策科学・国際関係論集』第二〇号、琉球大学人文社会学部、二〇二〇年）。

（10）有馬学「東方会の組織と政策―社会大衆党との合同問題の周辺」（『史淵』第一一四号、一九七七年）、同「戦争期の東方会」（『史淵』第一一八号、一九八一年）、永井和「東方会の成立」（『史林』第六一巻第四号、一九七八年）、同「東方会の展開」（『史林』第六二巻第一号、一九七九年）。

（11）「アジア主義」の定義は、最大公約数的にはアジア諸民族の連帯により欧米列強に対抗していこうとする思想である。その際、純粋な連帯論と日本を上位に置く侵略的な議論に分けられることもある。近年では萩原前掲書、スピルマン前掲書、福家崇洋『満川亀太郎―慷慨の志猶存す』（ミネルヴァ書房、二〇一六年）などが発表されている。

（12）黒龍会については蔡数道「「黒龍会」結成についての一考察―初期会員の政治的性格分析を中心として」（『中央大学大学院研究年報』第二九号、一九九九年）、同「「天佑侠」に関する一考察」（『中央

大学大学院研究年報』第三〇号、二〇〇〇年）、同「黒龍会の成立―玄洋社と大陸浪人の活動を中心に」（『法学新報』第一〇九巻第一・二号、二〇〇二年）、同「「アジア主義」に関する一考察」（『中央大学社会科学研究所年報』第八号、二〇〇三年）、同「日本の「アジア主義運動」―黒龍会の朝鮮進出を中心に―」（『法学新報』第一一〇巻第九・一〇号、二〇〇四年）、同「日露開戦運動に関する一考察―黒龍会を中心として―」（『法学新報』第一一一巻第五・六号、二〇〇五年）。結成から日露戦争期までの活動を内田周辺（顧問の頭山や叔父の平岡浩太郎）にも目配せして明らかにしており参考になる。

（13）松浦正孝『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか―汎アジア主義の政治経済史』（名古屋大学出版会、二〇一〇年）、廣部泉『人種戦争という寓話―黄禍論とアジア主義』（名古屋大学出版会、二〇一七年）、梅森直之『初期社会主義の地形学（トポグラフィー）―大杉栄とその時代―』有志舎、二〇一六年）「第2章　資本主義批判としてのアジア主義」。梅森氏は「初期社会主義」としての分析範囲を自覚的な社会主義者・無政府主義者以外の資本主義批判も含め、内田良平の藩閥・財閥批判や宮崎滔天の思想なども取り上げており新鮮である。

（14）前掲初瀬書「十章　大日本生産党―ファシズム運動への適応―」・「十一章　ファシズム思想への適応」。

（15）丸山眞男「超国家主義の論理と心理」（『増補版現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年）。

（16）橋川文三「昭和超国家主義の諸相」・「昭和維新とファッショ的統合の思想」（『昭和ナショナリズムの諸相』、名古屋大学出版会、一九九四年、初出一九六四・一九七四年）。血盟団員の意識については安田常雄「「血盟団」事件の発想と論理」（『季刊社会思想』第二巻第三号、一九七二年）。

（17）片山杜秀『近代日本の右翼思想』（講談社選書メチエ、二〇〇七年）「第一章　右翼と革命―世の中を変えようとする、だがうまくゆかない」。近年、中島岳志氏は、一見対立する丸山・橋川両氏の議論の再検討を提起し、丸山氏のいう極端な国家主義

の担い手は、橋川氏のいう自我の問題に煩悶した結果、天皇への帰一に加え日本による人類救済までも主張する現実の国家を超越した思想を持ったという意味での「相互補完」性を見出すとする（中島岳志『超国家主義―煩悶する青年とナショナリズム』筑摩書房、二〇一八年、二四二～二四六頁）。

(18) 須崎慎一『日本ファシズムとその時代―天皇制・軍部・戦争・民衆―』（大月書店、一九九八年）、刈田徹『大川周明と国家改造運動』（人間の科学社、二〇〇一年）、堀真清前掲書参照。

(19) 二・二六事件の研究は多いが、最新の成果は筒井清忠『敗者の日本史一九　二・二六事件と青年将校』（吉川弘文館、二〇一四年）。テロ・クーデター事件に繋がる動向の研究整理は、筒井清忠「二・二六事件と昭和超国家主義運動」（同編『昭和史講義―最新研究で見る戦争への道』、ちくま新書、二〇一五年）一二一～一三九頁。一方、クーデターとは無縁な右翼と軍人の関係という点では、塩出環氏は原理日本社の三井甲之が陸軍皇道派の将官（特に柳川平助中将）と親密で、陸軍の依頼により思想善導のための時局講演（一九三七年頃）を行っていたことから、「ファシズム」化における思想善導や言論統制の面では相互補完的だったと指摘している（塩出環『天皇「原理主義」思想の研究』、神戸大学大学院国際文化学研究科須崎研究室、二〇〇七年、「第四章　三井甲之の周辺と人脈」）。

(20) 安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』（れんが書房新社、一九七九年）、森武麿『日本の歴史二〇　アジア・太平洋戦争』（集英社、一九九三年）九五～一〇一頁。

(21) 「農本主義」研究の状況については、船戸修一「「農本主義」研究の整理と検討―今後の研究課題を考える―」（『村落社会研究』第一六巻第一号、二〇〇九年）に詳しい。また、近年の研究には長山靖生『テロとユートピア―五・一五事件と橘孝三郎』（新潮選書、二〇〇九年）、菅谷務『橘孝三郎の農本主義と超国家主義―もう一つの近代―』（岩田書院、二〇一三年）などがある。

(22) 古屋哲夫「日本ファシズム論」（『岩波講座　日本歴史二〇　近代七』（岩波書店、一九七六年）。

(23) 伊藤隆『昭和初期政治史研究―ロンドン海軍軍縮条約をめぐる諸政治集団の対抗と提携―』(東京大学出版会、一九六九年)、同「右翼運動と対米観―昭和期における「右翼」運動研究覚書―」(細谷千博・斎藤真・今井清一・蝋山道雄編『日米関係史開戦に至る十年(一九三一～四一年)三　議会・政党と民間団体』、東京大学出版会、一九七一年)。

(24) 有馬学『日本の歴史二三　帝国の昭和』(講談社、二〇〇二年)。井上義和『日本主義と東京大学―昭和期学生思想運動の系譜』(柏書房、二〇〇八年)。「革新派」論ではないが、源川真希氏は近衛新体制の思想を分析するなかで、「精神右翼」の翼賛会批判をとり上げた(源川真希『近衛新体制の思想と政治―自由主義克服の時代―』有志舎、二〇〇九年)。

(25) 有馬学「戦争と啓蒙―〈政治史〉と〈思想史〉の架橋―」(『九州史学』第一五〇号、二〇〇八年)。

(26) 伊藤隆『昭和期の政治［続］』(山川出版社、一九九三年)一六頁。

(27) 山之内靖・成田龍一・コシュマン、ヴィクター編『総力戦と現代化』(柏書房、一九九五年)一九四頁。

(28) 平井一臣『「地域ファシズム」の歴史像―国家改造運動と地域政治社会』(法律文化社、二〇〇〇年)。

(29) 塩出前掲書。塩出氏は別稿で原理日本社の大衆組織「しきしまのみち会」についても検討し、満洲事変前後が活発であったことを指摘した(同「三井甲之と原理日本社の大衆組織―「しきしまのみち会」の場合―」『古家実三日記研究』第五号、二〇〇五年)。

(30) 竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代―大学批判の古層』(柏書房、二〇〇六年)、植村和秀『日本への問いをめぐる闘争―京都学派と原理日本社』(柏書房、二〇〇七年)、片山前掲書。近年も横川翔「松田福松の足跡―三井甲之とその同志たちの一側面―」(『國學院雑誌』第一一七巻第九号、二〇一六年)、同「雑誌『アカネ』の再検討―三井甲之研究の緒論として―」(『史境』第七五号、二〇一八年)、同「大正期「日本主義」者の連携―三井甲之と岩野泡鳴」(『日本思想史学』第五二号、二〇二〇年)が発表されている。

(31) 片山前掲書。
(32) 昆野伸幸『近代日本の国体論―〈皇国史観〉再考』（ぺりかん社、二〇〇八年）。
(33) 長谷川亮一『「皇国史観」という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』（白澤社発行・現代書館発売、二〇〇八年）。
(34) 山口輝臣「「国家神道」と「国体」のあいだにて」（藤田大誠編『国家神道と国体論―宗教とナショナリズムの学際的研究―』弘文堂、二〇一九年）。
(35) 西田彰一『躍動する「国体」―筧克彦の思想と活動』（ミネルヴァ書房、二〇二〇年）。
(36) 井上前掲書。
(37) 五明祐貴「天皇機関説排撃運動の一断面―「小林グループ」を中心に―」（『日本歴史』第六四九号、二〇〇二年）、同「小林順一郎の思想と行動―二・二六事件から近衛内閣成立まで―」（『日本歴史』第六六七号、二〇〇三年）。
(38) 福家崇洋『戦間期日本の社会思想―「超国家」へのフロンティア』（人文書院、二〇一〇年）。
(39) 大谷栄一『近代仏教という視座―戦争・アジア・社会主義』（ぺりかん社、二〇一二年）「第二章　交錯する超国家主義と仏教―宗教的セクトとしての血盟団―」。
(40) 福家崇洋「「国体明徴」と宗教運動」（高木博志編『近代天皇制と社会』思文閣出版、二〇一八年）。
(41) 粟津賢太「戦没者慰霊と集合的記憶―忠魂・忠霊をめぐる言説と忠霊公葬問題を中心に―」（『日本史研究』第五〇一号、二〇〇四年）。
(42) 武田幸也「今泉定助の皇道発揚運動」・藤田大誠「葦津珍彦小論―昭和初期における一神道青年の軌跡―」・東郷茂彦「天野辰夫の天皇観・神道観について」（以上、國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』弘文堂、二〇一六年所収）。
(43) 松沢哲成『天皇帝国の軌跡―「お上」崇拝・拝外・排外の近代日本史―』（れんが書房新社、二〇〇六年）「第二章　天皇帝国の構造」の「第2節　寄せ場と底辺・下層労働者―一九二〇年代を中心に」。
(44) 藤野裕子『都市と暴動の民衆史―東京・一九〇五～一九二三年―』（有志舎、二〇一五年）「第三章

屋外集会の変転―日比谷焼打事件から一九二〇年代普選運動まで」。

(45) 町田祐一『近代日本と「高等遊民」―社会問題化する知識青年層―』(吉川弘文館、二〇一〇年)第二部「第四章　昭和初期にかけての「高等遊民」と思想運動」。

(46) 吉野領剛「昭和初期右翼運動とその思想―神兵隊事件における安田銕之助の役割―」(『法政史学』第五七号、二〇〇二年)、田上慎一「「右翼政治家」中原謹司試論―愛国勤労党から信州郷軍同志会へ―」(『法政史学』第七八号、二〇一二年)・同「信州郷軍同志会と中原謹司―選挙母体としての再検討―」(同右、法政大学史学会報大会発表要旨)、佐々木政文「愛国勤労党南信支部組織準備会の活動と反資本主義思想―本号所載「森本州平日記」の解題にかえて―」(『東京大学日本史学研究室紀要』第一九号、二〇一五年)、木下宏一『近代日本の国家主義エリート―綾川武治の思想と行動』(論創社、二〇一四年)など。

(47) 寺崎英成／マリコ・テラサキ・ミラー編著『昭和天皇独白録』(文春文庫版、文藝春秋、一九九五年)八七頁。

(48) 前掲拙稿「近代日本の「右翼」運動の系譜と大日本生産党―玄洋社・黒龍会との比較、組織の変遷から―」、前掲『ハンドブック近代日本政治思想史―幕末から昭和まで』所収の拙稿「頭山満―玄洋社の精神的リーダー」・「玄洋社―福岡の民権結社からアジアへ」・「内田良平―黒龍会・大日本生産党を率いた国家主義運動家」・「黒龍会―内田良平とその周辺」を参照。

(49) 原口大輔「創生期国士舘の群像―福岡県人脈と渋沢栄一を中心に―」(『国士舘史研究年報　楓原』第一〇号、二〇一九年)。

(50) 石瀧豊美『玄洋社・封印された実像』(海鳥社、二〇一〇年)「【資料④】玄洋社社員名簿」(同書、巻末一五～六六頁)。

(51) 「広告『玄洋社々史』(購買斡旋先青年大民団〔抄〕)」(『国士舘百年史　史料編上』、学校法人国士舘、二〇一五年、八七一～八七二頁、一九一七年八月一日)、「広告『頭山翁清話』(『大民』誌連載稿の編纂)」

（同右八七二頁、一九二三年六月一日）。

（52）菊池義輝「中野正剛の教育実践と運動―青年大民団・国士舘との関連―」（『国士舘史研究年報　楓原』第一一号、二〇二〇年）。

（53）自由党系「土佐派」については中元崇智『明治期の立憲政治と政党―自由党系の国家構想と党史編纂―』（吉川弘文館、二〇一八年）、同『板垣退助―自由民権指導者の実像』（中公新書、二〇二〇年）を参照。

（54）有馬学・石瀧豊美・小西秀隆『福岡県の近現代』（山川出版社、二〇二一年）は、この三〇年ほどの福岡県内の自治体史の成果をふまえた通史であり、玄洋社系の動向をふくめ地域政治や経済を知る上で参考になる。

（55）成田龍一『シリーズ日本近現代史四　大正デモクラシー』（岩波新書、二〇〇七年）vi頁。

（56）鹿野政直『大正デモクラシーの底流―〝土俗〟的精神への回帰』（NHKブックス、一九七三年）二五頁。

（57）同右

（58）有馬学『日本の近代四　「国際化」の中の帝国日本一九〇五～一九二四』（中央公論新社、一九九九年）「プロローグ　日露戦後という時代」。

（59）有馬学「「大正デモクラシー」論の現在」（『日本歴史』第七〇〇号、二〇〇六年）一三八～一三九頁。

（60）「国家神道」に関しては、近代日本の政教未分離の問題を問う村上重良氏以来、単なる宗教政策を越え国民の思想を縛ったと「広義」にとらえる議論（島薗進氏）や、あくまでも神道の国家管理政策に限定的に用いるべきとして「狭義」にとらえる議論（阪本是丸氏など）など評価は一定しない。

（61）赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』（校倉書房、一九八五年）「第二章　大正デモクラシーと神社」一〇二～一〇三頁。

（62）畔上直樹『「村の鎮守」と戦前日本―「国家神道」の地域社会史―』（有志舎、二〇〇九年）三二四～三二五頁。

（63）伊東久智『「院外青年」運動の研究―日露戦後～第一次大戦期における若者と政治の関係史』（晃洋書房、二〇一九年）「補章　「院外青年」の行方―昭

和戦前期における個人史的考察」。

(64)「選挙権拡張論（「大民」政界要人普選論稿）〔抄〕」（『国士舘百年史　史料編上』八六四頁〈初出『大民』第二巻第六号〉、一九一七年六月一日）。

(65)青年大民団「選挙権拡張運動開始檄」（同右、八六四～八六五頁〈初出『大民』第二巻第七号〉、一九一七年七月一日）。

(66)「大民倶楽部例会記事（普通選挙問題研究会）」（同右、八七〇頁〈初出『大民』第六巻第二号〉、一九二〇年八月一日）。

(67)前掲大庭論文「大正期の大民団と普通選挙運動―普選論と第一五回衆議院総選挙を中心に―」。

(68)前掲拙稿「内田良平「純正普選」運動と大日本生産党―一九二〇年代における「右翼」運動形成の一断面―」。

(69)内田良平文書研究会編『内田良平関係文書』第八巻（芙蓉書房、一九九四年）。

(70)野村浩一・今井清一解説『北一輝著作集』第二巻（みすず書房、一九五九年）二二四～二二五頁。

(71)福家前掲『満川亀太郎―慷慨の志猶存す』三五七頁。

(72)井上前掲書「第一章　「右翼」は頭が悪かったのか―文部省データの統計的分析」。

(73)堀前掲『最新右翼辞典』三〇九頁。なお、この辞典では、鈴木は専門学校卒だが実際は高等部卒なので誤記である。また、西田税研究の堀真清氏のまとめでは、鈴木の回想を根拠に八幡が国士舘出身と記すが（堀真清前掲書三三〇頁）、在籍した記録は確認できないとのことである（国士舘史資料室のご教示による）。

(74)前掲菊池論文「中野正剛の教育実践と運動―青年大民団・国士舘との関連―」。

論文

政友会と大正昭和における国士舘の教育事業

―労働問題から高等拓植学校へ―

大庭　裕介

はじめに

第一次加藤高明内閣のもと、一九二五（大正一四）年五月五日に普通選挙法が成立し、二五歳以上であれば、所得にかかわらずほぼ全ての男子に選挙権が付与された。国民生活の安定と貧富の差解消の期待のもと、約九〇〇万人の新有権者が誕生したが、有権者全体の七五％にあたる新有権者票の獲得をめぐって、与野党の政策的な差異が縮小していった。

貧富の差に立脚した政治的不平等が解消されたとはいえ、経済的格差は依然として残っており、一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、格差是正を訴える軍人や右翼によって国家改造が唱えられ、五・一五事件（一九三二年）や二・二六事件（一九三六年）に代表されるテロの時代を迎える。血盟団など同時代の代表的な右翼団体が国家改造を企図してテロへと踏み込んでいくなかで、国士舘は世田谷地域との共同での国士舘商業学校（一九二六年）、高等教育機関の国士舘専門学校（一九二九年）、また国士舘高等拓植学校（一九三〇年）などを相次いで設置し、さらに理事の一人である山田悌一が満洲鏡泊学園を創立したように、教育機関の設立に力を注いでいく。

これまで一九二〇年代後半から三〇年代にかけての国士舘の教育事業については、国士舘高等拓植学校のほか、「満洲国」が一九三二年に設置認可した鏡泊学園を中心に検討されてきた。国士舘高等拓植学校から鏡泊学園の設置については、熊本好宏氏[1]・槻木瑞生氏[2]・漆畑真紀子氏[3]の一連の論稿があるが、いずれも各校の設置過程や運営に比重を置くものの、移民事業を中心に据える国士舘

の事業展開は自明のこととされてきた。その一方で、国士舘は、普選運動への参加や柴田の衆院選出馬など社会・政治運動を展開しており[4]、同時代の社会との関連のもとで、国士舘の教育事業を位置づけていくことは一定の意義があるものと考えられる。そもそも、国士舘高等拓植学校にせよ、鏡泊学園にせよ、短期間のうちに設立が企図されているような印象さえあり、政界の側にも国士舘の教育事業への理解があったものと推測できる。

本稿では国士舘が一九二〇年代後半から三〇年代において教育事業に力を注いでいった要因を検討するとともに、国士舘の教育事業を同時期の政治や社会のなかに位置づけていきたい。

1　政友会との関係の希薄化

制限選挙による一部国民への利益偏重を痛烈に批判して、国士舘の母体である大民団は、一九一七（大正六）年より『大民』誌上に「選挙権拡張運動開始檄[5]」を掲載し、普通選挙運動に着手する。こうした大民団の動きに対し、同団と近い関係にあった政友会は普選に反対の立場をとっていた。一九二四年の第一五回衆院選に柴田徳次郎が出馬するなか、長年にわたって柴田を支援してきた政友会副総裁の野田卯太郎も体調不良に見舞われていたことや、普選への賛否の違いもあり、政友会は表立っての支援を差し控えていた[6]。

普選をめぐる大民団と政友会の疎隔が氷解に向かう契機となったのが、一九二五年の普選法の成立であった。同法の成立をきっかけに社会主義者・共産主義者の国政進出が問題化していったことで、国体変革を拒む大民団と政友会の両者は再び歩み寄っていく[7]。ただし、政友会総裁の田中義一が国士舘顧問に名を連ねるようになったとはいえ、一九二七（昭和二）年以降も大民団と政友会は希薄な関係に終始している。

政友会との関係が目立たなくなったのは、国士舘維持委員会委員として柴田を支えていた野田[8]が一九二七年二月二七日に逝去したことも一因であろう。維持委員の後任には、野田の息子俊作（衆院議員・政友会）が就任する。この時、俊作は第一五回衆院選で初当選（一九二四年五月）していたものの、まだ衆院議員となって日が浅いこともあり、卯太郎ほどの支援を期待できなかった。

一九二六年から野田は体調を崩して病床に臥せっていたこともあり[9]、野田に代わって存在感を増していったのが、一九二二年から国士舘維持委員となった渋沢栄一であった。特別な資産もなく、経営が盤石でない大民団・国士舘[10]にとって、寄付金の出資や財界名士との橋渡し役を担ってくれる渋沢の援助は必要不可欠であった。渋沢はかつて伊藤博文からの政友会への入会勧誘や井上馨の入閣要請を謝絶しつづけており、政治に手を染めることを潔しとしなかった。こうした実業人の伝統的非政治性を体現する渋沢の発言力が増していったことや柴田徳次郎の衆院選での敗北を背景として、大民団は次第に政治的言論活動から社会事業へと活動の軸を変えていった。

もともと、大民団も政党とは一線を画すべきとの自覚をもっていたが[11]、一九二五年の普選法成立も社会事業への転換を促す一因となったことも指摘しておきたい。

一九二四年の第一五回衆院総選挙で第一党となった憲政会の呼びかけに、政友会と革新倶楽部が応じ、三党連立の第一次加藤高明内閣が六月に発足する。同内閣のもとで納税制限を撤廃した普選法が一九二五年三月に公布される。しかし、普選法成立直後に閣内は地租の地方税移譲をめぐって足並みが乱れ、八月に政友会と革新倶楽部が連立から離脱すると、政友会は憲政会の切り崩しを企図して政治スキャンダルの追及に乗り出していった。

第五二帝国議会（一九二五年一二月～翌年三月）・第五三帝国議会（一九二六年一二月～翌年三月）では朴烈事件や松島遊郭疑獄事件の政治責任ばかりが問われ、帝国議会は政策や予算の妥当性を議論する場でなくなっていた。一向に改善の気配を見せない国会論戦に、国民のあいだには政党政治への不信感が漂いはじめていた。そうしたなかで普選こそが政局混乱や社会問題解決の糸口になるとの考えは、大民団に限ったものではなかった。メディアでも普選待望論が顕著になっていき、一九二六年一二月二四日の『東京朝日新聞』には次のような論調が掲載されている。

> 政治の不振は久しいものであるが、今年の政治季節ほど醜怪を極はめたものはなかった。実に松島事件、機密費問題、朴烈問題とかの泥合戦以外、朝野の政党の間に、何一つ政治問題らしい政治問題はなかったのである。かくのごとき政治季節は、ひとり近年

のみいはず、議会始まって以来あまり類があるまい。この醜怪を続けた結果は、国民の議会解散要望である。国民は、今や普選によって議会を根本的に改造する以外、政府を如何に換へるも、結局、牛を馬に換へるに過ぎぬことを知るに至った。[12]

この記事は第五三帝国議会における国会論戦の停滞を問題視したものであるが、政局刷新のためには内閣改造ではなく、普通選挙によって議会を根本的に変革する必要があると説いている。つまり、メディアにおいては解散総選挙への期待値が「憲政の常道」による内閣交代を上回っていたのである。

解散総選挙の声が高まるなか、政党の「監視者」を自負する大民団がなぜ政治刷新を唱えないばかりか、政治を静観する態度をとったのだろうか。普選法が成立したとはいえ、一九二四年に衆院選が実施されたばかりで、解散でもない限りは普選法による選挙は一九二八年まで待たなければならなかった。この時、大民団が解散を唱えなかった直接の理由は定かでないが、与党憲政会が一五〇議席近くを占めるなかでの解散は、与党に有利な選挙戦となることが予想され、大民団が支持する政友会の議席がさらに減少するとの懸念があったからかも知れない。また、無産主義者を警戒する柴田徳次郎たちにとって普選法に基づく選挙は、無産政党の国政進出を予感させたのかもしれない。大民団は普選運動の最初期から普選実現が一部国民に集中する利益偏重を是正してくれると考えていたものの、次第に現状維持の考えを抱くようになっていった。

与野党がともに解散を先送りし、[13]国会が空転する以上、格差是正には政府外勢力に頼らざるを得ないというのが当時の社会認識であった。大正から昭和にかけて深刻化していく格差を解決するため、無産主義者たちが中心となり、多くの労働争議や小作争議が起きたが、こうした運動の増加は渋沢栄一を代表とする実業家に危機感を与え、教育や道徳普及による労働者の懐柔が図られることとなる。

2　渋沢栄一と大民団の社会事業

一九二〇年代は、戦後恐慌にはじまる不況からの脱却

が課題となっており、労働争議や小作争議ばかりか失業者の増加も問題となっていた。そうしたなかで渋沢栄一など穏健・保守の企業家たちは、労働問題・失業問題の深刻さを受け止めつつ、労使双方の人格修養によって問題を解決していく道を選ぶ。その旗振り役となったのが協調会であった。

協調会とは一九一九（大正八）年に徳川家達（いえさと）を会長として発足した内務省の外郭団体で、労使協調の実現を標榜していた[14]。協調会が唱える協調主義は人格主義に基づく社会連帯の思想であり、労使双方に自己抑制を求める思想であった。自己抑制のためには人格修養が必要とされ、労務者講習会では「寝食行事を共にし、人格と人格と相接し、心霊と心霊と相触れて共に〳〵人間としての自覚に甦り、以て労働問題の解決に一道の光明を認めようと考へた[15]」とある。こうした人格修養を協調会が求めたのは、「唯闘争に依るに非ざれば到底労務者の地位の向上を期し得べからずとする観念、即ち現時の社会には協調の余地なしとする絶望的思想は、本会の明に否認するところである[16]」との急進的労働運動・階級闘争否認のためであった。

国士舘では一九二一年二月二一日の第一回労務者講習会を受け入れる。労務者講習会をきっかけに渋沢との関係ができたことで、翌年六月に渋沢は国士舘維持委員会の委員に就任する。

この時期、渋沢は労働組合の必要を認めつつ、穏健な運動となるよう労使双方を教育することで[17]、「階級対峙の形を以て闘争を事とする社会問題・労働問題」が解決するとの見通しをもっていた[18]。渋沢の発想は労働者に人格修養を迫ることで、労働運動を骨抜きにするというものであり、労働運動の過激化を抑制する立場は大民団も同様であった。

今日の時世は、私が申す迄もなく、容易ならざる秋に際会して居ります。政界は醜悪なる党争を繰返して国家あるを忘れて居ります。帝国の最高学府並専門学校の教育は日本精神を没却して、不軌を図るの逆賊をすら出して居ります。小作争議、労働争議は随所に起り、社念[20]思想は益々悪化の情勢を示し、各方面とも混沌たり、雑然たるの有様であります。近く普選の実施を前にして、日本の政局、時世は如何

に帰着するや、実に不安であります。[19]

この史料は国士舘大学創設を議論した一九二六年の維持委員会での上塚司（財団法人国士舘理事）の発言である。上塚が時局上において「容易ならざる」と懸念するもののなかには、政界闘争、既存の大学・専門学校の運営とならんで小作争議と労働争議が挙げられていた。この維持委員会開催の前年より労働争議は社会主義者たちの指導のもとに組織化されていった。[20]こうした社会主義者たちの動向に対し、予てより柴田徳次郎は「無産無智と称する人士大同々々に就かんとするとき、恒産恒心ある人士の分裂争闘に傾くは邦家の吉祥に非ず」[21]とし、否定的な立場をとっており、労使双方が分断される労働争議ではなく、穏健な手段をもって労働問題・失業問題に取り組むほかなかった。

その穏健な手段こそが教育であった。「商業道徳振興」[22]の一環として国士舘商業学校が一九二六年四月一日に開校するが、同校に期待された役割は、「忠孝を基調とし義を泰山の重きに置く」[23]という思想普及であった。上塚たちは労働争議を社会思想の悪化が招いたものと考える以上、旧来からの道徳による社会思想の改善が理念として反映されていったのである。こうした儒学的道徳による経済人の修養は渋沢と共通するものであった。そもそも商業教育の確立と経済人の修養は、渋沢の念願であり、かねてより渋沢は商業教育の重要性を次のように説いていた。

何うしても商業教育を農科・工科と同じやうに進ませなければならぬ。但し商人が気位許り高くて実際に熟練せぬのは可かぬといふのは道理に相違ないけれども、それ故に商業学校の階級を低くして置かなければならぬといふことは不当である。[24]

これは東京商業学校が東京商科大学に改組された一九二〇年三月三一日の如水会（東京商科大学同窓会）の席上での渋沢の講演である。演説のなかで渋沢は商業教育を農科や工科同様の地位に押し上げることを説いている。それと同時に渋沢は商法会議所会頭を務めていた頃よりグローバルな視点で経営活動を行える経済人の育成を求めていたとされ、[25]明治以降、日本社会における商業

教育の確立は渋沢の悲願であった。

3　移民事業への関心

国士舘商業学校開校から四年が経った一九三〇（昭和五）年四月六日、国士舘高等拓植学校の開校について栗野慎一郎（維持委員会会長）から渋沢に打診されている[26]。国士舘高等拓植学校は入学資格を「中学校卒業者、甲種実業学校卒業者、又は右と同等以上の学歴ありと認めたるもの[27]」とあり、先に開校されていた国士舘中学・同商業学校の進路の一つとして設けられた。国士舘高等拓植学校設置は、一九三〇年四月九日に認可申請書が東京府に提出され[28]、同月二五日に認可された[29]。設置申請書によると、その目的は「南米ブラジルニ発展セントスル国士的人材ヲ養成ス[30]」るとあり、ブラジル移民を推奨するものであった。

もともと移民政策は、野田卯太郎の肝いり事業の一つであった。一九二三（大正一二）年四月二三日の政友会第二回役員幹部連合会の席上で、当時政調会長であった野田は移民の国策化を「極めて重要且つ重大[31]」と発言していた。この時、野田が移民政策を重視したのは、一九二〇年代より政治・社会的争点となった小作問題の解決のためであった。地主など地方の名望家を支持基盤とする政友会にとって小作問題の解決は重要な課題であるばかりか、土地の細分化による零細農家の増加を抑えつつ、農村から都市に流出した人口を移植民によって農業主体に再生する[32]一挙両得の策であった。政友会では一九二三年の役員幹部連合会後も床次竹二郎派の代議士たちによる検討が続けられた[33]。

しかし、床次は一九二四年一月に中間内閣である清浦奎吾首相との提携を唱え、突如として政友会代議士一四九名を連れて脱党し、新たに政友本党を立ち上げる[34]。牧山耕蔵や東郷実たち移民政策の論客を多く抱える床次派が政友会を脱会したことで、移民政策の中心は政友本党へと移っていった[35]。床次は結党直後の総裁演説において、農村問題解決のために移民政策を重視していく姿勢を明確にしていく[36]。移民政策の論客を抱える政友本党は、一九二七年六月の民政党結党を経て、一九二九年七月に政友会と合流するまでほぼ一貫して反政友会の立場にあった。政友会に近い立場をとる以上、国士舘は政友本党が

中心となっている移民政策に迎合する訳にはいかなかったのだろう。[37]

また、政友本党と国士舘とでは移民事業の目的が異なっていたことも指摘しておきたい。政友本党は移民政策を人口過剰解決の一環と位置づけた[38]のに対し、財団法人国士舘理事の上塚司は、人口過剰の解決は移民でなく、産児制限を以てはかるとの考えを持っていた。[39]むしろ、上塚の移民構想は大規模な移民が実現すれば、金融機関や資本が海外進出を企図し、不況に喘ぐ日本経済の再建につながるとの考えであった。[40]このように一九二〇年代において単純な人口抑制策を唱える政友本党に国士舘が同意することがなかったのは、政友会との関係に加え、移民事業の目的をめぐる認識の違いが原因であった。

その後、移民政策の重点化は憲政会内閣で幣原喜重郎外相を中心とする外務省の反対をうけて実現をみなかったものの、一九二七年に首相となった田中義一（政友会）のもとで一転して認可される。[41]一九二八年度予算として移民政策予算七六万円が成立したことで、移民事業は田中内閣の目玉政策の一つとなっていき、国士舘も高等拓植学校開校へと乗り出していくのである。

4　商業学校と拓植学校の並立

田中義一内閣のもと、移民政策が重視されたことに加え、一九二八（昭和三）年にブラジルのアマゾナス州で土地無償譲渡がまとまりかけたことで国士舘高等拓植学校は開校へとこぎつける。[42]この時、国士舘の運営に影響力をもつ渋沢栄一が同校設置を認めたのは、渋沢自身が一九一四（大正三）年より日本移民協会理事を務め、かねてより次のように考えていたためであろう。

> 而して其移民の事業は我帝国には頗る重大なることである、大いに注意してやらねばならぬと云ふことを忘却したのではないか、甚しきは其必要に気が付かなかつたのではないかと申して宜いだらうと思ひます、近頃亜米利加に往つて居る移民に就いて種々なる紛議が生じたと云ふは人種の関係もありませう、宗教の差異もございませう、政治的の事も無いとは言はれぬか知らぬが、併し現に米国移住の人々の行状若くは心掛の善くなかつたと云ふことが大いに其排斥の声を高めたと云ふことである、果して夫

れが事実としますれば、此移民協会があつて前以て此点に注意して、移住の前によく其移民に注意を与へると云ふことを致したならば、排斥の声もなく無事に済んだかも知れぬのである、[43]

これは一九一五年一二月の日本移民協会総会での渋沢の演説であるが、このなかで渋沢は一九〇〇年代の日本人移民急増に伴う、アメリカでの日禍論について言及している。渋沢はアメリカ社会の日本人移民排斥の原因を、人種・宗教・政治上の問題に加え、移民の行いや心がけに求めており、日本人移民への悪感情を解消するには、移民に注意を促すような移民教育の必要性を説いていた。[44]

そもそも、日禍論は日本人移民に仕事を奪われた下層の白人たちによって唱えられていたが、こうした把握を抜きに日本人移民の素行不良に原因があるとするところに渋沢の移民教育の限界はあった。しかしながら、渋沢が移民教育に注視したことで、賛意を得ることにもつながったと考えられる。

国士舘高等拓植学校の「設立認可書」によれば、「南米ブラジルニ発展セントスル国士的人材ヲ養成ス」[45]るとあり、ブラジル移民を推奨するものであった。ブラジル入植が推奨された要因は、一九二四年にアメリカで成立した排日移民法によって移住が不可能となったハワイに代わり、同地が有力な移住地となっていたことに加え、広大な土地があったことで大規模な移民事業の展開が見込めたからであろう。

前述の通り、国士舘高等拓植学校長に就いた上塚司は、移民事業の拡充が日本の覇権獲得に関わると捉えており、大規模な植民が実現すれば、金融機関や資本の海外進出にもつながるとの予測を立てていた。[46] 上塚の考えは不況にあえぐ日本経済の救済策としても移民事業を位置づけるものであるが、こうした考えは上塚に限らず、拓務省にも共通するものであった。拓務省拓務局がまとめた「昭和六年九月調移植民に要する国費と教育失業救済事業に要する国費調」[47]によれば、報奨金・収容所収容費・教育費などの移民事業の総額は約一三三万円で、移民一人当たりにつき一九二円ほどの税金が投じられていた。これに対し、失業救済事業は八一六万円ほどであり、失業者一人当たりの経費は二六〇円と算定されている。た

だし、「同報告書」によれば、失業者対策は同一の失業者が毎年恩恵に与ることもあり、生涯雇用や継続雇用を生み出すものではないとされ、効果に疑問が持たれていた。この報告書は当時廃止が検討されていた拓務省が存続をかけて移民政策の費用対効果を訴えるものであり、やや我田引水の観は否めないとはいえ、移民政策は断続的な不況に見舞われた日本経済の救済策の一つと考えられていたのである。

移民事業を農村復興にとどまらず、広く経済効果にまで及ぶとする発想は特筆すべきものであり、経済的格差是正の必要を認識しながらも教育機関における道徳の普及しか思いつかなかった国士舘にとって移民事業は有効な一手であったのであろう。

しかし、経済救済策であったはずの移民事業は、政友会との関係のなかで転換を余儀なくされていく。上塚が津崎尚武・東郷実（いずれも政友会代議士）との座談会において民政党が唱える拓務省廃止を批判したことを皮切りに、国士舘は一九三二年に「満蒙ハ我帝国ノ生命線ニシテ之ガ開発ハ刻下ノ急務」[48]との認識のもと、国士舘高等拓植学校に満蒙科を設ける。これは犬養毅政友会内閣が先鞭をつけた満洲移民の国策化を推進していく動きであった。

こうした国策化の動きに加え、この時期、日本社会において移民希望者が増加していったことも、国士舘高等拓植学校の改組拡大につながっていったものと思われる。一九三一年末から翌年にかけて冷害による凶作のため、東北・北海道の飢饉は深刻化し、さらに世界恐慌によるアメリカ経済の凋落が生糸輸出を激減させ、東日本の農村の貧困は深刻化していった。欠食児童の数は全国で二〇万人を超えると推定され、子女の身売りも増えていた。[49]

こうした農村の惨状を救済すべく召集された第六三帝国議会（一九三三年八月二三日～九月四日）では、政府貸付金の返済据え置き・強制執行法の改正・三億円の開墾事業と開墾助成の拡大に加え、移民奨励が提出・可決される。[50]以後、犬養内閣から広田弘毅内閣までのあいだに満洲移民は国策化していく。国士舘は移民を奨励する立場にあったことで、一九三二年には日本政府や関東軍の支援を受けて、関係者の一人である山田悌一が「満洲国」に鏡泊学園を建設し、[51]関東軍と同様に大陸進出へと

加担していくのである。

おわりに

本稿では国士舘が移民事業へと力を注いでいく過程を、同時期の政局や社会との関連のもとで明らかにしてきた。格差是正が社会的課題となった一九二〇年代後半から三〇年代の社会において、渋沢栄一と同様に労働争議批判の視点に立ち、国士舘は商業教育と道徳教育の併用を唱えていった。当然のことながら、人格修養と労働問題・失業問題は別次元の問題であったことから、労働争議の抑制には一定の効果はあるかも知れないものの、格差是正には効果を期待できなかった。格差是正への対応が有耶無耶となりつつあるなかで、田中義一内閣のもと移民政策の重視が打ち出されたことで、国士舘は移民事業へと積極的に関与していく。

国士舘のねらいは、移民事業を通じて外国への経済進出と自国経済の救済であった。さらに移民事業は、政友会の移民政策支持の意味合いも含むものであった。

ただし、ブラジルへの移民教育を想定していたものの、次第に政友会との関係のなかで満洲移民事業へと移行していったように、国士舘の教育事業は組織外から招いた有力者（渋沢や政友会関係者）たちの意向に忖度するものであったと思われる。

こうした実業家や政治家の意向に沿った事業展開は、その時々の社会問題や政局に左右されるという問題を抱えていた。しかし、一方で国士舘が依存していたのは、急激な社会変革を好まない層たちであったことが、革新的な右翼運動とも一線を画し、体制内に活動の範囲を押しとどめさせていったと考えられる。

一九三〇年代後半以降、戦時色が濃くなるなかで政府の要請のもと、国士舘の組織も一九三九（昭和一四）年四月に「学識ニ依リ東亜建設ノ真髄ヲ把握確認セシメ、以テ満蒙支ニ於ケル行政、商業、経済並ニ社会教化ニ関スル公私ノ事業ニ従事スベキ人材」養成のための興亜科を設け[52]、一九四三年には国士舘商業学校の募集停止[53]を打ち出す。戦前の日本社会において国士舘は、渋沢や政友会といった保守勢力の意向を踏まえるものであった。

しかし、一九四五年の敗戦を迎えると、戦後改革のなかで国士舘と縁のある人物たちの公職追放が相次いだこ

とで、国士舘の事業運営にも転換が迫られていく。今後の課題は、戦前は穏健的な右派勢力にとどまっていた国士舘が、戦後右翼として自己規定していく過程を検討することにあろう。

〈注〉

（1）熊本好宏「国士舘高等拓植学校と移民教育」（『国士舘史研究年報　楓原』第三号、二〇一一年）。

（2）槻木瑞生「大陸と鏡泊学園」（『国士舘史研究年報　楓原』第四号、二〇一二年）。

（3）漆畑真紀子「満洲鏡泊学園とその設立過程について」（『国士舘史研究年報　楓原』第五号、二〇一三年）。

（4）拙稿「大正期の大民団と普通選挙運動」（『国士舘史研究年報　楓原』第一二号、二〇二一年）。

（5）『国士舘百年史　史料編上』（学校法人国士舘、二〇一五年）八六四～八六五頁。

（6）前掲拙稿「大正期の大民団と普通選挙運動」。

（7）日本共産党の活動員数千人を検挙した三・一五事件（一九二八年）に関与した首相田中義一を国士舘顧問に迎える。

（8）熊本好宏「野田卯太郎」（『国士舘史研究年報　楓原』第二号、二〇一〇年）。

（9）坂口二郎『野田大塊伝』（野田大塊伝刊行会、一九二九年）によると、一九二六年一一月から自邸に

引きこもっていたようで、「翁の病床は、終日、畳んで収ふこともなく、その侭にしてあることが多かった」（八一六頁）とされる。その後、同年末に葉山に大正天皇を見舞ったものの、再び病床に伏していたようである。

(10) 「解題」（前掲『国士舘百年史　史料編上』九七〇頁）。

(11) 一九二〇年一月八日に普選導入の是非を協議した大民倶楽部の例会では、「大民倶楽部は元来政党者流の俗流に投ずるが如き軽挙盲動の団結にあらず、国政の指導者たり、援助者たり、保育者たり、政党政派の監視者たり、懲戒官たり、鞭撻者たり」（「大民倶楽部例会記事（普通選挙問題研究会）」一九二〇年一月八日〈前掲『国士舘百年史　史料編上』八六九～八七〇頁〉）。

(12) 『東京朝日新聞』一九二六年一二月二四日号。

(13) この時、政友会と政友本党が解散に乗り気でなかったのは、憲政会が議席において優位を占めるなかでの選挙は、自党の苦戦が予想したからであるが、一方で憲政会が解散を渋ったのは、総裁の若槻礼次郎が資金調達に難を抱えていたためであった（若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史』〈読売新聞社、一九五〇年〉二八八～二八九頁）。

(14) 協調会の概要については、偕和会編『財団法人協調会史』（偕和会、一九六五年〈一九八〇年復刻〉）のほか、高橋彦博「協調会と大原社研」（法政大学社会学部学会編『社会労働研究』第四二巻第三号、一九九五年）などに詳しい。

(15) 「国士村の労務者講習会」（前掲『国士舘百年史　史料編上』一九六～二〇一頁）。

(16) 「協調会宣言」（『社会政策時報』一九二〇年一二月号）

(17) 協調会理事の添田敬一郎が『竜門雑誌』（第四八一号、昭和三年一〇月）に寄稿したところによると、渋沢の労働組合に関する認識は左のようなものであった。

労働組合の発達しない我が邦に於ては、組合の認むべきは之を認め、之を助長し、組合をして健全なる発達を遂げしめ、指導誤りなきを期すると共に、根本精神に於ては協調主義を深く奉じて、労資両者が平等なる人格の基礎の上に立ち、自他の

正当なる権利を尊重して、自制互譲、以て産業の発達、文化の進展、国家社会の安寧・福祉を増進せしめんとするにありと言ふことが出来ようと思ふ（竜門社編『渋沢栄一伝記資料』三一巻、五八二～五八三頁）。

(18) 前掲『渋沢栄一伝記資料』三一巻、五八一頁。

(19) 「維持委員会経過概要（議事録）」（前掲『国士舘百年史　史料編上』二八三～二九八頁）。

(20) 『日本労働年鑑』七集、一九二六年。四三九～四四〇頁。

(21) 「大学趣旨」（前掲『国士舘百年史　史料編上』二七七～二七九頁）。

(22) 大庭覚太郎「商業学校の開校を祝す」一九二六年四月一日（前掲『国士舘百年史　史料編上』四六四～四六五頁）。

(23) 大場信續「私が国士舘を理解する迄」一九二六年四月一日（前掲『国士舘百年史　史料編上』四六九頁）。

また、一九二七年の学科課程表には普通道徳に加えて毎週一時間ではあるが、三学年と四学年に商業道徳の授業が課されている（「商業学校学則改正認可願」一九二七年二月一五日〈前掲『国士舘百年史　史料編上』四七九頁〉）。

(24) 「如水会々報　第一号・第九―二二頁大正九年天長節　挨拶」（前掲『渋沢栄一伝記資料』四四巻、二九二頁）。

(25) 井上潤『渋沢栄一伝』二二九頁（ミネルヴァ書房、二〇二一年）。

(26) 「渋沢栄一宛栗野慎一郎葉書」一九三〇年四月六日（前掲『国士舘百年史　史料編上』、六〇四～六〇五頁）。

(27) 「高等拓植学校案内」一九三〇年四月（前掲『国士舘百年史　史料編上』、六二〇頁）。

(28) 「高等拓植学校設置認可申請書」一九三〇年四月九日（前掲『国士舘百年史　史料編上』、六〇九～六一六頁）。

(29) 「高等拓植学校設置認可書」一九三〇年四月二五日（前掲『国士舘百年史　史料編上』六一七頁）。

(30) 前掲「高等拓植学校設置認可申請書」。

(31) 『政友』第二七三号、一九二三年。

(32) 井上将文「戦前二大政党制と拓務省問題」(大阪歴史学会編『ヒストリア』第二六〇号、二〇一七年)。

(33) この時、床次竹二郎が移民政策に注視した理由は、床次の経済的な支援者である平生釟三郎がブラジルへの農業移民を支持していたためとされる(前掲井上「戦前二大政党制と拓務省問題」)。

(34) 床次竹二郎の脱会については、村瀬信一『首相になれなかった男たち』(吉川弘文館、二〇一四年)。

(35) 前掲井上「戦前二大政党制と拓務省問題」。

(36) 政友本党誌編纂所編『政友本党誌』八六頁(政友本党誌編纂所、一九二七年)。

(37) なお、床次竹二郎は一九二四年から二六年にかけて国士舘維持委員に在任している。本来、維持委員は国士舘経営の経済的支援が期待される役職であったが、床次は平生釟三郎から「清貧」と評されたほか、年間四〇〇〇~五〇〇〇円の政治資金調達に窮していたようである(吉田武弘「床次竹二郎の政治思想と行動」〈立命館大学人文科学研究所編『立命館大学人文科学研究所紀要』第一〇〇号、二〇一三年〉)。

(38)『官報号外　衆議院議事速記録』二六号、六三八頁。

(39)「愚挙なり、暴挙なり、拓務省断じて廃すべからず―拓務省存廃問題座談会―」(『植民』第一〇巻第七号、一九三一年)。

(40) 上塚は拓務省存廃問題座談会において次のように答えている。

アマゾン進出の如きも一年に二萬の移民が送られることになれば、二十萬噸の船が要る。つまり一萬噸級の船なれば二十艘要ることになる。一艘の船が出帆して帰るには、一年に二回しか往復が出来ぬ。さうすると十隻の船が年中動いて居なければならぬ。多少の余裕をもたなければならぬから十二三隻の船が要る。さうして向ふに行くには移植民や其荷物を持つて行く、帰りは向ふの産物を持つて来る。今迄日本郵船なり、大阪商船のやつて居るだけではいけない。どうしても新な航路を開始しなければならぬ。さうすると新たな方面に商品を持つて行き、金融機関が又それに伴つて進出して行く。総ての経済機関が進出出来る。さうして初めて日本が海外に向つて本党の進出が出来

ようと思ふ（前掲「愚挙なり、暴挙なり、拓務省断じて廃すべからず」）。

(41) この時、拓務省設置が認可されたのは、田中が一九二七年七月に創設した人口食糧問題調査会とも関係している。一九二七年七月二〇日の会合の席上、無所属代議士で海外興業社社長の井上雅二が唱えたことに端を発する。この時に田中が井上を重視したのは、政友会の資金対策としての必要性からであった（前掲井上「戦前二大政党制と拓務省問題」）。

(42) 前掲熊本「国士舘高等拓植学校と移民教育」。

(43) 前掲『渋沢栄一伝記資料』五五巻、六五八頁。

(44) 上塚も同様に右のように移民教育の必要性を説いている。

現在渡航する多数の移民に、充分教養ある者のみを望むことは到底出来得ない処である。この教養の高からざる人々のみが新たなる社会を形造る時、その社会組織の素質が自ら低下すべき事は自然の理である。勿論年を経るに従つて、自然に純化せられ向上する筈ではあるけれども、そうなる迄のその社会組織は決して楽観し得べきものではあり得ない。此処に指導者としての教養あり見識の備われる人物の必要が起つて来る。私の主催する拓植学校はその人物を養成せんとするのである（上塚司「新会社の建設に」〈『植民』第九巻第六号、一九三〇年〉）。

(45) 前掲「高等拓植学校設置認可申請書」。

(46) 前掲「愚挙なり、暴挙なり、拓務省断じて廃すべからず」。

(47) 国立公文書館所蔵「昭和財政史資料」第三号四八冊、平15財務00299100-00300。

(48) 「高等拓植学校学則改正願」（前掲『国士舘百年史史料編上』六三三～六三四頁）。

(49) 河島真『戦争とファシズムの時代へ』一四二頁（吉川弘文館、二〇一七年）。

(50) 前掲河島『戦争とファシズムの時代へ』一四三頁。

(51) 前掲漆畑「満洲鏡泊学園とその設立過程について」。

(52) 「専門学校学則変更認可申請書」一九三九年三月一〇日（前掲『国士舘百年史　史料編上』、七八三～七八七頁）。

（53）「工業学校設置・商業学校生徒募集中止認可申請書」一九四三年一二月二四日（前掲『国士舘百年史史料編上』八二三～八三六頁）。

雑誌『大民』を探しています！

大民

国士舘の源流は、青年大民団の結成にあります。
青年大民団の機関誌、1916年創刊の雑誌『大民』は、本学の沿革を知るための大切な資料です。
しかし本学では、残念ながらほとんど原本を所蔵しておりません。
ついては、雑誌『大民』の原本を探しています。
ご提供または所蔵先の情報などをお寄せ下さい。
皆様のご協力を、何卒よろしくお願いいたします。

雑誌『大民』の概要

創刊：1916年6月15日、月刊誌
発行：青年大民団（後に大民団・大民倶楽部・大民社へ変遷）
注記：1924年7月（第11巻）より『生存同盟』に改題

ご連絡先
国士舘史資料室
TEL 03-3418-2691
E-MAIL archives@kokushikan.ac.jp

所蔵機関済み機関　福井県立図書館／静岡県立図書館／長崎市立図書館／金沢大学図書館／法政大学大原社会問題研究所／神戸大学社会科学系図書館／古市忠一文庫

1916 『大民』創刊 ▶ 1917 国士舘創立

第一回学園史講演会　講演録

『国士舘百年史』から見えるもの

―青年群像・個性・理念―

元国士舘百年史編纂委員会専門委員会委員長　佐々　博雄

○長谷川　均（国士舘史資料室室長）

皆さんこんにちは。お忙しいところお集まりいただき誠にありがとうございます。室長の長谷川です。この講演会は第一回ということで、本学の名誉教授で、長らく国士舘百年史の編纂事業に携わってきた佐々先生にご講演をお願いしました。

創立一〇〇周年記念事業の一環であった百年史編纂事業は、今年三月、『国士舘百年史　通史編』の刊行をもちまして本学初の本格的な沿革史の編纂を終え、一応終了となりました。この講演会は、百年史編纂事業の成果を学内に還元をすることを目的とし、国士舘発展の一助にしようという意図がございます。私学である国士舘が、教育のあり方、ひいては将来への発展の指針となる、長きにわたって紡いできた理念や伝統をより深く理解することは、大学教育において、今盛んに言われております三つのポリシー（学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入の方針）に基づいた特色ある教育を展開し、理解していく上で非常に重要な点であろうと考えています。

全国的に大学の志願者は減少傾向にありますが、本学で四年間を学ぶ学生に対して、丁寧な教育を行っていくためにも、国士舘の歴史を学ぶ自校史教育を充実させなくてはいけません。そういうこともあり、今日はこのような企画をさせていただいた次第です。

諸々申し上げたいことはありますが、佐々先生に早速講演をお願いするほうがよろしいかと思いますので、簡単に先生の略歴をご紹介させていただきます。先生は、国士舘大学文学部第三期卒業生で、大学院に進まれた後、

外務省外交史料館の『日本外交史辞典』の編纂に関わり、一九七六（昭和五一）年に文学部史学地理学科助手として奉職されました。その後、一九八三年に講師、一九九二（平成四）年に助教授、一九九七年に教授になられた後、二〇一九年三月に定年を迎えられてご退職されました。日本近代史・外交史をご専門とし、四〇年以上にわたって大学の教壇に立たれていたという経歴をお持ちです。論文も、出身地である熊本に関する論文をはじめとして、非常に多数の論文をおまとめになっています。二〇〇三年に発足した百年史編纂委員会では、翌年から編纂委員となられて創立九〇周年の記念誌の編集長を務められました後に、百年史編纂委員会の下に発足した専門委員会の委員になられ、さらに二〇一三年からは専門委員会の専門委員長を務められるなど、この『国士舘百年史』において、常に中心的な役割を担ってこられた方でいらっしゃいます。定年退職されるまでは、国士舘史資料室室長も兼務されたということで、国士舘の歴史を語るのに、これほどふさわしい方はいらっしゃらないと、私は確信しております。それでは先生、よろしくお願いします。

佐々博雄氏

○佐々博雄氏（講師・名誉教授）

はじめに　『国士舘百年史』編纂事業について

皆様こんにちは。只今紹介いただきました佐々博雄と申します。

私が国士舘に入学したのは一九六八（昭和四三）年、一八歳の時ですから、一九一七（大正六）年に創立した国士舘が、ちょうど五〇年経った時になります。二〇一七年（平成二九）年に国士舘は創立一〇〇年を迎え、私はその翌々年に定年退職したわけですから、長い国士舘の歴史の、まさに半分もの時を国士舘に関わってきたことになります。「そんなに長くいたのか」と、今更ながら思っております。

今日お話しするテーマは、「『国士舘百年史』から見えるもの」ということで、副題は「青年群像・個性・理念」としました。与えられた時間で一〇〇年を語るにはとても時間が足りませんので、国士舘がなぜ生まれたのか、創立者である柴田徳次郎氏がどういう人物であったのか、教育の理念である四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」と「読書・体験・反省」がどうして生まれたのか、またその構造はどのようになっているのか。そういった事について、国士舘の創立期に絞ってお話しさせていただきたいと思います。

国士舘百年史編纂事業は、二〇〇三年から始まり、二〇一五年に『史料編』上下二冊、今年三月に『通史編』が出ました。長い時間がかかりましたが、国士舘一〇〇周年記念事業としての百年史編纂が完結したわけです。国士舘では、これまでも色々な編纂物が出されてきましたが、「何を基にしてこれを書いたのか」、そういった基本的なことが分かりませんでした。例えば、先人が作った年表も、その根拠は明らかにされていません。

そこで編纂の基本理念として、国士舘の教育研究のあゆみを調べるために、客観的な歴史史料に基づき、いわゆる「お話」ではなく学術的に明らかにしようと決めました。これを次世代へ継承し、または自己点検あるいは自己評価、そして自校史教育の普及に資するという目的で『国士舘百年史』は編纂されました。

百年史編纂の経緯をお話ししますと、二〇〇七年一一月、百年史に先立ち『国士舘九十年』を出版しています。その後は、先程申し上げた編纂の基本理念にしたがって、

まず基本的な史料をまとめて、『史料編』上下二冊を作りました。上巻は戦前編、下巻は戦後編になっていて、草創期から戦後の復興と総合学園となるまでの学内外の史料を収録しています。

その後、この『史料編』を基に『通史編』を出すことになりますが、これは百年史編纂委員会の専門委員が分担をして執筆しました。本来ならば創立一〇〇周年にあたる、二〇一七年一一月に完成しないといけなかったのですが、少ないスタッフなど様々な問題があり、間に合いませんでした。代わりに『ブックレット　国士舘一〇〇年のあゆみ』という、国士舘創立一〇〇周年記念式典で参加者に配布する本をまとめました。これは、コンパクトにまとまった本で、国士舘の歴史の概説書となっております。

こうして、今年三月にやっと『通史編』を完成することができました。ですが、学生たちの活動活躍や、国士舘を支えた多くの人たちの経歴・実績など、まだまだ書かなくてはいけない基本情報があるので、それらは「補遺編」として出していきたいと、今後に期待をしながら本年五月に百年史編纂委員会はその任を終えました。

1．青年群像　～国士舘の創立～

（1）大正の青年群像

具体的な話に移りますが、基本的に『国士舘百年史』を読んでいただければ、今日の私の話を聞かなくても十分に分かる内容になっております。いかんせん、こんな分厚い本をいきなり読むのは大変でしょうから、今日は、創立期に絞ってお話ししていこうと思います。

「青年群像」として一番に挙げなくてはいけないのが、国士舘の創立者柴田徳次郎です。柴田が国士舘を創ったのは、弱冠二六歳の時でした。地位もお金もない若者が、なぜ国士舘を創ることができたのか。これは、国士舘と柴田を取り巻く状況に理由がありました。当時の日本は、明治維新によって近代化が進み、日清戦争・日露戦争での勝利を経て図らずも国際社会の中に飛び込むことになるという、非常に難しい状況にありました。一八九〇（明治二三）年に大日本帝国憲法が施行されて、当時の青年たちは憲法世代、明治憲法のもとで育ってきました。柴田も一八九〇年一二月二〇日生まれですから、まさに憲法の施行された年に生まれている。幕末維新に活動した

人たちとは違う、新しい世代が日露戦争後に活動することになります。柴田を含む大正の青年群像といいますか、日露戦後世代の青年たち、彼らが望んだことは「成功」でした。お金を儲けて、経済的に成功する。物質的な幸福というものが求められ、「成功」という言葉が非常に流行りました。

一方で、こうした物質欲のなかで、「自分はいったい何なのか」、という自我への疑問が芽生えます。自らの生き方について煩悶するようになる。これは旧制第一高等学校の生徒が華厳の滝で投身自殺したという事例があるように、成功の裏に煩悶というものがある。

また、日露戦争後、日本は経済的に発展していき、多くの労働者が生まれますが、一方、政府は、この時期、地方改良運動を起こします。日露戦争でかかった多額の戦費を賄うために、江戸時代から根付いている地域のつながりを壊す町村合併を行い、地域の共有地なども課税対象としていきました。そのため、地方においては共同体が崩れていき、都市においては工業が盛んになる。結果、地方農村から都市へ人々が流れていくという状況にあったわけです。

村落共同体の危機といえるこの時期に、一方では「義民」の伝承が非常に盛んになり、各地で義民碑が建てられます。この「義民」とは、例えば農民一揆の首謀者など、民衆のために私財や身命を賭した人のことをいいますが、柴田も義民の一人である佐倉惣五郎に傾倒し、自分も佐倉惣五郎になりたいという意識を持っていました。義民伝承が盛んになる反面、地域の共同体は崩れていったわけです。そういう大きな流れの中で、地方から都会に農民が流れ、いわゆる青雲の志という、成功を求めて地方から都会に流れた青年たちは、そこで煩悶し、労働者は地位向上を求めて修養する。一般の人たちも地位の向上を求めるようになる。そういう時代でした。

こうした大正の青年に対して批判的な本を書いたのが徳富蘇峰（猪一郎）です。後に、本学の支援者となり、維持委員を務めた蘇峰ですが、彼は熊本出身で、「熊本バンド」というキリスト教の盟約に加わったり、一八八二年には「大江義塾」という私塾を開いたりしました。日露戦争の時には桂太郎首相のブレーンとなり、国民新聞のジャーナリストでもある、当時のオピニオンリーダーとして活躍した人物です。大正になると蘇峰は、『大

正の青年と帝国の前途』という本を出します。その中で、大正の青年は「金持ち三代目」である、と表現しています。一代目は店を立ち上げ、二代目はその暖簾をなんとか守っているが、三代目になると、文化人としての教養や知識はあるが経営はうまくいかなくなる。川柳で「売り家と唐様で書く三代目」、「家を売ります」と達筆な中国様の書体で書いていると揶揄されるように、「金持ち三代目」が大正の青年だというわけです。また、蘇峰は、その本の中で大正の青年を類型化しています。「模範青年」、あるいは「成功青年」、「煩悶青年」、「耽溺青年」、「無色青年」と名付け、その軟弱さを批判する。もちろん例外もいるとは言っています。蘇峰は、これは意識の問題ではなく、構造的な問題で、こういう状態になっているのは政府が何も策を持たないからだと、最終的には政府を批判しています。

明治憲法世代である大正の青年が拠り所にしたのが、明治維新でした。後に国士舘維持委員となって経済的にも国士舘を援助した渋沢栄一も、『論語と算盤』という本のなかで、当時の物質文明・物質主義を批判し、その改革を明治維新に例えて、大正なので「大正維新」という言葉を使っています。

大正の青年たちは、自分の意見をどのように述べていたのか。すべての青年が、蘇峰が分類したような人ばかりではありませんし、それに対して批判する者もいます。憲法世代の彼らは弁論・演説で自分の意見を主張し各大学には雄弁部もつくられました。やがて弁論を中心とした学生の団体ができます。これは丁未（ていび）倶楽部という大学雄弁部の親睦団体で、日露戦争後初めての学生を中心とした啓蒙団体でした。

私は学生の時、柴田の演説を実際に聞いたことがありますが、腹の底から声を出して、語尾の「である」を独特の伸ばし方で話す。ＮＨＫの大河ドラマ「青天を衝け」を観ていると、大隈重信がそういう話し方をしていたので、それを真似ていたのだろうと思います。弁論・演説が彼らの自己主張の場であったわけです。

（2）青年大民団

明治末期、政府は二個師団増設問題という政治問題を抱えていました。日露戦争後の大陸情勢を有利にするため、陸軍から師団を増やすよう要請されたが、財政難に

あえぐ政府はそれを否決します。しかし、軍の抵抗にあい西園寺公望内閣が倒れてしまう。これに端を発して、いわゆる大正政変という、西園寺の次に内閣総理大臣となった桂太郎の退陣運動が起こります。

こうした情勢の中、国士舘の母体となる青年大民団が一九一三（大正二）年四月二日に結成されます。これは、柴田徳次郎ら福岡出身の学生を中心として作られた啓蒙団体です。柴田が学んでいた早稲田大学の武道系のクラブは福岡出身者が多くいました。また、筑前学生会という東京に出て学んでいる福岡出身学生の会もあった。そういうものが土台となり作られたのが、この青年大民団です。この青年大民団がどういう活動をしたか、あまり詳しいことは分かっていません。柴田は早稲田大学を卒業後、満洲に行って仕事をしようとしますが、望み通りにはいきませんでした。取りあえず福岡出身の相生由太郎が経営する福昌公司という会社がある大連で働きました。国際状況と日本の立場を肌身で感じていた柴田は、上塚司ら、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の若手グループと知り合いになり、意気投合します。彼らから資金援助などの話もあり、一九一六年春、柴田は日本に帰ります。

そして柴田の帰国を機に、青年大民団は具体的な活動を始めるようになります。自分たち青年大民団の意見を出すため、雑誌『大民』を創り、一九一六年五月二三日には発刊披露会を行います。その時の写真が残されていますが、中央の髭が長いのが頭山満、柴田は一列目の左端にいます。右端にいるのが宮川一貫で、もともと早稲田の学生で作られた青年大民団の中心人物です。この宮川一貫と、のちに国士舘の支援者となる中野正剛は、ともに福岡出身。修猷館（しゅうゆうかん）という旧制中学の同期で、二人とも柔道が得意でした。宮川は柔道の師範をしています。その横で髭を蓄えているのが三船久蔵十段という、一九六四年の東京オリンピックの時に柔道の運営委員を務め、空気投げでも有名です。頭山の横にいるのが後藤新平だろうと思われ、その真後ろに立っているのが永井柳太郎、早稲田大学出身の政治家です。早稲田騒動で早稲田大学を追われ、国士舘で教鞭をとった人物でもあります。

一九一六年五月二三日に発刊披露会を行い、実際に『大民』が出たのが六月一五日です。この間に大民団内で事件が起こっていました。青年大民団の中には、柴田を中心とした若手グループと宮川のグループがありました。

『大民』発行披露会（1916 年５月）

宮川は特に活動はしていませんでしたが、福岡出身の簡牛凡夫（かんぎゅうつねお）と宮川の弟がトラブルになり、会合の時に簡牛が宮川弟ら三人を切りつけるという事件を起こして新聞沙汰になります。そうしたこともあって宮川は青年大民団活動から距離を置き、その後は柴田や簡牛を中心として運営されることになり、『大民』発刊の時には、柴田が主幹となっています。青年大民団の最初の活動は、この雑誌活動になります。

『大民』創刊号は、残念ながら本体が残っていませんが、その表紙には「吾人の片言は興國救人の神韻なり」という言葉が入っている。読み方は「THE TAIMIN」と書かれているので「たいみん」です。ところが、この後出した雑誌を見ると、「T」じゃなくて「D」になって「だいみん」になっている。読み方は一貫していなかったようです。

そして一九一七年四月に本部を麻布区笄町一八二番地に移します。現在の青山七丁目あたりですが、そこにあった民家を借りて大民団の本拠地にする。この場所で国士舘が創られることになります。このとき青年大民団の顧問だったのが、専修大学創立者のひとりであり、東京市長でもあった田尻稲次郎です。そして福岡玄洋社の領袖である頭山満、同じく福岡出身で逓信大臣を務めた野田卯太郎。彼らが顧問となり、雑誌『大民』の主幹には柴田德次郎が就く。青年大民団は雑誌活動などを行ってい

ましたが、教育事業として国士舘ができるきっかけになったのは、早稲田騒動です。

(3) 早稲田騒動

私が国士舘に入学した時は、「第二早稲田」いう言葉をよく使っていましたが、実は早稲田騒動が国士舘の教育の基幹になっています。

早稲田騒動とは、一九一七（大正六）年に早稲田大学で起きた学長争いに端を発する騒動で、早稲田の勢力を二分し、学生やマスコミも巻き込んで社会問題に発展しました。当時は天野為之が学長でしたが、初代学長である高田早苗を再び学長にしようという動きがあり、これが早稲田の改革運動と相まって大きな問題になっていく。柴田、あるいは後に国士舘の理事となる花田大助や中野正剛、彼らが早稲田の革新派として天野派につきますが、天野派の永井柳太郎、伊藤重治郎、原口竹次郎らが早稲田を追われる形で天野派は負けます。

(4) 私塾国士舘創立

その後、高田とはまた別の人物が早稲田大学の学長になってこの事件は解決しますが、この事件がきっかけになって、青年大民団では「国家の大本は文教にあり」、国の基本は教育にあるとして教育路線をとり、早稲田を追われた永井や伊藤、原口らを教師として迎えます。そして一九一七（大正六）年一一月一日『大民』に「活学を講ず」と冒頭に書かれた「宣言」を出す。この後「国士舘設立趣旨」が出されますが、内容は「宣言」とほぼ同じです。そして一一月四日に、私塾国士舘が創立される。この日が今も創立記念日となっています。場所は先ほどの麻布区笄町にある青年大民団事務所です。事務所といっても、普通の一軒家です。一階が八畳、六畳と四畳半の部屋があって、二階は六畳。一階の六畳と八畳の部屋を使って夜学の塾を開いたのが国士舘の始まりです。

国士舘創立期の関係者、同人には田尻、頭山、野田の他に軍人の三浦梧楼、弁護士の江木衷、政治家の犬養毅、善隣書院を作った宮島大八（詠士）、評論家の三宅雄次郎（雪嶺）、法学者の寺尾亨、経済学者で田尻の教え子である添田寿一、早稲田騒動で辞職する原口竹次郎、山崎源二郎、慶應義塾大学教授の阿部秀助。阿部は、国士

舘の教育の中心になっていきます。そして同じく早稲田騒動で辞めた伊藤重治郎、官僚の長島隆二、中野正剛、福岡にある神社の神主である神武品太郎、玄洋社の結城虎五郎、こういう人々が名を連ねています。

（5）世田谷移転

こうして始まった夜学の塾では、中野正剛の家庭教師であったマチルド・カトウが英語を教えたり、著名な人物が講演を行ったりしていたので、人数がだんだん増えてくる。そこで、手狭な民家から場所を移そうという動きが出てきます。当初考えていたのは吉祥寺です。現在、成蹊大学がある場所に移転する計画がまとまり、「校地移設募金趣意書」を顧問の三人（田尻、頭山、野田）が書くわけです。しかし、一九一八（大正七）年に松陰神社で吉田松陰と橋本左内を顕彰する「国士祭」を実施したところ、松陰神社の宮司から、神社の隣接地に学校を作るくらいの土地があるという話を聞きます。急遽、吉祥寺を止めて、世田谷に移転することになります。早速、移転のためのお金を集めますが、その時、発揮されたのが柴田の強引さといいますか、個性が出てきますが、それはまた後でお話しします。こうして世田谷に移転します。

余談ですが、後年、松陰神社を建て替えた時、古い社をもらい受けて国士舘の中に移築し、一九四五年に戦災で焼失するまで国士神社としていました。

（6）国士舘維持委員会

世田谷移転と同時に、国士舘は財団法人となります。財団法人国士舘は一九一九（大正八）年一一月七日に認可され、理事には、長瀬鳳輔、小村欣一、阿部秀助、柴田徳次郎、花田大助の五名。監事には、山崎源二郎、森俊蔵の二名が就任します。

移転にはお金がかかります。当初は福岡の鉱山業者で、現在政治家の麻生太郎の曽祖父である麻生太吉などから支援を受けていたが、それだけでは足りない。そこで国士舘を維持していくための維持委員会を作る。これが一九二一年七月のことです。維持委員会の会長は栗野慎一郎。維持委員に顧問の野田、頭山。その他、著名な政治家、軍人。それから根津嘉一郎、浅野総一郎、馬越恭平らの実業家がこれに加わることで、財団法人国士舘の財

政基盤としました。

そして、大きかったのは一九二二年六月に渋沢栄一が維持委員会に参加したことです。実は同年四月二二日、渋沢が突然国士舘にやって来て、講演を行っています。なぜ渋沢が国士舘を訪問したのかというと、渋沢は当時、財団法人協調会という労使協調を推進し労働問題の解決を図る団体の副会長でした。その協調会が主催している労務者講習会を、国士舘で開催していたのです。国士舘は、高等部を作り、建物を作ったけれども、まだ正式な学校ではない、寄宿舎も空いている。そういうことで、国士舘の建物を使って労務者講習会を行った。これは六回ほど実施されました。国士舘を会場として実施した労務者講習会は、国士舘の献身的な協力もあって、想定以上の成果を上げました。そこで渋沢は、国士舘を見るためにやって来たものと思われます。渋沢は、『論語と算盤』という著書があるように、論語の勉強を非常によくしておりますので、論語の一節「曾子曰く、士は以て弘毅ならざる可からず。任重くして道遠し。仁以て己が任となす。亦重からずや。死して後已む。亦遠からずや」を引用して、教育をやっていくならば死ぬ覚悟でやらなければいけない、と講演したのです。渋沢が維持委員になった事は非常に大きく、以後、維持委員会の中心には渋沢がいて、多大な援助を行います。

（7）長老懇談会

そして一九二六（大正一五）年、創立からほぼ一〇年近く経った時に、国士舘拡張案なるものが出てくる。これから国士舘をどうしていくのか。そこで、長老懇談会が王子の飛鳥山にある渋沢の邸宅、今は渋沢史料館になっていますが、そこの晩香廬（ばんこうろ）で行われました。その時の写真が残っていますが、前列に野田、頭山、渋沢、徳富、後列に柴田徳次郎らが晩香廬の前で並んで写っています。この写真を撮った時、国士舘を今後どうしていくのか、まさにそういう話をしたのです。

この懇談会の中で、大学の設置という話が出てきます。もともと国士舘は、大学設立を目指していました。高等教育機関を目指していたのは間違いありませんが、大学創設のためには保証金等のお金がかかる。当時の金額で少なくとも数百万をみておかないといけない。そこで九州の鉱業家、たとえば安川敬一郎に寄付を頼んでいます。

ちょうど安川は、現在の九州工業大学の前身である私立明治専門学校を設立していましたが、そこでも大学までは作れない。炭鉱で多額の財を成した安川でも作れない、それだけお金がかかる。しかも、数年後には昭和恐慌により、経済的に非常に厳しい状況になってくるのですが、とにかく、高等教育機関を作ろうという合意はできた。こうして一九二九（昭和四）年設置の国士舘専門学校が創られます。

このように、国士舘発展の機運を作っていったということです。だから柴田ひとりで国士舘を創ったわけではなく、青年大民団という組織があって、そこに若い人々が集まってできた。当時の日本は、明治維新の後に、日清戦争・日露戦争を経て、ようやく近代国家の仲間入りをした。しかし、自分たちが望んだ社会、特に教育は、果たしてそれで良かったのか。物質中心主義ではないのか。そこでは日本の伝統や文化というものが薄れていくのではないのか。そこで精神主義が唱えられます。まさに『論語と算盤』に書いている渋沢の考え方です。渋沢のいう「大正維新」というのは「日々新たなり」、毎日を新たにしていかなくてはいけない。つまり、渋沢や頭山、野田ら、明治維新を経験した長老たちも、自分たちが行っている教育を改革していかないといけない。これは当時の全体的な教育の流れでもありましたので、国士舘でも、当初の理念に基づき取り入れていきました。

長老懇談会（1926 年 6 月　於渋沢栄一邸晩香廬）

2．個性　～柴田徳次郎～

（1）自伝

次に「個性」という部分で言うと、これは創立者柴田徳次郎のことですから、『国士舘百年史』を見ていただければ分かるかと思います。大学同窓会から『柴田徳次郎伝』が出ておりますが、その根拠の一つになっているのは、雑誌『大民』に掲載された「道辺の草」です。執筆者の名前は、「此木田頑石」になっていますが、この漢字を組み合わせれば「柴田頑石」になる。これは柴田徳次郎の自伝です。いわゆる私小説という形ですが、福岡から上京して新聞配達、牛乳配達をしながら、早稲田に入り苦学したことが書かれている。これを読むと、自分は決して一等の人間ではない。気が短くて、喧嘩やいろんなことをやった、ということも赤裸々に書いてありますし、ある時は煩悶のあまりに神経がおかしくなって自殺を考えたというような事も書いてあります。まさに大正の青年の典型的な人物と言っていいかもしれない事が、ここには書いてある。

（2）青年大民団における柴田徳次郎

柴田は、「頑固茶話会」というのを作って、夜に始まる私塾国士舘の講義の前に、講演会や、飲食をしたり、やることがなければ相撲をとったりしていました。そんな青年大民団の中でリーダー的な存在であったのが柴田徳次郎です。

青年大民団には、「大民団歌」という団の歌があります。柴田の仲間が亡くなり、その弔問のため佐賀に行く途中で作ったというのが大民団の団歌です。これを元にして柴田が作った歌詞に、早稲田大学校歌「都の西北」を作った作曲家の東儀鉄笛が曲をつけたものが、国士舘の舘歌になります。ですから国士舘の舘歌は、大学の校歌としては非常に古い部類に入る。

国士舘が、私塾から公的な学校に変わり、組織の人数も増えてくると、彼の意見に合わない生徒も出てくる。そしてもうひとつは、経済的な問題が浮上してきます。昭和初年になりますと、今まで財団法人国士舘の経理を担当していた上塚司、あるいは喜多悌一（山田悌一）が、上塚はブラジルで開拓事業を始め、喜多は満州に鏡泊学園を作るために、それぞれ国士舘から離れてしまい、経

理を担える人物がいなくなってしまった。そして昭和恐慌により維持委員会から入ってくるお金も非常に少なくなり、経営が苦しくなります。そういうなかで学園で紛争が起こって、柴田は国士舘の経営から一時期離れることになります。自らは残るつもりでしたが、裁判により離れることになってしまった。

（3）社会活動

そこで柴田は、徳富蘇峰たちと日独防共協定強化運動を起こします。柴田は、大民団ができた頃から普選運動に関わるなど、まったく政治に興味がなかったわけではありません。第二次護憲運動の時、一九二四（大正一三）年五月に選挙が行われますが、これにも大民団、当時は「大民倶楽部」と言いましたが、その推薦で立候補します。結局次点となり落選しますが、これ以降、柴田は政治から離れて教育に専念するようになります。

柴田は、日独防共協定強化運動を起こした後、一九四一（昭和一六）年に国士舘に復帰して再び経営に携わっていきます。国士舘の経営から離れた時の人脈は、後々、戦後の国士舘再建と大学設置時の人脈作りとして、非常に大きな意味を持っていたということです。

（4）資金調達

彼の個性で一番目立つのは、寄付金を集める手腕です。ただ黙っていてもお金は集まらないわけですから。当初は福岡県の石炭鉱業所等を回ってお金を集めていた。一九一九（大正八）年に麻生太吉に宛てた手紙には、毎年五百円の寄付をまとめて五千円にして寄付してもらいたいと依頼しています。手紙で「小生、元来あきらめ性の如くして、至ってあきらめざる性を有する」、「悲願のため世のためになると思う時は、あくまでも通したく有り候」といったように、非常に強硬に、自分はあきらめ性のように見えて、あきらめ性ではない、世のため人のためになる時にはしっかり頑張る、だから金を出してくれ、というわけです。さらにその翌年七月の手紙には、国士舘は今の日本に必要な存在であり、国士舘以外に「日本帝国を興す道は御座なく存じ候」と書いています。日本を良くするには国士舘に寄附する以外道はない、もしあなたが国士舘以外の選択肢があると言うのならば自分に示してくれ、と脅迫まがいのことも書いて、お金を集め

ています。

非常に個性の強いというか、『柴田徳次郎伝』に書かれているように「信念と気魄」の人物であった。それ故に誤解を生んだり、いろいろな見方も出てきたりするわけです。

3．理念　～教育理念の形成～

(1) 創立の趣旨

国士舘の理念は、先程話した宣言「活学を講ず」、ここに集約されています。当時の物質文明を重視した結果、「科学智の売買」という知識だけを詰め込む教育を批判する。そして自らを「活学を講ずる道場」であるとし、師弟間の情誼とか礼節とか、あるいは自由な運営を重視して取り入れている。

当時、国士舘には「国士村」という寄宿制度があり、生徒と先生が衣食住を共にしていました。柴田も生徒と共にそこに住み、一緒になって野菜を育て、それを食し、朝は五時に太鼓の音と共に起き、夜まで共同生活を行う。そして自由に意見を交わし、緩やかな規則の中で自由に生活をする。当時の自由教育の影響ともいえます。この時期は各地でこうした取り組みが行われていました。

(2) 信条・徳目

国士舘の四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」が、いつ出てきたのか。柴田は一九二一（大正一〇）年から一九二二年にかけて欧米漫遊の旅に出ます。まず、渡米してワシントンで行われた海軍軍縮会議、いわゆるワシントン会議を視察し、その後ヨーロッパ諸国を周遊して帰国します。帰国後の報告会において、国士舘の進むべき信条として、「誠意の智恵、勤勉の勇気」と述べており、この時初めて「誠意」「勤労」という言葉が出てきました。その後、一九二四年に徳富蘇峰に宛てた書簡では、「誠意・勤労・見識・気魄」という言葉がはっきり出てくる。そして一九二六年に出版された柴田徳次郎述『国士舘と教育』という問答形式の冊子がありますが、この本が国士舘教育の解釈の基本になっています。そこには「誠意・勤労・見識・気魄」の意味が書かれています。

（3）教育理念の構成

現在の学内にも掲示してありますが、国士舘の教育理念の構成というのは、青年大民団からの理念である、「国士」となる人材の育成を柱に、日本の文化伝統に基づく修養のもとでその人材を育てていく。一方で教育の立場からいくと、物質文明を統御するのは精神文明であり、精神教育である。すなわち「活学を講じて活人を作る」という事になります。そして最終的には、「国家の柱石たる真智識人」の養成に至るという構成になっています。

それから四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」を実践していくためには、「読書」し、「体験」し、「反省」する。これが国士舘の教育理念です。柴田はこれを非常に大事にしており、国士舘から離れていた時も、自分で新聞『大民』を作りますが、その宣伝欄に柴田徳次郎述『国士舘と教育』を載せている。これは自分が言っている言葉であり、これが国士舘の教育理念ですよ、と宣伝しているのです。

では「国士」とは何か。最初に言ったのは高等部の学長、長瀬鳳輔です。「国士というのはゼントルマンだ」と言っている。さらに「国士」というのは日本独自のもので、他の国には無い、真の国家を思う大人格者であるとも言っている。「国士」とは、ゼントルマンを超えたものだ、という言い方をしています。

柴田は『国士舘と教育』の中で、「国士」とは悟った者のことであると言っている。柴田は、この「悟る」という言葉をよく使います。国士とは、地位や職業に関わらず、「相当に練れた智慧を持って、時と場所に応じて、人も信じ、我も安んずる事のできる者」だと言っている。柴田は上京後、増上寺が設置した芝中学校で学んでおり、そこで仏教の教育も受けて、周りにもそうした人物が多かったので、その影響があるかと思います。

（4）教育理念の表現

この教育の理念を実際に表現している建物が国士舘大講堂です。内部構造は当時最新のトラス構造を取り入れていますが、外観は寺院を思わせる漆喰壁の純和風建造物になっています。そして、教育の理念を体現しているのが寄宿舎生活です。大講堂内に太鼓が置いてありますが、あの太鼓を叩いて、その音に従って寄宿舎では生活していました。

そして、この楓・紅葉の校章。寮の一つに尚絅寮（しょうけい）がありました。この「尚絅」という言葉は中国の古典『中庸』の一節「衣錦尚絅悪其文著也」から採っており、世田谷移転間もない国士舘の寄宿舎生活について触れた雑誌には、「心を錦として粗衣を尚ぶ意にて帽子の徽章も紅葉にて象徴されている」とあります。いわゆる「ボロを着ていても心は錦」というという意味で、校章の紅葉もそれを象徴していると紹介しています。

また国士舘の舘歌、これは「区々現身の粗薪に大覚の火を打ともし」とありますが、まさに自分たちが焚き木になって悟りを開いていくんだ、というようなことを言っています。

このようなものに教育の理念が表現されているわけです。これらは『通史編』に詳しく書いてありますので、そこを見ていただければよいかと思います。

4．『国士舘百年史』編纂の意義

（1）自己点検・自己評価

最後に、『国士舘百年史』の意義とは何なのか、ということについて、少し触れたいと思います。

文部科学省は一九九一（平成三）年に、大学設置基準の大綱化ということを大学に言ってきます。これ以降、各大学では学部の再編や授業評価、自己点検・評価といった改革が行われます。沿革史の編纂は、自己点検・評価の一環として実施されるようになり、その意味で沿革史を持つということが大事になってきます。近年、助成金を受ける私学に対し、「どういう理念を持っているか、私学としてどういう精神を持っているのか」ということが問われるようになっていますが、教育の理念・精神が助成金にも影響する。この時、沿革史を持っていることが非常に重要になります。

さらに、教育史・沿革史を専門にしている寺崎昌男氏の『学校沿革史の研究　総説』によると、「学園史というのは『現在の学園』が規定する一定の作品である」と言っている。さらに学園の沿革史とは、「現在の経営・研究スタッフの学問水準や研究的熱意、組織としての合意の水準、さらには学校・大学の将来像に対する構想であり、それらの差異に応じて、沿革史は出来映えを異にする」と言っています。

これは自画自賛ですが、『国士舘百年史』は、それぞれ一〇〇〇頁を超える『史料編』二冊と『通史編』、全部で三冊ですから合計三〇〇〇頁を超える沿革史は、全国的に見ても誇っていい部類に入るかと思います。近年、一〇〇年を超える大学が増えてきましたが、その中でも自慢できる沿革史だと思います。

(2) 国立公文書館法と公文書管理法

『国士舘百年史』は、国士舘史資料室が中心となってまとめました。国士舘史資料室は、国士舘に関する史料を収集・保存・公開している部署です。近年、近世の古文書から現代の記録まで、いろいろな史料が失われていますが、その中でも特に公文書は残していかなければいけないということで、一九八七（昭和六二）年、議員立法で成立した公文書館法により、国や自治体で作成された公文書を保存するための公文書館が各地につくられます。国家記録の保存利用機関としては、国立公文書館があります。

一九九九（平成一一）年、国立公文書館法ができます。その後、公文書管理法と通称される、「公文書等の管理に関する法律」が、二〇〇九年に公布されます。これは、将来の国民に対する説明、現在だけでなく将来についても、政府のアカウンタビリティ、すなわち説明責任をくっつけたものです。いろいろ問題もありますが、公文書管理法の施行後、大学等国立の機関や、政府の省庁においても、多くの史料を公開するようになっています。

(3) 大学アーカイブと記憶の共有

これにより、国立大学では公文書館を作って公開する義務が生じます。それは当然、私立大学にも及んでくる。今後、私立大学においても、社会への説明責任がより問われるようになってくる。沿革史というものが、従来の大学のプロパガンダ、大学の宣伝のためという目的から、近現代の学術研究へと大きく変わる一因となりました。大学史編纂研究の全国組織である全国大学史資料協議会という組織もできています。

そこで言われてきたのが「アーカイブズ」です。このアーカイブズというのは、日本では馴染みの少ない言葉です。もともと文書は私的なものだという考えがあり、これまでは日本ではあまり公文書館が作られてこなかっ

たこともありますが、単に公文書館を表す単語ではありません。では、アーカイブズとは何なのか。

歴史学者である大濱徹也氏の『現代の公文書史料学への視座』によると、「協同体　国家・民族等々の営みを記録したもの」を選別して遺していくことで、その構成員が「己の業務を確認し、社会的記憶ないし集合的記憶を生み育てていく記憶の器・記憶の家というべきもの」であり、その器は「学校等々と構成員の関係を問い質し、人々の権利と名誉を守り、負わされている義務を想起せしめます」とあります。

国士舘もそうでしょう。今まさに「アーカイブズの扉を開けることで、個人や社会の幸福を模索して、過去と繋がる現在を知るべく、先祖さがしをなし、己が帰属している場を求めて、アイデンティティを実感する」ことができるわけです。

「図書館があるじゃないか」という人もいますが、図書館が「記録の産物」、記録から作ったものを保存展示するのに対し、アーカイブズ・資料館・文書館というのは、「記録が生み出されてくる全過程を管理し遺す」ものです。大濱氏は「記憶の根を読みとることが可能となる装置であるがために、記憶の殿堂にほかなりません」と述べています。「記憶の根っこ」を読みとることが可能となる装置というわけですから、成果だけではなく、その元にあるもの、それをどう使っていくかということが問題になるわけです。

まさに、国士舘の学園の特色・記憶を共有することで、個人や社会の幸福を模索し、アイデンティティ、建学の精神や理念を確認していくということに繋がるということです。

おわりに　『国士舘百年史』の活用と展望

これは最初の目的に挙げましたように、『国士舘百年史』を自校史教育へ活用していく。そして「国士舘アーカイブズ」の確立を図る。国士舘史資料室を国士舘における史料の収集・保存・管理をおこなう恒常的機関、まさにアーカイブズとしていき、将来の学園史編纂のために、これを大学カリキュラムの中に取り込んでいく。そして、「国士舘人」としての記憶を共有し、そして学問研究の情報発信基地とすることができればと思います。

最後に、アメリカの国立公文書館の台座に刻まれている次の言葉を紹介します。

「過去の遺産は将来への実りをもたらす種子である」

将来のために、記録を遺し、眠っている記憶を取り戻す、そういう作業が必要になっている。そういう意味でも、公開された史料を利用していくことが大事かと思います。

以上で私のお話を終わらせていただきます。

質疑応答

○質問者A

大民団から国士舘が独立して教育機関になったということですが、国士舘が独立した後も大民団はその活動を続けていたのか。

もう一つは、柴田先生が欧米を視察したという事ですが、その時の身分はどういうものだったのか。

○佐々

まず、大民団と国士舘との関係ですが、一九二六（大正一五）年、熊本に「熊本大民」という組織ができて、一九二七（昭和二）年に、大民団と国士舘との関係を書いた『大民倶楽部とは何ぞや』という本を出している。それを見ると大民団と国士舘は、「鳥の両翼、車の両輪」だと書いてあります。青年大民団ができたのは一九一五

熱心に耳を傾ける参加者（2021 年 11 月 12 日　於 MCH 5 階）

（大正四）年、実際の活動は、一九一六年に雑誌『大民』を出してからのことです。

大民の経営面から見ると、大民団が経営している教育機関は、現在の淑徳学園、当時はマハヤナ学園といいましたが、このマハヤナ学園と国士舘の二つでした。ところが、国士舘が財団法人となった頃から大民団は、国士舘とマハヤナ学園の経営からも離れたようです。ただ国士舘は、大民団が主催する講演会や夏期講習で場所を提供するなどはしています。

大民団の名称も、「青年大民団」から「大民倶楽部」になったり、「大民社」になったり、「大民団」を再称したりしますが、最終的には「大民倶楽部」という形になって、国士舘・マハヤナ学園の経営から離れていく。必然的に、社会面では大民団、教育面では国士舘となります。国士舘が次第に自立して、柴田が教育に専念するようになると、大民団の社会活動は別のものになっていく。国士舘が経営的に自立しだすと大民団とは別の動きになってくる。

ただ、まったく違うのかというとそうでもない。国士舘が維持委員会をつくるときは、大民団のメンバーを利用し、大民団も国士舘を利用しています。相互補完の関係は、残っています

それから欧米視察の件。柴田は一九二一年から一九二二年にかけて欧米を視察しますが、実は何の立場も無い。ですから逆に「自分は大民新聞の特派員だ」というようなことを、恐らく言っていたのだと思います。大民団が派遣したというよりも、自らがそういう主張をし、記者に交じって記者クラブにも入って、大統領の演説を聞く時もそれを利用する。

後日、柴田が衆議院選挙に立候補した時も、大民団（大民倶楽部）から了解をとっています。所属は無所属で出馬しますが、大民倶楽部の理事会で了解を取ってから立候補しています。そういう意味では、政治的・社会的な部分では大民団が動いて、教育的なところは国士舘が動いていた。ところが柴田が選挙に落選したことにより、政治活動から脱して教育活動に専念するようになる。それにより明確に分かれるようになっていったのだろうと思います。

○質問者B

編纂にあたってご苦労なさった点が多々あるかと思い

ます。特にどのような事でご苦労があったのでしょうか。また、編纂が始まってから新たに発見された史料があればお聞かせください。

○佐々

いちばん困ったのは、書く「材料」が無かったということです。本来であれば創立者の手元や学園に、まとまった史料があるというのが一般的なことですが、戦前の国士舘関係の史料は、この学園に残されていませんでした。ですから、国士舘八〇周年記念史編纂の時に調べたのが制度史です。これは編纂委員の湯川先生を中心に、国立公文書館あるいは東京都公文書館で、国士舘諸学校の設置認可の申請書と認可書を探し出しました。そもそも、こういう基本的なことが押さえられていなかった。

次は、それを歴史的に裏付ける史料が必要になります。書簡なり書類なり、それが学園内にはまったく無かったことが、一番大変でした。そこで学外の諸機関に残されている史料を探しました。それを調べに最初に着手したのが九州大学や福岡県地域史研究所（当時）です。福岡県地域史研究所には、野田卯太郎関係の史料があるというので行って調べたら柴田書簡が一通だけありました。その一通は比較的重要な史料で、柴田が野田に宛てた、自分の就職を大倉組に依頼する内容の手紙です。満洲の本渓湖に鉱山があり、当時は日本の大倉組が事業を行っていましたが、この鉱山に就職したいと、野田に斡旋を依頼している。日付を見たら一九一五（大正四）年八月ですから、すでに渡満しており、現地から書いていたことが分かりました。また、九州大学石炭研究所（当時）所蔵の麻生家文書に柴田家の文書があると聞き、これも調査に行って柴田徳次郎関係の文書を見つけました。

もうひとついえば秀村選三監修『森俊蔵日露戦役従軍日記』という本が出版されていますが、これを見たら森俊蔵が国士舘の監事になっていることが分かった。ひょっとしたら他にも史料があるんじゃないかと思い、ご遺族にお伺いしたら、関東大震災の時に、ほとんど燃えてしまったそうですが、持ち出して残っている史料がありました。見ると、森俊蔵が花田大助と共に福岡の伊藤伝右衛門とか鉱業主の家を、一軒一軒回って国士舘への寄付をお願いしていることが分かる日記で、この日記により、他の史料の裏付けを取ることができました。これらは大きな収穫でした。この日記は、国士舘に御寄贈

いただきました。

もうひとつ、いざという時に重要になってくるのが、雑誌『大民』です。『大民』には、国士舘の幹部とか、柴田の小説とか、論説とか、記録とか、国士舘や大民団、柴田や関係者のことなどがいろいろ書いてあるわけです。ところが国士舘には全号は揃っていません。創刊号も所蔵していないので、表紙と一部分しか分かりません。それから新聞。柴田が国士舘から離れたていた時に作られた新聞『大民』、昭和になってからもずっと発行されていましたが、性格がまったく違ってきますが、これも揃っていない。そういう根本的史料が学園内に無かったため、学外で集めなければいけないことが、一番大変でした。

それから、やっぱりスタッフです。歴史編纂を行っている部署は、継続性というのが必要なので、理事会できちんとご理解いただいて、今後も人員を補充していただきたい。これだけのものを短時間で作るのは、なかなか大変ですが、まだ満足に至らない点が数多くあり、人員が必要であるということをご理解いただきたい。人の問題、史料の問題があるなかで、なんとかここまでやったというのが現実です。

最初に阿部昭先生が、先を見越して九〇周年の数年前から記念誌編集部会や編纂作業を担う部署を立ち上げたという、この時間的な余裕があったのでなんとかできました。編纂事業は、先の先を見てやっていかないといけない。史料が集まり、『国士舘百年史　史料編』を出したことによって卒業生の方、または関係者からご信頼をいただいて、さらに史料をご寄贈していただけるようになった。これが非常に大きな、良かった面ですね。苦労した点は、基本的史料がなかったということが一番です。

○質問者C

国士舘の「舘」の字ですが、最初の頃は「館」の字を用いていたと思いますが、「舘」に変えた意味合いとか、いつ頃から変わったのか教えてください。

○佐々

創立以来、「国士舘」の用字は、「國」や「館」の字を用いていることもありましたが、だいたい昭和五〇年代後半には今の「国士舘」の表記がほぼ通例となったようです。一九九三（平成五）年に文書に用いる字は「国士舘」に統一することが決まりましたが、その後も看板な

どに古い表記が残っていたので、一九九七年に改めて用字の統一が図られ、周知・徹底されて現在に至ります。

なお『国士舘百年史』では、百年史編纂委員会で国士舘の用字は「舘」に統一すると決めましたので、史料で「館」と書かれている箇所以外は基本「舘」を使っています。以上です。

※本稿は、二〇二一（令和三）年一一月一二日に、世田谷キャンパスのメイプルセンチュリーホール（MCH）五階第一会議室で行われた第一回学園史講演会「『国士舘百年史』から見えるもの—青年群像・個性・理念—」をもとに、加筆修正したものである。

国士舘の思い出

中学校・高等学校での職員奮戦記

元国士舘中学・高等学校事務室職員（二〇一四年三月退職）　望月　愉見子

はじめに

二〇二〇（令和二）年に世界的大流行となり、日本のみならず世界を一変させた新型コロナウイルスは、二〇二一年になっても依然として猛威を振るい続けている。そのため、退職後にはじめた傾聴ボランティア（高齢者等の話し相手になるボランティア活動）も二〇二〇年二月から自粛しており、「また今度ね」と握手した手の温もりを再び取り戻すことは未だできない。あらゆる面で再起動の年になればと、切に願うばかりである。

国士舘中学校・高等学校の事務職員として三五年間勤務したが、二〇一四（平成二六）年三月に退職してから早や八年が経とうとしている。辛うじて残っている思い出を辿りながら克明に書き記したつもりではあるが、記憶違い、勘違いがあろうことは否めない。その点は何卒ご寛恕願いたい。

中学校・高等学校職員としての第一歩を踏み出したのは、一九七九（昭和五四）年四月六日だった。雇用契約書には、「職種　高等学校生活指導部事務補助、身分　パートタイマー、時給　四五〇円、労働時間　平日午前八時半から午後四時半まで、土曜日は午前八時半から午後二時半まで」と記載されていた。入職後は生活指導部に籍を置くことになった。八カ月が過ぎ、仕事にも慣れてきた頃、所属長であった教員の松山國雄先生の推薦でパート職員から嘱託職員となった。所属長と一緒に理事長室に伺い、嘱託職員になった御礼を理事長の柴田梵天先生に申し述べて握手をした。それから数年後、中学・高等学校教員組合の働きかけもあって、念願の正職員と

なった。とても有難く、一層頑張らねばと、その後の成長の糧とした。私は、生活指導部で事務補助を一〇年間、会計係として二五年間、中学校・高等学校の事務室に、長年従事することになる。

三五年間の在職中、中学校・高等学校の校長には、柴田梵天・綿引紳郎・増田信・四方一渤・吉田治郎・牧勇次郎・中元令士・川野一成の諸先生が就任することになった。また事務長には、岩崎源治・峰木昭三郎・山崎竹照・斎藤毅・松本敏道・石原保郷・田所清人・上田節男の各先生が歴任された。

八号館時代の中学校・高等学校

一九七九（昭和五四）年四月、パートタイマーとして入職した時に強く印象に残っていることがある。それは、国士舘中学校・高等学校の募集要項に載っていた入学の条件の一つに「日本国籍を有する男子」の一文があったことだ。当時の中学校・高等学校は、いわゆる男子校で、制服は共にジャバラの黒詰襟であった。制服は、世田谷通りに店を構えていた「ドレステーラー」で誂えていた。高校生の袖にはモールが施されており、中学生にはないので、袖口の飾りの有無で中学生か高校生かが分かるようになっていた。学生帽と襟につける校章・学年バッジは、渋谷にある「山田帽子店」で購入できたが、生徒は帽子を被ることがあまり好きではなかったように記憶する。時々実施される服装検査の時に限っては、生徒が正門の手前で帽子を被る光景も目にしたものである。また、正規の制服から逸脱した派手な裏地の付いた服を作る「並木洋服店」製のものを着用する生徒もいた。

当初、中学校・高等学校の校舎は八号館であったが、一部は大学の工学部と共有していた。校舎内は冷たいコンクリートの床だった。生徒はスチーム暖房のみの教室で授業を受け、休み時間になるとスチーム管のある窓際に並んで温まり、扇風機もない夏の暑さ対策は、団扇を使う者、なるべく見えないようにズボンを半分くらい下して涼をとる者もいた。一方職員室以外の事務室、体育準備室、生活指導部では管財課で灯油を貰い石油ストーブで暖をとっていた。夏の冷房器具は、扇風機と自然の風だった。

八号館入口の階段を上がった一階には、正面の柱には

大きな掛け時計があり、すぐ左側には屈まなければならない程小さな窓口がある中学校・高等学校の事務室があった。廊下を奥に進むと右側には校舎内唯一の女子トイレ、中学校・高等学校の体育準備室、八号館全体で使用しなければならないコピー室や学園の印刷室があった。印刷室にはいつも定期試験などの印刷をお願いしていた。左側には、学園の医務室、電話交換室、電算機室があった。

地下には、食堂と高等学校工業科の実習室があり、実習室では自動車コースの生徒が油の付いたツナギで授業を受けていた。自動車コースの生徒は、町田市小野路にある国士舘大学自動車学校（一九八五年廃止）実習場での授業もあった。小野路には没収した規則違反の制服を処分するための焼却炉があり、時々生活指導部から出張していた。後年のことであるが一九九七（平成九）年頃に、環境への配慮から学校の焼却炉が原則使用禁止になると、没収した制服や焼却を要する中学校・高等学校の年度末の書類は、宮地幸雄先生（高等学校情報理数科教員）と自動車コース所有の小型トラックに積み込み、世田谷清掃工場に運んで焼却してもらうことになった。覗き込んでも底が見えないくらいの深い焼却炉にトラックと自分の腰を命綱で結んで必死に書類を投げ込んだものである。

八号館の二階は、中学校・高等学校専用の教室があり、突き当りは工業科の職員室、左手には一時期、校長不在であった校長室、給湯室、職員室、そして配属された生活指導部があった。廊下を挟んで向かいには、教室に図書を並べた図書室や中学校の教室があった。夏になると、中学校の教室では世田谷校地の隣にある勝国寺の敷地から入ってくる蚊に悩まされた。左側には美術室・音楽室・書道室が並んでいたように記憶している。

また三・四階は高等学校の教室であったが、その上の五階にある大学で使用していた教室からは、いつも煙草の臭いが流れてきた。そして屋上には、テニス部が練習に使用していた狭いコートが備えられていた。私も屋上のテニスコートで数回練習に参加したが、それがきっかけでテニスの面白さを知り、高田馬場のインドアテニススクールに入会することにした。

生活指導部・スクールカウンセラー

事務補助として籍を置いていた生活指導部は、部長の松山國雄先生をはじめとする黒田修身先生・柴田徳積先生・加藤肇先生と、数年後に渋谷警察署少年課を退職された松本義男先生を加えた、五人の先生と私の六人体制だった。この六人で「マージナルマン」とも呼ばれる、身体は大人、心は子どもという、難しい年代の生徒たちと向き合っていた。

当時は、外部からトラブルの連絡が入ると、空き時間の教員が素早く現場に向かっていた。指導部には、度々問題行動の生徒たちが呼ばれ、事故報告書に記入を求められつつ神妙な顔で説教を受けていた。二〇代・三〇代の若い教員と生徒との間には、時として激しいぶつかり合いがあった。また毎年夏と冬には、警察署の防犯課少年係や通学の利用駅へのあいさつ回りも、欠かすことのできない行事であった。さらに、生徒間で何度かトラブルがあった東京朝鮮中高級学校の先生方との交流も図っていた。

生活指導部の校務分掌には、入試業務も含まれており、入学試験は重要な位置を占めていた。当時の高等学校の在校生は、都内出身の生徒が二割、神奈川県など他県の出身生徒が八割を占めていた。生活指導部の教員を中心に各教科の代表が入試委員会のメンバーとなり、「事前相談」と称して、通例、各中学校の教員に受験希望の生徒と共に来校していただき、小テストと面接を受けてもらっていた。その判定会議は、長時間を要することもあり、会議が終わるころには外が暗くなることもあった。会議資料は面接教員分のコピーを用意する必要があるため、一階のコピー室と二階の生活指導部を何回小走りで往復したか分からない。さらに事前相談の翌日には、入試委員で手分けして、その結果を各中学校に電話連絡しなければならなかった。

この「事前相談」を実施するに至った背景には、一九七三（昭和四八）年頃から頻発していた生徒の暴力事件がある。

一九七三年六月、「近代化委員会」が設立されるも根本的な解決には至らなかった。その後も続発する暴力事件は一九七八年の「学内諸問題対策委員会」の設立につながり、その目的を達成するための六つの専門部会が設

けられた。暴力問題対策部会などと共に「中高問題対策部会」が挙げられ、部会長に中元令士先生（国語）が任された。中高問題対策部会は、大学生と同居という状況の下では十分な教育効果を挙げることは困難であるとし、社会的評価を得て私学の最大の関心事である生徒募集のためにも中学校・高等学校専用の独立した校舎の建設が急がれるとした。

中高問題対策部会の提言を受け、入試委員会は暴力的要素のない生徒の確保、入学を急務とした。「事前相談」は、名称こそ違えども他の私立高校でもすでに実施していたが、本校では、「事前相談」で内定合格を受けた生徒も一般受験生と一緒に入学試験を受験しなければならなかった。このシステムは、中学校にとっては進学校の決定であり、本校にとっては生徒数の確保につながったのである。

一九八一年には、生活指導部にスクールカウンセラーとして三輪誠先生が就任した。生活指導部とは別の部屋を設けたスクールカウンセラー室では、生徒の悩みの解消に当たっていた。室内には、三輪先生の人柄を示す優しい絵が飾られていた。

この頃、私は「お客様の心をつかむ応対術」というテーマで、教育研究で有名な森上教育研究所主催の研修を受けることになった。

・応対一瞬、印象一生

・学校のイメージは、応対して三秒で決まる。受付窓口に立つ人は学校のキーパーソンであらねばならない。

この研修で得た対応術は、今でも心に残っている。現代は、受付もＡＩ搭載のロボットが活用されつつあるが、次世代にも残しておきたい応対術である。

不幸な事件とその影響

一九八三（昭和五八）年七月四日、朝から蒸し暑い日であった。授業開始後ほどなくして、学園の上空には、ヘリコプターが飛び交い、また学内にはテレビカメラが入って次第に騒々しくなっていった。最初は、何が起きたのか分からなかったが、学内で理事が刺殺されるという不幸な事件が起きていた。学問の府として真理と正義を求める場での事件は、本当に極めて残念の一言に尽き

る。その後の学園は大混乱となり、紆余曲折を経て翌年四月には世田谷校舎が封鎖される事態を招くこととなった。

中学校・高等学校の教員組合がロックアウトを強行したのは、それまで山積していた負の連鎖を断ち切るためだといっても過言ではない。一九七四年一一月一五日、国士舘高等学校・中学協議会が、国士舘中学・高等学校教員組合として新たに誕生した。一九七八年頃は相変わらずマスコミは学園の特異性、学内問題を報道し続けていた。中高の組合員は、授業を粛々と進め、授業に支障のない昼休みに中庭に集まり、学園の民主化を求める学生や、大学の職員組合や教員組合と共に「自分たちの職場は自分たちの良識で良くしなければならない」「学園発展のために頑張ろう」とアピールし、総長派と対立していた。

このような中、一九八四年三月三日、中学・高等学校の卒業式を迎える朝、マイクロバスで三〇名から四〇名の見慣れない黒服の集団が校内に乱入したのを他の先生が目撃し、トラブル回避のために卒業生を一旦若林公園に集合させた。丸谷智脩先生、福田三郎先生、加藤肇先生は職員室に急行し、全日制普通科三一二名、工業科五〇名、中学校一六名の卒業証書を持って隣接する勝国寺の塀を乗り越え守ったのだった。

一、二時間が経過し黒服の集団が学園から出て行ったのを確認した後、卒業生を一〇号館の剣道場に誘導して卒業式を無事挙行することができた。柴田梵天校長不在の中、守り抜いた卒業証書は中学校教頭の犬飼吉兵衛先生が代行して卒業生に授与した。在校生は三号館前から正門までアーチを作り卒業生を見送った。

今でも職員の間で語り草になっているのが、「ガムテープ事件」である。福田三郎先生は購入したばかりの赤いダウンジャケットの中に卒業証書を隠して勝国寺の塀を越える際、有刺鉄線にダウンジャケットを引っ掛けて破いてしまい、羽毛が出ないようガムテープで修理したとのことである。

そして大学の入学式が行われた一九八四年四月五日の夜、一部の組合員らが学園を封鎖し、籠城したのだ。学園封鎖は、中学校・高等学校教員組合員全四〇数名のうちごく一部の五名位の組合員で秘密裏に進められていた。籠城する中学校・高等学校教員へ塀越しにレモンの

はちみつ漬けを差し入れたものである。学園封鎖は一週間程で終了し、教員は新年度の準備に取り掛かり、いつもの学園を取り戻した。この混乱により、四月七日に予定されていた国士舘中学校・高等学校の入学式は延期され、一四日に剣道場で行われた。（参考　『国士舘中学校・国士舘高等学校　校史　創立七〇周年記念』講師編集委員会、一九八七年一一月／『教員組合二十年史』国士舘大学教員組合、一九九三年一二月）

学園封鎖後、学園改革運動が急速に展開されて、同月中旬には一連の混乱は終息に向い、同月二八日には新理事長に綿引紳郎先生、副理事長に清水成之先生が就任した。次いで同年六月一六日には、全国高等学校校長会のトップであった増田信先生が、国士舘中学校・高等学校の校長として就任された。

その後、国士舘では、一九八四年九月に「国士舘諸規定整備委員会」が発足して学園の諸制度を再整備し、次いで一九八六年五月一三日には「国士舘将来計画委員会」が発足して全学的かつ中長期的な改善が多方面に行われていくことになった。この間、中学校・高等学校においては、一九八四年一一月に校長増田信先生のもと、独自の「本校教育改善会議」が設置され、総合的な教育改革の策定を図った。次いで一九八五年四月には、一五歳人口の激減期を迎えるにあたって、入学者の確保および教育の振興を図ることを目的として、独自の「振興対策室」が設置されることになった。

事件の影響で一九八四年度の中学校・高等学校の志願者数は激減し、二次募集を余儀なくされた。

募集活動は「募集改革」

学園のイメージダウンが避けられなかった一九八四（昭和五九）年以降、中学校・高等学校の生徒募集活動としてまず思い起こすのは、国士舘高等学校に生徒を送り出してくださった、都内・神奈川・埼玉の出身中学校へ全教員が手分けして訪問したことが挙げられる。各教員は、割り当てられた各中学校に資料を持参して訪問し、本校への受験希望者数の情報を得て、それを受験者数の目安にしていた。授業の合間を利用した各中学校への訪問活動は、数日間をかけて丹念に行われた。他にも、中学校教員を対象とした進学説明会の開催や、学習塾主催

の説明会への参加、学習塾を対象とした説明会の開催、そして保護者を対象とした説明会も積極的に開催した。

一九九四（平成六）年度からは、それまで男子校であった中学校・高等学校（全日制普通科）が男女共学へと変更することになった。そのため一九九三年八月には、東京フォーラムで行われる「東京都私立学校展」に参加することになった。大規模な説明会のため、私も最寄りの駅から会場までの案内や、ブースの飾りつけ係として参加することになり、他校の教職員との交流を持つこともでき、大いに刺激を受けた。他にも、東京私立中学高等学校協会第八支部主催の「進学相談会」、かながわ民間教育協会主催の「進学相談会」、声の教育社主催の「受験何でも相談会」などがあり、各説明会会場では入試担当の教員が休む間もなく受験生と保護者の対応に追われ、嬉しい悲鳴を上げていた。時には、進学相談者があまりにも多く、準備していたパンフレットが不足してしまい、後日希望者に送付することもあった。

このような嬉しい現象が見られ、国士舘中学校・高等学校に対する新しい評価が芽生えつつあったのであるが、まだまだ「男子校＝こわい学校」という先入観や偏見は消えず、完全に払拭するのは困難で、その後も時間を要した。どのような国士舘中学校・高等学校にしたいか、セーターを編むようにひと針、ひと針丁寧に、そしてスピード感を持って歩みを進めたのである。

東京国際フォーラムでの私学進学説明会　2001 年 10 月

その苦労が実り、男女共学から六年以上経過しても、学園の中央図書館多目的ホールで開催された保護者対象の「進学説明会」では、受験希望者と保護者で客席はすべて埋まり立ち見が出るほど盛況であった。

制服は黒のジャバラから紺ブレへ

長年の懸案事項だった中学校・高等学校の専用の校舎の設立が決まり、学園関係者の学校を良くしたい、イメージを変えたいという思いは、次第に強く大きくなり、卒業生や一部の教員の反対もあったものの、国士舘中学校・高等学校（全日制普通科）は、予定通り一九九四（平成六）年度から男女共学制導入に大きくシフトされた。共学化に向けて、PR方法も大きく変わり、まず小田急線・東横線・京王線・井の頭線の駅校内の掲示板にポスターを掲示し、次に他校に少し遅れたが、初めて小田急線の車内に窓上広告を掲示した。通勤電車内で本校の広告を見て、そっとカメラに収めたのを思い出した。笑顔の女子生徒と男子生徒が表紙を飾ったカラーのパンフレットは、募集広告のテレホンカードと共に、とても好評だった。

生徒の間では、ジャバラの黒詰襟着用に抵抗を感じ、ブレザーの着用を希望する声が大きくなっていた。そこで、定時制課程商業科では一九八七（昭和六二）年度か

小田急線車内広告

ら、中学校は一九九〇年度から、高等学校全日制課程は一九九一年度の入学者から希望する生徒はブレザーの着用を認めることになった。そのため、当時はジャバラの黒詰襟とブレザーを着用する生徒が混在していたが、男女共学を機に全生徒がブレザーへと変更することになった。東急百貨店で販売する全日制課程の制服は、女子は胸にエンブレムが付いた紺のブレザーにリボンタイとチェックまたはタータンチェックのスカート。男子は、エンブレムのない紺のブレザーにネクタイとグレンチェックまたは紺色のズボン、夏はポロシャツまたはカラーシャツに変わった。

新校舎・願書受付

同じく一九九四（平成六）年度には、グラウンドの北側に中学校・高等学校専用の新校舎も完成した。私たち教職員は、それぞれの書類を手に抱え、何もかも新しくなった校舎に足を踏み入れた。新校舎の一階に整備された明るい事務室で、準備を進める手も軽く、八号館で散見していた「負の部分」も無くなるだろうと期待した。生まれ変わった国士舘中学校・高等学校が誕生したのである。同年五月一四日の新校舎披露のお祝いの会には、退職された先生方もお見えになり、新校舎内を談笑しながら見学された。

「国士舘中学校・高等学校は共学にします」。八支部会議に出席された中元先生の発表に会場にはどよめきがあがり、「対応できるのか」とか「オオカミの群れに羊を放して」などと驚異の目を向けられたという。また、中高の職員室内でも「うちに女の子が来るわけがない」と反対の意見が多数あったようだ。

男女共学化初年となる一九九四年度の入学志願者の願書受付作業は、一月二五日に八号館で行われた。これまでに経験したことがない志願者数で、願書を提出するための受験生の列は八号館から学園の正門を超え世田谷区役所付近まで長い列が続いた。この長蛇の列を見た近隣の住民や区役所職員の方々の驚きに加えて、何よりも学内の教職員の反響は大きかった。受付で受験番号をナンバリングする作業に追われ、腕が疲れても休むこともできない状態で、その願書受付処理の様子は『国士館大学新聞』（第三五五号、一九九四年二月二七日）だけでなく、

一般の新聞にも、全国で私立中学志願者数が減少するなか、共学化による志願者数増加で事務処理に追われる国士舘教職員の写真が掲載された（『毎日新聞』一九九四年二月一日）。

新校舎事務室への引越　1994 年 2 月

志願者数の推移をみると、男子校だった一九八三（昭和五八）年普通科の志願者数は五四二名、工業科志願者数は一一二名であったが、男女共学となった一九九四年度の普通科男子志願者数一七五八名、女子の志願者数は

願書提出の列　1994 年 1 月 25 日

六三一名、工業科志願者数は二三四名となり、入学定員を大幅に超える驚異的な数字となった。

入学後、女子生徒にどうして国士舘高等学校を選んだのか聞いてみた。「一期生になりたかったから」「制服が可愛いから」と、自信あふれる笑顔で答えてくれた。新しい校舎、新しい制服、受験者数の増加は、私たち教職員にも「何か」をもたらした。

楓の会誕生

楓の会の誕生は、一九八二（昭和五七）年頃、中学校の保護者が「保護者の会」を立ち上げたことに端を発している。「保護者の会」は、会費を集めて子どもたちの学習環境を整えること、教員の勉強のための留学資金を援助すること等が企画立案されたが、保護者全員の賛同を得ることは出来なかったようだ。そこでまず、八号館の中学校教室に隣接する勝国寺から入ってくるやぶ蚊対策として窓に網戸を取り付けてくださった。

男女共学になった一九九四（平成六）年度、中学校は「保護者の会」を「楓の会」と名称を変えて活動を始めた。遅れること数年、一九九九年に高等学校の保護者も「楓の会」の新たな趣旨に賛同し、共に活動を始めることとなった。

楓の会には、体育祭や秋楓祭の学校行事へのご協力、東京私立中学高等学校父母の会活動への参加など、多方面にわたりご協力いただき、その熱心な活動には頭の下がる思いだった。毎年秋楓祭で開催される楓の会主催のバザーは好評で、地元住民の方々との協調関係に一役買って頂いた。

中学校・高等学校の学園祭である秋楓祭は、男子校時代も共学校になった今でも、各クラスで調査研究成果の発表や展示をおこなっている。今でも私の筋トレグッズとして活躍している二キログラムのダンベルは、男子校時代の秋楓祭で工業科の生徒にお願いして作ってもらったものである。特に印象に残っているのは、理科の元村裕先生のクラスの作品、食パンで作ったモナリザである。食パン百枚位をバーナーで焦がし、焦げの濃淡で作ったモナリザの微笑は圧巻だった。また、八号館の中高事務室前に大学の楓門祭が設営したステージを拝借し、ブラスバンドが狭い部室を脱して力強くのびのびと演奏し、

あるクラスは出し物（落語）を披露した。また、私たち教職員のにわかコーラス隊は音楽室の教壇に立ち並び、合唱を披露した。派手さはなかったが、家庭的な秋楓祭として忘れがたい思い出である。

秋楓祭の教職員によるコーラス

時代と共に変わる学園

一九九三（平成五）年度末、定時制課程商業科の募集を停止し、一九九四年度から新たに定時制課程普通科を設置した。また一九九四年度は、男女共学制が導入され、工業科は新たに情報理数科を新設し、それまでの機械科は同年度末から募集停止となった。しかし一九九五年度、情報理数科の入学者はわずか二三名。その後も入学者数は増加せず、二〇〇五年三月に最後の卒業生を送り出すに至った。二〇〇〇年度には、新たに通信制課程普通科を設置したが、二〇一九（令和元）年に通信制課程も廃止が認可され、その幕を閉じた。

一九九四年度から男女共学をスタートさせた国士舘中学校については、その後、年度によっては入学定員八〇名を割ることもあったが、各学年二クラスを維持しながら、きめ細やかな指導を目指している。中学校では、昭和四〇年代から続く校内言道大会は現在でも継続されているようであるが、同時にはじまった高等学校の言道大会は、その歴史の火が消えてしまい残念に思う。

この間、学園は、一九九八年四月に元早稲田大学総長

新校舎前

西原春夫先生を理事長に迎え、新生へスタートを切った。その後、理事長には日通学園長である佐伯弘治先生、体育学部教授で学長も務められた大澤英雄先生が就任し、現在に至っている。中学校・高等学校をはじめ学園では、時代の流れと共に、その時々に応じた変革が進められた。

二五年間の会計係

一九九二（平成四）年度から、私は中学校・高等学校事務室で会計係を担当することになった。事務分掌に記載されている会計係の仕事はもとより、記載されていないものまで思いつくまま書き出してみると、その仕事量の多さに驚きを禁じ得ない。まるで学校法人の全ての部署が、事務室のあの小さな部屋に集約されていると言っても過言ではない。

一九九四年当時は、中学校・高等学校の全日制普通科・情報理数科（工業科）・定時制商業科、それらすべての課程の学納金を会計係で処理しなければならず、複雑で集中しなければならない仕事は、時間外に処理した。

最も神経を使ったのは、東京都生活文化局による外部監査であった。監査の際には、補助金関係、都内在住の生徒数、教員の出勤簿等々の資料を洩れなく準備した。そして監査時に指摘を受けたケアレスミスは、数回都庁まで出向いて指導を受けなければならなかった。

学内会計士による監査は、都生活文化局の監査と同様に、学校徴収金が適正に処理をされているかの監査であったが、何冊もの重い台帳を学園本部に運び、会計士の質問に明確に答えなければならなかった。また年度末には、学園本部の経理課に提出する決算報告書の作成があり、誤差があった場合にはその修正に五月の連休まで時間を要することもあった。当初はパソコンが苦手なため大変苦労し、夢の中でも泣いてしまうほどであった。

退職を控えた二〇一〇年には、公立高等学校の授業料無償化に伴って、本学でも高等学校生徒などに対する授業料の一部、または全額を支援する就学支援金制度ができた。九〇〇名弱の生徒に対する世帯年収に応じた支援手続きは、想像を超える仕事量であった。

四月は、新入生も在校生も共に、種々の手続きが集中する慌ただしい時期である。入学を許可された生徒に配布する書類は種類も多く、預金口座振替依頼書・入学支度金・兄弟姉妹入学金変更などの書類作成とそのチェックは、何度も丁寧な見直し作業が必要だった。また年度初めは、各学年の徴収金の設定と保護者への周知を行い、年度末になると、各学年の決算報告書作成と共に、個々の未使用預り金の返還金通知文書の作成と発送、そして指定口座への振り込み手続きがあった。授業料未納の家庭には、慎重かつ丁寧に文書と電話による督促が不可欠であった。毎日の業務として、業者の請求に対する支払伝票の起票と、学年ごとの現金出納簿処理を坦々とこなした。

その他の業務

事務室では、学習指導要録や永久保存の卒業者名簿の保管なども業務の一つであった。また卒業者名簿の台帳は、担任教員による手書きから印刷になった。業務時間の短縮にはなったが、各担任教員の「味」のある手書きの台帳が無くなったのは寂しかった。また、入学願書の受付、転・退学時の必要書類の作成、転・編入学の願書、要項の作成と受付、各種証明書（運動技能優秀誓約書・入寮申込書・入寮許可書・在学証明書・在寮証明書・卒業証明書・単位取得証明書・学割証・通学定期購入等）の発行も、重要な業務であった。そのほか、消耗品の補充と発注、郵便物・荷物の仕分けと配付、窓口対応と接

待、蛍光灯の取り換え、複写機・印刷機等の修理・手配、制服の付属品（ネクタイ・リボン・ベルト）の販売、各クラスの冷暖房の調整、雪かき、観葉植物の水やり、入学・卒業式の生花の手配、生徒のロッカーキーのトラブル解消、教室のドアや靴箱の修理、校長はじめ管理職へのお茶入れ、校長室・特別室の清掃といった庶務・雑務に至るまで、すべてこなさなくてはいけなかった。

私の一年分のストレス解消は、年度末の事務室隣の倉庫の大掃除であった。倉庫内の物を全部出して棚の整理をし、ローリングストック法ならぬ書類を分別して保管期間過ぎたものは処分し、倉庫内も気持ちもすっきりして新年度を迎えたものである。

大変苦慮したのは、旧制時代の卒業生の種々の証明書発行願であった。国士舘は、一九四五（昭和二〇）年五月の戦災で、学籍に関する書類を焼失したため、記録が見出せなかったのだ。このような場合は、国士舘資料室の今坂節也先生、熊本好宏先生の丁寧な調査とご教示によって、申請者に対して滞ることなく返事を出すことができた。

どのような仕事も一人の力には限りがある。中学校・高等学校の業務は、教員と職員の協力が不可欠で、「車の両輪」そのものを感じる日々であった。

クラブ活動

国士舘中学校・高等学校は、周知のとおりスポーツが盛んである。強化クラブの戦績を記せば、柔道部は金鷲旗大会で優勝（一九九七年初優勝以後、二〇〇〇・二〇〇二・二〇〇六年など）、剣道部はインターハイで優勝（一九六五年初優勝以後、一九九三・一九九六・一九九八・一九九九年など）・玉竜旗大会では一九九八（平成一〇）年に準優勝を果たしている。また一九九一年の春には、硬式野球部が初の春センバツ高校野球大会に出場を果たした。その後も出場回数を伸ばして、春の国士舘旋風を甲子園で巻き起こした。長年の夢であった甲子園球場で舘歌を歌うという願いを叶えることができた。サッカー部は、夏のインターハイに二度出場、冬の全国高等学校選手権大会には二〇〇一年に初出場して計四度の出場を果たしている。

男女共学化以後、本校の女子生徒として学んだ卒業生

が、オリンピックのメダリストとなった。二〇〇四年のアテネ五輪で、シンクロナイズドスイミングの川嶋奈緒子選手（二〇〇〇年卒）が銀メダルを獲得したのである。

東日本大震災

二〇一一（平成二三）年三月一一日、東日本大震災が起きた。風化させてはならない、忘れてはならない、未曽有の出来事ではあったが、本校では幸いなことに一教室の壁掛時計が落下して、時計のガラスが破損したことと、美術室の照明器具のカバーが外れて宙吊りになったことくらいで、大きな被害はなかった。

当日、世田谷校舎には、部活動中の生徒が二〇〇名、多摩校舎では硬式野球部員五〇名が練習中であったが、全員の無事が確認され安堵した。保護者の迎えは夜一〇時過ぎまでかかり、迎えが不可能な生徒六四名と教職員は、各教室や寮で一夜を過ごした。松陰寮の食堂にお願いして、夕飯は一人二個のおにぎりを、翌日の朝食は暖かいご飯と味噌汁を頂くことができた。翌日の昼過ぎには、徐々に交通機関が動き出し、各自帰路についた。

尽きない思い出

在職三五年間の思い出は尽きない。合格発表時の悲喜こもごもの光景。春風に心の翼を広げて入学式に臨む新入生と保護者の笑顔。謝恩会では、担任に感謝の気持ちを伝える彼らの成長した姿に涙が止まらなかった。また、卒業式に保護者から頂戴する感謝のお言葉やお手紙、その笑顔は、日々の仕事の励ましとした。

生活指導部では、東京学生・生徒補導協会主催の夜の街頭補導にも参加した。夜の街での子どもたちの動向を見ることができた。中学生とは多摩テックで飯盒炊飯を共同作業し、カレーライスを作って皆で食べ、また童心に戻ってゴーカートに乗り、射的にも興じた。千葉県岩井海岸では臨海学校を見学し、また芸術鑑賞ではライオンキングや歌舞伎を鑑賞し、さらに校内の寒稽古も見学した。秋楓祭・体育祭では準備作業を手伝い、また東京都立青鳥特別支援学校の夏まつりの参加では、子どもたちの無限の可能性を感じた。それからサッカー部のマネジャーからプレゼントされたチョコレートは、食べるのが勿体なくて、一年間冷蔵庫に保管していた。大学合格

を報告に来た生徒とは、涙の「ハグ」をした。大切な思い出が沢山あり、ここに書ききれない。

一九九八（平成一〇）年、元定時制教頭を務めた深沢亨先生（国語）が「文部省教育功労賞」を受賞され、二〇〇七年一〇月には、元中学校・高等学校校長を務めた中元令士先生が、東京都功労者表彰において「教育功労賞」を、受賞されたことも思い出深い。

私は、他部署への異動を一度も経験することなく、二〇一四年三月、保護者をはじめお世話になった多くの方々に深く感謝しつつ、三五年間勤めた職場を退職した。中学校・高等学校職員の職務は、微力ながらなし得る限り行ってきたつもりだが、関わった方々への感謝は尽きない。

最後に

「教育の原点は私学にある」

国士舘らしさとは何か。国士舘の建学の精神・教育理念・教育指針を心に留め置き、国士舘中学校・高等学校を、これからもこの世田谷の地に揺るぎない太い根を張り、近隣の方々に愛される学校として発展することを切望したい。

一九七三（昭和四八）年一月二六日に亡くなられた創立者柴田徳次郎先生に聞いてみたい。男子校から男女共学校に変わった国士舘中学校・高等学校を、どう思われているだろうかと。

本稿執筆にご協力を頂いた教職員（敬称略）

大西　貫也・加藤　肇・黒田　修身・中元　令士
長谷川　貞巳・福田　三郎・深澤　亨
松山　國雄・宮地　幸雄・山本　幸男
高田　作郎・山松　良枝
桜井　友美・笹岡　文雄（図書館）
中高校事務室・大棚　仁美（中高図書室）

令和３年事業報告

１　国士舘百年史編纂委員会並びに専門委員会

国士舘は、平成15年６月、創立１００周年に向けて年史編纂事業を企図して国士舘百年史編纂委員会を発足、同委員会の下に百年史編纂のための調査研究・執筆を担当する専門家組織として、平成21年６月に専門委員会が発足した。

令和３年３月の『国士舘百年史　通史編』刊行により編纂事業を完遂し、同年５月末日をもってその任を終えた。令和３年の編纂委員会並びに専門委員会の委員会名簿と各委員会の開催日程及び審議事項は次の通りである。

１　国士舘百年史編纂委員会

国士舘百年史編纂委員会名簿

（任期：令和元年６月～令和３年５月、肩書は解散時のもの）

顧　問　阿部　昭　元理事・元文学部教授・元委員長（平成21年６月～平成25年５月）

委員長　飯田　昭夫　理事（年史編纂担当）・資料室室長・法学部教授（すべて令和３年３月まで）

副委員長　佐々　博雄　元文学部教授・専門委員会委員長

委　員　入澤　充　副学長・学長室長・法学部

教授

委員　古坂　正人　政経学部准教授
委員　朝倉　利夫　体育学部教授
委員　三好由記博　理工学部教授
委員　髙野　敏春　法学部教授
委員　河先　俊子　21世紀アジア学部教授
委員　池元　有一　経営学部教授
委員　眞保　昌弘　文学部教授
委員　馬場　和子　高等学校定時制課程教頭
委員　福本　正幸　理事・法人事務局長事務取扱
委員　山田　愼吾　理事
委員　中島　徹　特命参与・前委員長（平成28年4月～平成30年3月）
庶務　国士舘史資料室事務長　田中　弘
国士舘史資料室　熊本　好宏

令和3年の編纂委員会開催と審議事項

第25回　令和3年3月18日（木）～24日（水）
新型コロナウイルス〈COVID-19〉感染症対応につき書面審議
審議事項　『国士舘百年史　通史編』の編纂について
『国士舘百年史　通史編』の刊行について
第26回　令和3年5月29日（土）13時00分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘3階　研修室
審議事項　『国士舘百年史　通史編』編纂の経過について
国士舘百年史編纂事業後の方針について

2　国士舘百年史編纂委員会　専門委員会

国士舘百年史編纂委員会　専門委員会名簿

（任期：令和元年6月～令和3年5月、肩書は解散時のもの）

専門委員長　佐々　博雄　元文学部教授
副専門委員長　阿部　昭　元理事・元文学部教授・前専門委員会顧問

（平成29年６月～令和元年５月）・専門委員長（平成21年６月～平成25年５月）

委　員　湯川　次義　早稲田大学教育学部教授
委　員　岩間　浩　元文学部教授
委　員　前城　直子　元21世紀アジア学部教授
委　員　原田　信男　元21世紀アジア学部教授
委　員　安西　博見　元理事
委　員　枝村　亮一　元文学部教授
委　員　漆畑真紀子　立川市歴史民俗資料館学芸員

庶　務　国士舘史資料室事務長　田中　弘
国士舘史資料室　熊本　好宏
国士舘史資料室　菊池　義輝
（令和３年３月まで）
国士舘史資料室　小林　訓子

令和３年の専門委員会開催と審議事項

第95回　令和３年３月18日（木）13時00分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘３階　研修室
審議事項　『国士舘百年史』通史編編集に関わる疑義について
『国士舘百年史』目次の表記・内容の統一について
今後の『国士舘百年史』通史編の編集作業について
『国士舘百年史』通史編の仕様等について

第96回　令和３年５月29日（土）10時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘３階　研修室
審議事項　国士舘百年史編纂事業後の方針について

2　国士舘史資料室の活動

新型コロナウィルス（COVID-19）への対応

令和2年から続くCOVID-19の世界的な大流行により、本学及び当室においては、令和3年も例年実施してきた活動が制限されることになった。断続的に緊急事態宣言が出される状況のなか、COVID-19対策に留意しながら、本年度より対面授業や諸行事が原則実施されることになった。しかし、引き続き学内への学外者の入構は制限されている。

この状況のなかで、令和3年の当室の活動は、学外者の入稿制限措置に伴って、特に教育普及の活動に大きな影響を受けることになった。6月中旬からオープンキャンパスでの対応や学生アルバイト勤務なども再開したが、令和2年3月上旬から引き続いて、展示室・閲覧室は臨時閉室とした。

このほか2年ぶりに開催された学園祭（楓門祭・秋楓祭）は学内関係者限定での実施となったため、あわせて国士舘大講堂で実施した創立記念展示は学内関係者のみとなった。このため東京文化財ウィークによる国士舘大講堂の一般公開は、本年も不参加とした。また12月の実施となった世田谷キャンパス父母懇談会は、従前の大講堂の公開と対応を行わないこととなるなど、本年もその影響は続いた。

1　調査・収集

(1)　主たる資料調査

令和3年1月から12月までに実施した資料調査並びに収集の主な活動は以下の通りである。

学内調査

(1)武道・徳育研究所（小森富士夫准教授研究室）調

査（於世田谷キャンパス10号館５階）

日　時：令和３年３月12日

調査者：畠山典子

(2)文学部教育学科（初等教育）志澤彰准教授研究室（於世田谷キャンパス34号館７階）

日　時：令和３年３月12日

調査者：畠山典子

(3)教務課保管資料調査

日　時：令和３年11月17日、以降複数回実施

調査者：熊本好宏・小林訓子

(4)経理課保管資料調査

日　時：令和３年12月１日、以降複数回実施

調査者：熊本好宏

学外調査

(1)上塚司関連資料調査

日　時：令和３年１月12日、３月18日、３月23日、４月27日、５月10日、10月20日、10月25日、11月５日、11月19日、11月25日、12月20日

調査者：熊本好宏

(2)「創立１００周年記念想い出の昭和女子大学・三軒茶屋　写真展」視察調査（於昭和女子大学光葉博物館）

日　時：令和３年６月18日

調査者：熊本好宏・畠山典子

(3)世田谷区政策経営部区史編纂室調査

日　時：令和３年６月30日

調査者：熊本好宏

(4)福澤諭吉記念慶應義塾史展示館視察調査

日　時：令和３年７月１日

調査者：熊本好宏

(5)拓殖大学資料室調査

日　時：令和３年７月28日

調査者：熊本好宏

(2)オーラル調査

(1)アンケート調査

本年は関係者へのアンケート調査を実施しなかった。

(2) オーラル・ヒストリー調査

次の2名の関係者にオーラル・ヒストリー調査を実施した。

・志澤彰氏（文学部教育学科准教授、令和3年3月定年退職）

・志賀恵氏（元国士舘短期大学体育科助教東政俊氏孫）

(3) 主な寄贈資料

・個人資料寄贈

寄贈者：大野偉光氏（昭和47年3月体育学部卒）

・高等学校卒業アルバム等寄贈

寄贈者：大貝久吉氏（高等学校定時制課程普通科教諭、令和3年度末退職）

・高等学校学生手帳等寄贈

寄贈者：柏崎吉行氏（昭和57年3月政経二部卒業）

・学園祭パンフレット等寄贈

寄贈者：小谷由美子氏（昭和55年短大国文科卒業）

・国士舘関係新聞スクラップ等寄贈

寄贈者：寺島正芳氏（映画史研究家）

・国士舘専門学校教科書等寄贈

寄贈者：志賀恵氏（短期大学助教東政俊孫）

2　整理・保存

(1) 資料目録作成状況

本年（令和3年12月31日現在）の国士舘史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は別表の通りである。

(2) 資料電子化・保存措置

本年は、主に以下の資料について電子化及び修復・保存処置を専門業者に委託した。

・財務部資料経理元帳（平成初期）電子化

・教務部資料短期大学国文科・経済科二部成績原簿電子化

・上塚司関連資料電子化

・松本吉英氏寄贈資料電子化

・昭和53～56年度大学少林寺拳法部活動等の35㎜ネガフィルム電子化

・卒業アルバム（戦後～昭和末期）電子化及び写真切出

収蔵資料及び目録化の進捗状況

名称	内容	令和元（平成31）年度目録化済	令和2年度目録化済	令和3年度目録化済
法人記録史料	法人（教学を含む）組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	17,071	17,469	17,977
発行物	学内で刊行される出版物	9,112	9,136	9,892
写真・その他の映像・音声資料	国士舘に関わる写真その他の映像・音声資料	12,471	12,493	12,614
物品資料	国士舘に関わる物品資料	1,095	1,098	1,109
調査収集資料	学内外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	5,878	5,921	6,302
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	2,019	2,079	2,139
合計		47,646	48,196	50,033

（令和３年 12 月 31 日現在）

3　利用・公開

(1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

国士舘史資料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成23年4月に閲覧室を整備し、同時に資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムのＷＥＢ公開を開始している。収蔵資料検索システムを利用後に、資料閲覧のために来室する利用者も増加傾向にあったが、ＣＯＶＩＤ-19対策の観点から、昨年に引き続き令和３年も資料の閲覧サービスを停止している。

平成28年10月３日に学内教職員向けに公開した「国士舘アーカイブズ」は、令和３年12月現在、収蔵資料検索システムには２５９７２件、基礎年表検索システムには３５０８件、基礎データ集（略年表など）の内容であり、学内限定で利用できる。昨年からのＣＯＶＩＤ-19の影響のなかで、大学の遠隔授業への支援をはじめ、学内教職員からのレファレンスへの対応に有効に活用されている。

(2) ホームページ（令和3年更新）

［お知らせ］

・梅ヶ丘校舎で「国士舘の歴史」展を開催（令和3年2月4日）
・『国士舘史研究年報 第12号』を刊行しました（4月1日）
・『国士舘百年史　通史編』を刊行しました（6月9日）
・梅ヶ丘校舎で「学園祭の歴史」展を開催（9月7日）
・国士舘大講堂の一般公開（東京文化財ウィーク）の中止について（10月13日）
・創立記念「柴田徳次郎かく語りき」展を開催（10月13日）
・刊行物に『国士舘百年史』（目次）などを公開しました（11月5日）
・梅ヶ丘校舎で「箱根駅伝―国士舘出場の歴史―」展を開催（12月1日）
・学園史講演会（第1回）を開催しました（12月7日）
・創立記念「柴田徳次郎かく語りき」展を開催しました（12月13日）

［刊行物］

・『国士舘史研究年報　楓原』第12号の全頁（電子ブック・PDF）掲載（4月）
・『生誕130周年記念　創立者柴田徳次郎　かく語りき』（PDF）掲載（11月）
・『国士舘百年史　通史編』目次・年表（PDF）掲載（11月）
・『国士舘百年史　史料編（上・下）』目次・解題（PDF）掲載（11月）

アドレス
http://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html

(3) 教育普及活動

(1) 常設展示

国士舘史資料室では、柴田会舘4階に展示室を設け、国士舘の歩みを示す関係資料を一般公開している。国士舘の創立者柴田徳次郎にゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する貴重な資料などを展示している。

なお、令和2年3月3日より引き続き、COVI

D-19対応のため臨時閉室としたが、講義等の利用には適宜対応した。（令和３年12月31日現在閉室）

開室日時　月曜～土曜10：00～16：00

（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

令和３年１月～12月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数　１３０名

学生・生徒　１２３名

教職員　７名

・学外者数　２名

卒業生　１名

一般　１名

・総観覧者数　１３２名

（２）梅ヶ丘展示ルーム企画展（出張展示）

世田谷キャンパス34号館（梅ヶ丘校舎）一階の展示ルームにおいて、次の企画展を開催した。

・令和３年２月～５月「国士舘の歴史」展

・令和３年６月～９月「『国士舘百年史』刊行記念展」

・令和３年９月～11月「学園祭の歴史」展

・令和３年12月～２月「箱根駅伝―国士舘出場の歴史―」展

「『国士舘百年史』刊行記念展」

（３）イベント企画展（出張展示）

令和３年は、他学高等学校教諭を対象とした大学入試相談会が学内で実施され、その対応を行った。また昨年中止されたオープンキャンパスは、完全予約制での開催となった。なお父母懇談会は開催されたが、ＣＯＶＩＤ-19感染症対策の観点から大講堂の公開と対応は見送られた。

入試相談会とオープンキャンパスでは、世田谷キャンパス大講堂において、写真パネルによる企画展示「国士舘の歴史」を開催すると共に、「国士舘

100年の軌跡」（DVD）等を上映した。それぞれ実施日及び入場者数は、次の通りである。

・5月14日（金）入試相談会（高校教員向け）66名
・6月13日（日）オープンキャンパス　393名
・7月4日（日）オープンキャンパス　100名
・7月18日（日）オープンキャンパス　171名
・8月28日（日）～29日（日）オープンキャンパス　837名
・9月26日（日）オープンキャンパス　200名

（4）創立記念展「柴田徳次郎かく語りき」（出張展示）

創立記念企画展示「柴田徳次郎かく語りき」展を、10月25日（月）～11月4日（木）に国士舘大講堂で開催した。これは、国士舘創立104周年と翌令和4年1月26日の柴田徳次郎没50年を記念して、訓話など創立者の言葉を紹介する企画展とした。

なお、展示期間内に実施された令和3年の楓門祭（大学学園祭）は、COVID-19対策の観点から学内関係者限定での開催となった。そのため、創立記念展も学内限定での公開とし、例年学園祭にあわせ

「柴田徳次郎かく語りき」展
観覧風景

「柴田徳次郎かく語りき」展
ポスター

て実施していた「東京文化財ウィーク」への参加は見送った。

入場者は、全期間で３８０名、うち楓門祭期間（11月2日・3日）は１６９名であった。

（5）レファレンス（含資料閲覧）

令和3年1～12月のレファレンスは、学内・学外合わせて94件であった。なおＣＯＶＩＤ-19感染症対策に伴い、令和2年3月3日から引き続き資料の閲覧は停止し、レファレンスのみ対応した。

（6）講義等支援

平成21年4月の国士舘史資料室発足後、資料室を利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学各学部で開講する初年次教育関連ゼミの支援依頼や、博物館学関連の講義支援については、毎年恒例となっている。

昨年度に引き続き、政経学部開講「フレッシュマン・ゼミナール」、経営学部開講「フレッシュマンゼミナール」、文学部教育学科開講「教育学の基礎Ａ」に設けられた自校史教育のコマについて講義支援を実施した。しかし、4月26日から3度目の緊急事態宣言が東京都に発出されたことに伴い5月11日まで休講の措置が取られたため、政経学部の全コマと文学部の一部クラスの講義については、昨年と同様に遠隔授業用に作成した映像教材等を提供した。また講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施している。主な講義等の支援と担当者は、次の通りである。

・新採用教職員大講堂見学対応（田中弘）
4月3日教員11名、4月7日職員11名

・体育学部体育学科新入生自校史教育支援（於多摩キャンパス）（小林訓子・畠山典子）
4月6日1年生２００名、4月7日2年生２００名（昨年度未実施分）

・政経学部政治行政学科「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生）（田中弘）
4月19日　小池亜子ゼミ27名、4月21日　横須賀柳子ゼミ28名

・4月22日　文学部教育学科初等教育コース河野寛准教授「教育学の基礎Ａ」大講堂見学対応（1限1年生56名）（畠山典子）

・4月22日　文学部教育学科教育学コース郡司菜津美講師・本間貴子講師「教育学研究」展示室見学対応（5限2年生10名）（熊本好宏）
・5月26日　国士舘中学校「校外学習」自校史教育支援（於大講堂、3年生33名）（熊本好宏）
・経営学部「フレッシュマンゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学、1年生）
6月2日豊田寿行ゼミ42名・山下修平ゼミ43名（熊本好宏・田中弘・畠山典子）、6月3日顔菊馨ゼミ43名（畠山典子・熊本好宏）、6月4日三谷華代ゼミ42名・冨田新ゼミ42名（畠山典子・熊本好宏・田中弘）、6月7日島崎杉雄ゼミ42名・粟野直之ゼミ42名（小林訓子・畠山典子・熊本好宏）
・6月3日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」展示室見学対応（2限文学部30名）
・6月10日　文学部教育学科初等教育コース河野寛准教授・青木聡子講師「教育学の基礎A」講義支援（1限1年生136名）（田中弘）
・文学部教育学科教育学コース「教育学の基礎A」展示室見学対応（1限1年生）
6月17日27名、6月24日28名、7月8日28名
・7月1日　文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司菜津美講師・本間貴子講師「教育学の基礎A」講義支援（1限1年生82名）（熊本好宏）、
・11月18日・25日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館情報メディア論」講義支援（於34号館展示ルーム・大講堂、3限3年生各日30名）（熊本好宏・畠山典子）

(7)発行物

・令和3年1月26日　リーフレット「国士舘　先覚者墓所」配布
・令和3年3月12日　『国士舘史研究年報　楓原』第12号発行
・令和3年3月31日　『国士舘百年史　通史編』発行
・令和3年11月4日　小冊子『国士舘創立者柴田徳次郎生誕130年記念　かく語りき』発行

(8)中学生の職場体験学習の受け入れ

本年は中学校から職場体験学習についての依頼がなかった。

4　室の構成

(1)　職員（令和3年度）

室　長　飯田　昭夫（理事・法学部教授、令和3年3月末日退任）
長谷川　均（理事・副学長・文学部教授　令和3年8月1日着任）
事務長　田中　弘
職　員　熊本　好宏
準職員　畠山　典子　小林　訓子
菊池　義輝（令和3年3月退職）
アルバイト学生
井上　幹也　安西　ルナ　梅澤　友花
新谷　優輝　角田　優衣　丸山　藍花
横尾　夏菜　赤羽　祐汰　大澤　初音
馬場英梨香

(2)　施設の概要

所在地　〒154-0023
東京都世田谷区若林4-31-10
名　称　柴田会館
構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上4階
資料室施設面積
2階：舘史事務室15・3㎡、舘史研究室38・4㎡、第1史料収蔵庫63・8㎡、第2史料収蔵庫21・5㎡（平成23年3月設置）、第3史料収蔵庫16・2㎡（平成28年8月設置）、第4史料収蔵庫21・1㎡（平成28年8月設置）
4階：室長室13・7㎡、閲覧室13・7㎡、展示室119㎡
34号館（梅ヶ丘校舎B棟1階）
展示コーナー：13・1㎡

5　活動日誌

（令和3年1月～12月）

【1月】
8日～2月7日　緊急事態宣言（2回目）発出（延長2回、～3月21日）
26日　墓誌改修に伴い、創立者祥月命日法要において

先覚者墓所案内資料を配布

【2月】

4日～5月31日　企画展「国士舘の歴史」展（於34号館B棟1階展示コーナー）

【3月】

12日　「国士舘史研究年報　楓原」第12号発行

武道・徳育研究所（小森富士夫准教授研究室）調査

18～24日　第95回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催（書面審議）

26日　文学部教育学科初等教育コース准教授志澤彰研究室調査

31日　室長飯田昭夫退任、室員菊池義輝退職（業務委託）

『国士舘百年史　通史編』発行

【4月】

1日　国士舘百年史編纂委員会委員長飯田昭夫就任

3日　新採用教員大講堂見学対応（11名）（田中弘）

6日　体育学部体育学科新入生オリエンテーション自校史教育支援（於多摩キャンパス、1年生200名）（小林訓子・畠山典子）

7日　体育学部体育学科新入生オリエンテーション自校史教育支援（於多摩キャンパス、2年生200名）（小林訓子・畠山典子）

新採用職員大講堂等見学対応（11名）（田中弘）

10～11日　舘長柴田徳文合同葬支援（田中弘）

19日　政経学部小池亜子准教授「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（5限1年生27名）（田中弘）

21日　政経学部横須賀柳子教授「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（2限1年生28名）（田中弘）

22日　文学部教育学科初等教育コース河野寛准教授「教育学の基礎A」大講堂見学対応（1限1年生56名）（畠山典子）

文学部教育学科教育学コース郡司菜津美講師ほか「教育学研究」展示室見学（5限2年生10名）（熊本好宏）

26日～5月11日　緊急事態宣言発出（3度目）に伴い大学休講措置

【5月】

14日　入試相談会にて「国士舘の歴史」展開催（於世

田谷キャンパス大講堂、入場者66名）

26日　中学校「校外学習」自校史教育支援（於大講堂、3年生33名）（熊本好宏）

29日　第96回百年史編纂委員会専門委員会・第26回百年史編纂委員会開催

【6月】

2日　経営学部豊田寿行准教授「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生42名）（熊本好宏・畠山典子）

経営学部山下修平准教授「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生43名）（田中弘・畠山典子）

3日　経営学部顔菊馨助教「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生43名）（熊本好宏・畠山典子）

3日～7月9日　企画展「『国士舘百年史』刊行記念展」展開催（於3434号館B棟1階展示コーナー）

文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」展示室見学対応（於資料展示室、2限2年生30名）

4日　経営学部三谷華代助教「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生42名）（田中弘・畠山典子）

経営学部冨田新准教授「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生42名）（田中弘・熊本好宏）

7日　経営学部島崎杉雄講師「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生42名）（熊本好宏・小林訓子）

経営学部粟野直之講師「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生42名）（熊本好宏・畠山典子）

10日　文学部教育学科初等教育コース河野寛准教授ほか「教育学の基礎A」講義支援・大講堂見学対応（1限1年生136名）（田中弘・畠山典子）

11日　「国士舘会報」第3-84号「百年史編纂委員会要綱の廃止について」通知

13日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者393名）

14日　「国士舘会報」第3-88号「国士舘百年史編纂委

員会顧問等の退任について」通知
17日　文学部教育学科教育学コース「教育学の基礎A」展示室見学（1年生27名）
学生アルバイト勤務再開（令和2年3月以降COVID-19対応のため停止）
18日　「創立100周年記念想い出の昭和女子大学・三軒茶屋　写真展」見学調査（於昭和女子大学光葉博物館）（熊本好宏・畠山典子）
23日　世田谷区役所改修工事に伴う周辺建物事前調査（於柴田会館）
24日　文学部教育学科教育学コース「教育学の基礎A」展示室見学（1年生28名）
25日　文学部日本史講演会講師中村尚史氏（東京大学社会科学研究所教授）大講堂見学対応（熊本好宏）
30日　世田谷区政策経営部区史編纂室調査（熊本好宏）

【7月】
1日　文学部教育学科教育学コース江川陽介教授ほか「教育学の基礎A」講義支援（1限1年生82名）（熊本好宏）
福澤諭吉記念慶應義塾史展示館視察調査（熊本好宏）
4日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者100名）
8日　文学部教育学科教育学コース「教育学の基礎A」展示室見学（1年生28名）
9日　企画展「『国士舘百年史』刊行記念展」展開催（於34号館B棟1階展示コーナー）会期延長（9月3日まで）
18日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者171名）
24日　新型コロナワクチン職域接種支援（田中弘）
26日　楓門祭実行委員会幹事会（熊本好宏）
28日　拓殖大学資料室調査（熊本好宏）

【8月】
1日　室長長谷川均着任
21日　新型コロナワクチン職域接種支援（熊本好宏）
24日　新型コロナワクチン職域接種支援（田中弘）

28日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者６２３名）

29日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者２１４名）

【9月】

7日～11月26日　企画展「学園祭の歴史」展開催（於34号館Ｂ棟1階展示コーナー）

14日　大講堂内３Ｄ撮影対応（学生部・エムディーエス）

23日　卒業アルバム資料の1号館Ｂ2倉庫移動完了

26日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者２００名）

【10月】

25日～11月4日　創立記念展「柴田徳次郎かく語りき」開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者３８０名）

30日　創立者銅像解説サイン修繕

【11月】

4日　小冊子『国士舘創立者柴田徳次郎生誕１３０年記念　かく語りき』発行

12日　学園史講演会（第1回）「『国士舘百年史』に見えるもの―青春群像・個性・理念」（講師　名誉教授・元百年史編纂委員会副委員長　佐々博雄氏）（於ＭＣＨ5階第1会議室、参加者14名）

16日　阿部昭元国士舘史資料室室長逝去

17日　防火講習（於柴田会館）

教務課保管資料（10号館）調査・整理作業（以降複数回実施）

18日、25日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館情報メディア論」講義支援（於34号館展示ルーム・大講堂、3年生30名）（熊本好宏・畠山典子）

25日　「国士舘会報」第3-２０４号「学園史講演会（第1回）録画映像の配信について」通知

【12月】

1日　文部科学省社会教育調査（博物館調査票）回答

経理課保管資料（於1号館Ｂ2）調査・整理作業（以降複数回実施）

1日～令和4年2月18日　企画展「箱根駅伝―国士舘出場の歴史―」開催（於34号館B棟1階展示コーナー）

追悼　阿部昭先生

令和3年11月16日、国士舘史資料室初代室長で本学名誉教授の阿部昭先生が逝去されました。本誌『楓原』の名付け親でもある先生の生前のご功績を偲び、次に主な略歴・業績等を紹介し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

【略歴】

昭和18年　栃木県に生まれる
昭和41年　東京教育大学文学部史学科日本史学専攻卒業
昭和62年　国士舘大学文学部助教授
平成4年　国士舘大学文学部教授
平成12年　国士舘大学文学部長
平成16年　学校法人国士舘理事（～平成25年3月）
平成21年　国士舘史資料室室長（～平成24年3月）、国士舘百年史編纂委員会委員長・専門委員会委員長（～平成25年5月）
平成25年　国士舘大学名誉教授、国士舘百年史編纂委員会顧問・副専門委員長（～令和3年5月）

【著書】

『下野の老農小貫万右衛門』（下野新聞社、昭和57年）
『近世村落の構造と農家経営』（文献出版、昭和63年）
『江戸のアウトロー』（講談社、平成11年）
ほか論文・共著多数

関係規程

国士舘百年史編纂委員会要綱

（趣旨）

第1条　学校法人国士舘（以下「本法人」という。）に、国士舘創設以来の歴史を記録する国士舘百年史（以下「百年史」という。）を編纂するため、国士舘百年史編纂委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（委員会の構成）

第2条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

(1)　理事のうちから、理事長の指名する者　若干人

(2)　国士舘大学専任教員のうちから、学長の指名する者　若干人

(3)　中学校・高等学校教員から、校長の指名する者　若干人

(4)　法人事務局長、国士舘史資料室長

(5)　学識経験者で、理事長が指名する者　若干人

2　委員は、理事長が委嘱する。

3　第1項第1号、第2号、第3号及び第5号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。第4号の委員は、職務在任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第3条　委員会に、委員長及び副委員長を置く。

2　委員長及び副委員長は、理事長が指名する。

3　委員長は、委員会を統括する。

4　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

（顧問）

第4条　委員会に顧問を置くことができる。

2　顧問は、理事長が委嘱する。

3　顧問は、必要に応じ委員会に出席するものとする。

4　顧問の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（委員会の任務）

第5条　委員会は、次の各号の事項を行う。

(1)　百年史の編纂方針に関すること

(2)　百年史の刊行に関すること

(3)　その他、百年史編纂に関すること

（委員会の運営）

第6条　委員長は、委員会を招集し、議長となる。

2　委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3　委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決する。可否同数の場合は、委員長が決する。

4　委員会は、必要に応じ、委員以外の者を出席させることができる。

（専門委員会の設置）

第7条　委員会に、専門委員会を置く。

（専門委員）

第8条　専門委員は、委員長の推薦により理事長が委嘱する。

2　専門委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（専門委員長及び副専門委員長）

第9条　専門委員会に、専門委員長及び副専門委員長を置く。

2　専門委員長は、委員会委員のうちから理事長が指名する。副専門委員長は、委員会委員のうちから専門委員長　が指名する。

3　専門委員長は、専門委員会を統括し、代表する。

4　副専門委員長は、専門委員長を補佐する。

（専門委員会の任務）

第10条　専門委員会の任務は、次の各号のとおりとする。

(1) 百年史の刊行計画案の作成
(2) 百年史の執筆・編集・校訂
(3) 資料の調査収集、その他百年史編纂に関すること

（専門委員会の運営）

第11条 専門委員長は、専門委員会を招集し、議長となる。

2 専門委員会は、必要に応じ、専門委員以外の者を出席させることができる。

（経費）

第12条 委員会及び専門委員会の経費は、国士舘史資料室の予算を充てる。

（委員会及び専門委員会の庶務）

第13条 委員会及び専門委員会の庶務は、国士舘史資料室が担当する。

（改廃手続）

第14条 この要綱の改廃は、理事長が決定する。

附　則

この要綱は、平成21年5月27日から施行する。

国士舘百年史編纂委員会要綱は、令和3年5月31日付で廃止（国士舘会報第3－84号）

国士舘史資料室規程

（趣旨）

第1条　この規程は、国士舘史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

（目的）

第2条　資料室は、国士舘の歴史に関わる文献、文書及び　物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

（資料室長）

第3条　資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2　資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

（職員）

第4条　資料室に、必要な職員を置く。

（学術調査員）

第5条　資料室に、学術調査員を置くことができる。

2　学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3　学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

(1)　本学の理念及び本学史に関すること

(2)　資料の収集・整理・保管等に関すること

(3)　年史・資料集等に関すること

(4)　その他資料室に関わる学術的事項

（専門員）

第6条　資料室に、専門員を置くことができる。

2　専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

(1)　資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集

(2)　年史・資料集等の企画及び編纂

(3)　その他資料室に関わる専門的事項

3　専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（収集資料）

第7条　資料室は、次の資料を収集する。

(1)　国士舘の建学の精神に関する資料

(2)　国士舘の発展の経緯に関する資料

(3)　国士舘が設置する諸学校に関する資料

(4)　国士舘の創立者及び先人に関する資料

(5)　その他国士舘に関する資料

（所蔵資料の開放）

第8条　資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2　資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

（資料の貸出し）

第9条　資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

（資料の管理）

第10条　資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附　則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

『国士舘史研究年報　楓原』執筆要項

国士舘史資料室では、『国士舘史研究年報　楓原』に掲載する、国士舘に関わる論文や国士舘在学中の思い出を綴った原稿などを募集します。執筆を希望される方は、必ず事前にお問い合わせください。

◇注意事項

・原稿は書き下ろしとし、他誌との二重投稿はご遠慮下さい。

・編集の都合上、原稿の修正や次号以降への掲載をお願いする場合、または掲載をお断りする場合もあります。

・原稿は、『国士舘史研究年報　楓原』および学校法人国士舘のウェブサイト（ＰＤＦ）で公開されますが、これらの著作権はすべて学校法人国士舘に帰属します。

◇原稿について

・原稿はＡ４判（横長）、四〇字×三〇行、縦書きで提出してください。図表はこの限りではありません。

・原稿は四〇〇字詰原稿用紙に換算して、次の枚数を目安にしてください。（図表・図版・写真・註を含）

論　文	五〇枚程度
研究ノート	二〇～四〇枚程度
国士舘を支えた人々	五～七枚程度
国士舘の思い出	五～一〇枚程度

・写真・図版等で掲載・転載許可が必要な場合は、執筆者が許可を得てください。

・写真や表計算ソフト等で作成した図表は、別ファイルにして提出してください。

・ご提出いただいた原稿は返却いたしません。

・原稿締切　毎年九月末日頃（翌年三月刊行予定）

【お問い合わせ先】

学校法人国士舘　国士舘史資料室
〒１５４－８５１５
東京都世田谷区世田谷４－２８－１　柴田会舘２階
ＴＥＬ：０３－３４１８－２６９１
ＦＡＸ：０３－３４１８－２６９４
Email：archives@kokushikan.ac.jp

編集後記

『国士舘史研究年報　楓原』第13号をお届けします。昨年3月末に『国士舘百年史　通史編』を上梓し、百年史編纂事業を完遂しました。これまでも節目の年に写真を中心とした記念誌を刊行してきましたが、『国士舘百年史』3冊は記録資料に基づいた学術的な内容の沿革史となっています。本誌とあわせて学園史研究にご活用ください。

心機一転、本号から表紙デザインを刷新し、あわせてお問い合わせが多かった「楓原（ふうげん）」の誌名の由来も掲載しました。その名の通り、これからも国士舘の起源を明らかにする一助となるべく、一層のご協力・ご愛顧をお願いいたします。

折しも本号の編集中、初代室長で本学名誉教授の阿部昭先生の訃報に接しました。当室の発足や「楓原」の名付け親でもあり、また百年史編纂事業の基本方針などの基盤づくりも主導されました。昨年5月まで百年史編纂委員会顧問および副専門委員長として、ひとかたならぬご尽力を頂いた阿部先生のご冥福をお祈りいたします。

（畠山典子）

執筆者紹介（順不同）

大澤　英雄　学校法人国士舘理事長
西田　彰一　立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員
岡　佑哉　愛知学院大学非常勤講師
大庭　裕介　国士舘大学非常勤講師
望月　愉見子　元学校法人国士舘職員

国士舘史研究年報　楓原　二〇二一　第13号

令和4年3月11日発行
編集　国士舘史資料室
発行　学校法人国士舘
〒一五四―八五一五
東京都世田谷区世田谷四―二八―一
TEL〇三―三四一八―二六九一
FAX〇三―三四一八―二六九四
E-mail　archives@kokushikan.ac.jp
印刷　河北印刷株式会社

ISSN 1884-9334